
ランス?の世界に刀語のキャラを突っ込んでみた

黄金の庶民

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ランス?の世界に刀語のキャラを突っ込んでみた

【Nコード】

N4323V

【作者名】

黄金の庶民

【あらすじ】

タイトルにある通りです。

最初の方はあんまりランスキャラとの絡みは無いかもです。出てくる刀語のキャラはそれほど多くはならない予定です。主役は一応仮面の彼なんでよろしくお願いします。

久々なんで誤字脱字があるかもです。

尚、キャラの性格、口調、その他もろもろが作者の技量不足によって大幅に変わることがあります。

イメージに合わない、こんなの○○じゃねえ、などと思うかもしれませんがご了承ください

プロローグ的な物（前書き）

前語り（パチパチパチ

とりあえず自分で思った疑問やら何やらを自己完結させていこうと思います。

Q・なんで今更ランス？？鬼畜王とか戦国じゃ無いの？

A・鬼畜王はやったことない、そして何故？なのかは今現在やるから。

戦国は一回クリアしたけどデータが消えてディスクも手元にないか
らプレイ出来ないのです。

Q・なんで刀語？

A・嵌ってるからです。

Q・ぶっちゃけ需要ある？

A・無いかも、まあ自分が読みたいものがなければ書け！的なノリ
Q・続くのか？

A・若干は書き溜めてるからそれをちょいちょい出しつつ原作入っ
たらプレイし直しつつ書いていく予定かな？

今のところはこんな感じです。

本当は完結まである程度の道筋を作ってから投稿する予定だったん
ですがやっぱり反応や意見・感想が欲しくて投稿しちゃいます。

でもやっぱりこの組み合わせに需要があるのかどうくあwse
d r f t g y ふじこ l p , @

激しく不安ですが良ければ読んでやってください

プロローグ的な物

しのばずほういかさずころさず
「不忍法不生不殺

——否、断罪炎刀！」

「虚刀流奥義！」

激突——二人の男が互いの死力を尽くし、衝突した。

その衝撃は辺りの壁を傷付け、床はおびただしい量の血で染められている。

撃つ・切る・突く——互いに得物と拳を相手よりも多く、自身が傷つくことを何一つ恐れずに戦う……

——永遠に続くかに思われた戦い、だが終わりは思いのほか早く訪れた。

「七花八裂・改！」

七つの奥義を一切の隙を無くし同時に相手に叩き込む奥義が炸裂した。

——それが決まり手となり得物を破壊された男は倒れ込んだ。

「————ひ……め……さ……ま」

男は死に掛けだった——否、死に体と言っても過言ではない。

——打撲裂傷骨折刺傷……あらゆる外傷が全身に刻まれ、部

屋中に刻まれた戦闘痕が戦いの激しさを物語っていた——そしてその戦いに男は負けたのだ。

「貴方のために死ぬ事を・・・お許してください——」

既に虫の息ながらも男が無意識に発した言葉は自身の主への謝罪だった・・・

——決して誰かに聞いて欲しい訳ではなかった、だが今まで自分は殺した相手の最後の言葉を必ず聞いていた。

「(そして・・・これが私の最後の言葉と言う訳か)」

薄れ行く意識の中で男はそう思った、

別に死など恐れてはいない、何故なら今の主に仕える遙か前から死とは隣り合わせの生活だったのだ・・・それが今ではどうだ？

死は恐く無い——だが残された姫はどうなる？無駄だと分かりきっているのにそんな思考が止まらない・・・自身の死に我が姫は悲しむのではないか？

「(不有、ありえず我が主はそこまで弱くは無い)」

好敵手から何度落とされようが自力で這い上がる強さを持った主が自身の死程度で悲しむ訳が無い——仮に、もし仮に悲しんだとしても、そんなもの直ぐに割り切るだろう。

「(虚刀流・・・お前の主を殺した私の身勝手な願いだが・・・お前がこの後どんな選択をするかは知らないが・・・もし姫様を殺さないのならば今後はお前が姫様を守ってくれ)」

言葉には出さず、去っていく自分を斃した者の背を見ながらそう伝えた男はとうとう息絶える——ハズだった。

「(——何だ・・・コレは!?)」

——歪み

そう表現すれば良いのだろうか?

仰向けに倒れている男の目の前の空間がまるで歪み捻れたように変化していく

そしてその歪みの奥から途方も無い『闇』——まるで全てを飲み込むような深い闇が現れたのだ。

——それはまるで・・・

「・・・地獄への・・・扉か?」

まだ声が出たことに驚く、思いのほか自分は見苦しくも生き苦しい人間のようなのだ

男は無意識に『地獄』などと口にしたが、別に死後の世界を信じている訳ではない、だがそれでも、そう思わずにはいられないほどの不気味さが目の前にあるのだ。

「(——まあいい・・・所詮死ぬ身だ、何処へなりとも連れて行けばいい)」

歪みから這い出た闇が自身を包んでいく中、とうとう男の意識は墜ちたのだった。

やがて数瞬もしないうちに闇は晴れた時・・・男の姿何処にも在らずその世界から消滅していた。

——そして男は目覚める・・・自身の全く知らない世界にて。
そこで男——かつての名を捨て、全てを否定する姫に仕え続けた
男『左右田 右衛門左衛門』が降り立つ物語の舞台は『魔法大国ゼ
ス』

魔法のまの字も知らない右衛門左衛門がどう生きていくのか？

それは、これから語っていきましょう。

「ちょっと!?! 突然何!?!」

貴方大丈夫なの? って意識が無いし全身傷だらけ!?!?
アニスッ! だれか聖魔法が使える人連れてきて!?!」
始まり始まり

プロローグ的な物（後書き）

右衛門左衛門メンドクサイ（挨拶）

と言う訳で後語り（ドンドンパフパフ）

Q・急展開すぎない？

A・ご都合主義・・・いい言葉だ。

Q・クジラとかどうしてんの？

A・テンプレ的転生神様の役割してんじゃね？出てないけど

Q・じゃあ仮面さんがゼスに来たのはクジラの仕業？

A・そう言う事にしといてください。ぶっちゃけ鬼畜王したことになるからWikiだよりの知識しかないのよクジラについては。

Q・作者の原作知識はどんなもん？

A・ランスシリーズは？と戦国以外は本当にWikiだより、刀語はアニメ全部見たけど原作は未読・・・だってどこにも売って無いもん！

えっ？アマゾン？通信販売とかやったこと無いからわかりましえん！！

誤字脱字の指摘 感想大歓迎です

ブログだけじゃ何なんで一話も出しときます(前書き)

誤字脱字の指摘

ご意見、感想待ってます。

プロローグだけじゃ何なんで一話も出します

山田千鶴子是不機嫌だった。

「(まったくあいつ等は何時も何時も自分の事しか考えてないんだから・・・二級市民には人権すらないとでも思ってるのかしら)」

何時ものように四天王は自分しか出席しない会議で腐敗した格長官達からの呆れるほどに自身達の利しか考えていない法案を出されてはそれを却下する。

するとそのことに対して何時までもネチネチネチ文句を行って来る無能共に四天王のなかでも自他ともに良識派と知られる千鶴子でも愚痴らずにはいられないのだろう。

だが、何時までも同じことに思考を費やすわけにも行かない千鶴子は直ぐに別の事に氣を向ける。

「そう言えば・・・今日で3日目よね・・・あの不思議な男が転移してきたのは・・・」

思い出すのは3日前——突然目の前に転移してきた謎の男に関してだ。

赤い髪を後頭部で括り血塗れで傷だらけの洋服を纏い・・・そして何より顔のほとんどを隠す『不忍』と大きく描かれた仮面を被り、まるで舞踏会に出かけるかの様な格好をした男が何の前触れも無く

目の前に落ちて来たのだ。

さらにその男は全身傷だらけで何時死んでも可笑しくない危篤状態だった・・・何時もはウツカリかます弟子のアニスが今回はちゃんと治療師ヒーラーを連れてきたので九死に一生を得たが、未だ男は目を覚まさない。

「（今日はもう仕事も無いし・・・ちよつと様子を見てみようかしら・・・）」

窓の外を見れば、既に辺りは暗くなっている―――ならば今更多少寄り道したところで変わらないだろうと思い、男の眠る部屋へと向かっていった。

だが予想外なことに、部屋に入った千鶴子の目に寝かされていたベッドから上体を起こしていた男が映った。

「―――驚いた・・・意識が戻ったのね」

一瞬、動揺が走る千鶴子だが直ぐに持ち直し男へと話しかける

だが男は特に反応することも無く部屋の様子や自分の体の観察（仮面のせいで分かり難いが）をしている様だ。

「・・・まだ混乱しているようだけど、貴方すごい重傷を負っていたのよ―――それこそ死んでも可笑しくない位の重傷よ・・・」

治療した娘の話では意識が戻るかどうかも分からなかったそうよ」

——ちなみに、男の治療を頼んだ際には始めは治療師は若干抵抗した、四天王の命とはいえ二級市民らしき男の治療をするのが不満だったからだ・・・最も千鶴子が男は突然転移して自分の前に現れたので、転移魔法が使える高位の魔法使いかもしれず、何らかの事故で転移魔法の失敗しやって来たのかも知れないと

その場で考えた嘘八百で誤魔化し、何とか治療させたのだ。

「そうそう、貴方の服はボロボロだったから着替えさせたわよ・・・前の服の修繕は難しそうだったから必要なら同じ服を用意させるわ」
実際、今の男の服装はボロボロの洋服ではなく、入院患者が着るような緑の服だ

「・・・と言っても、貴方はここに不法侵入して来たって事になってるから、ある程度の事情聴取をしなければいけないんだけど・・・——そろそろ何か答えてくれないんじゃない？」

千鶴子がそう言うと、今まで黙っていた男がようやく仮面に覆われていない数少ない部分である口を動かした。

「不答^{こたえず}」

ようやく男が発した第一声は拒否だった。

「————はい？」

いくつかのパターンを考えていた千鶴子は予想外の返答に思わず聞き返した。

「まだ私は状況が把握仕切れていない、それに若干の記憶の混濁もある。

よって、今すぐに全ての返答はすることが出来ない・・・と言うことだ」

「ああ、そう言うこと」

すぐさま続けられた男の補足に納得する千鶴子だった。

——考えてみればこの男は三日間も生死を彷徨っていたのだから混乱するのも仕方ないか・・・
そう考えた千鶴子は一先ず男の状況判断を手伝うことにした。

「分かったわ・・・私は暫らくここに居るから聞きたいことがあればどんどんいつて頂戴
答えられる範囲で答えてあげる」

「感謝する

——では先ず一つ目に、ここは何処だ？」

「どこ——って言うのがこの場所のことを指しているのならば、ここはゼス王国の首都『ラグナロックアーツ』よ」

その答えに男は暫らく考える素振りをした後再び口を開く。

「では二つ目に・・・何故私は生きている？
確実に致命傷を負った筈だが」

「それは優秀な魔法使いがいたからよ・・・貴方も運が良いのか悪

いのか・・・転移したのがここじゃなかったら確実に死んでたわよ」

「――魔法？ 転移？」

「ええ――覚えて無いの？」

貴方私の目の前に空間転移して落ちてきたのよ」

それを聞いた男は今度は本格的に考え込んだ、今聞いた答えを吟味するかの様に・・・

「（・・・・・・嘘ではないか・・・・この女は目は人を騙そうとはしていない・・・・

確証はないが私の質問にも真剣に答えている

だが・・・魔法？

アレだけの傷を負った私を治すところから通常の治療ではないのだろうが・・・仙術や忍術の類か？

――いや、この女は今『優秀な魔法使い』と言った・・・優劣があるということは最低でも競い合う程度にはその魔法とやらを使う魔法使いとやらがいるはずだ・・・

そして何よりも『ゼス王国』だと？

日ノ本にはそんな国など有りはしない・・・ならば大陸（海の向こう）か？

――否、私も大陸については多少なりとも調べているがそのような国は聞いたことも無い・・・つまりどう言うことだ・・・

――――^{わからず}不解、まだ情報が足りないもう少しこの女から聞き出すか）

「――すまない・・・3つ目だが・・・日ノ本と言う国を知っているか？」

「・・・・・・・・恐らくは東方にある島国のはずだが」

「――日の・・・本？」

悪いけど分らないわ・・・大陸の東部にある島国なら J A P A N
と言う小さな島国ならあるけど・・・もしかして貴方は J A P A N
から来たの？」

「（ジャパン・・・か・・・確か外来語では日ノ本はそう呼ばれて
いたが・・・一先ずはそう言うことにしておくか）不違^{ちがわず}、まだ記憶
は曖昧だがどうやらそのようだ」

「ああ、やっぱりそうなの・・・何処と無く雰囲気大陸の人とは
違うと思ったのよ

「――そう言えば、まだ名前を聞いてなかったわね

私は山田千鶴子^{やまだちづこ}、苗字は嫌いだから千鶴子と呼んでくれれば言いわ

――

貴方は？」

律儀にも自分から名乗ってきた相手に同じく律儀な男は答えた。

「左右田^{そうだ}――右衛門左衛門^{えもんざえもん}だ

好きに呼ぶといい」

かくして、この二人は今後思いのほか長い付き合いになっていくの
だが・・・この時はまだお互いに名を名乗りあうだけなのであった。

プロローグだけじゃ何なんで一話も出します（後書き）

状況確認して名乗り合うだけの話でした。

もうちょっとこのgdgdな感じが続きますがご容赦ください。

山田の口調がわかんねえ（泣）

不〴〵の口調を考えるのは楽しいけど結構難しい、西尾さんはよくこんなキャラクターを作れるもんだなぁと素直に関心する今日この頃。

ご都合主義って本当に便利な言葉だと実感する二話的な物（前書き）

前語り？

サブタイ長いね、暫くは続きを書きながら書き溜めをチヨコチヨコ放出してくので基本的に一話一話が短いんでご容赦ください。

「ご都合主義って本当に便利な言葉だと実感する二話的な物

お互いに名乗り合った後、右衛門左衛門は千鶴子と数回の問答を終わらせ、一人考えていた。

「（結局、あの子の問答で分かったことは私の理解に及ばぬことばかりか・・・」

——不動揺うろたえず、本来死ぬはずだった命、今更どの様な体験をしようとも気にすることも無いか・・・）」

最終的にそう結論つけた右衛門左衛門は自身の主とのとある会話を思い出していた——

「ねえ、右衛門左衛門・・・あんた『別世界』ってあると思う？」

それはある日、何時もの様に右衛門左衛門が報告と護衛のために天井裏にて待機していた時のこと。

彼の主、尾張幕府直轄内部監察所総監督である否定姫が何時ものように唐突な話題で右衛門左衛門へと話しかけたのだ。

なきにしてもあらず
「不無有・・・ですが質問の意味が抽象的過ぎて正確には解りかねます」

「相変わらず頭が固いわねえ

私の部下であるなら1を聞いて100を知るくらい努力しなさいよ
——仕方ないから今回は1から10まで説明してあげるけど」

「ありがとうございます」

「お礼を言われたい訳じゃ無いわよ全くつまらない男ねえ

たとえばさあ、今私達の存在^いする時代って、四季崎記紀が歴史を改変しようとして出来たわけじゃない？

ならさあ——普通に考えれば四季崎が改変しなかった本来の歴史って言うのも当然あるじゃない？

——それってつまり私達のいるこの世界とは微妙に違う『別世界』って事になるじゃない？」

「確かに・・・所謂『もしも』の世界と言うわけですね」

「そうよく、あの時もし自分が右ではなく左に向かっていたら・・・そんな簡単な分布点はこの世に何千何万とあるんだから一つや二つくらい別の世界があってもおかしくないでしょ」

「・・・・・・・・・・ですが、それを確かめる方法はありません」

「其れ位分かってるわよく気が利かないわねえ・・・確かに行ってしまえばこの時代が本当に四季崎記紀が歴史を改変した結果に出来たって言う確証も無いわけだし」

目に見えないモノを確かめるには自分の目で見るしかないのよねー
見えないモノを見るなんて矛盾してるけど、コレばかりは私にも否定できないのよねえ」

そう言って否定姫は不機嫌そうに体を後ろに倒し天井を眺めた。

「ほんと、私が否定できないなんて不愉快だわ・・・右衛門左衛門あんたちよつと行って来て『別世界』の存在を立証してきなさいよ」

「それは構いませんが・・・仮に本当にその『別世界』があったとして、私が証明したとしても姫様が確証できるとは限りませんよ」

「本気にしてんじゃないわよ、あんたをからかっただけだって言うのに反応も面白くない男ねえ」

「・・・申し訳ありません」

「あやまって欲しい訳でもないわよ、もうあんたと話してても詰まんないわ

気紛れに考えた仮設をあんたに話した自分を否定するわ

もう良いからあんたはさっさと次の仕事にでも行ってきなさいよ」

そう言っているが、任務に向かおうとした右衛門左衛門を呼び止めたのは彼女であった筈なのだが・・・本人もその従者も全く気にしていない辺りこの様なやり取りは何時もの事なのだろう。

「（――ふっ、なるほど・・・私は今になってあの命令を果たしたと言う事になるのかな

尤も、この世界の存在を姫様に伝える術など私は持ち合わせていないのだがな）」

回想を終えた右衛門左衛門はどこか自嘲気味に笑みを浮かべていた。

「（しかし、何の因果か私は別の世界とやらに来てしまった・・・だが姫様もないこの世界で私は何をすれば言いのだ・・・私の全ては姫様のために有るというのに

——いっそ、あの虚刀流のように死に場所でも求めてみるか」

——本当、死んでしまってもつまらない男よねえあんたは

「——ッ姫様!？」

——別に私はもうあんたを使う気は無くなったし、私は私で勝手に生きてくから、あんたはあんたで勝手に生きてけばいいじゃない・・・なんだったら今まで私に仕えてきたあんたを『否定』してあげてもいいのよお？

——それが嫌だったらあっさり死ぬんじゃないわよー一応あんたは私の“元”部下なんだから

「・・・幻聴・・・か？」

——否、それにしても鮮明に聞こえて来たが

・・・つぶ、どうやら私はこの世界でも簡単に死ぬわけには行かないようだな」

右衛門左衛門が聞いた声は本当に幻聴だったのか、はたまた四季崎の血を受け継ぐ否定姫が何らかの方法で送ってきた意思なのかは分からないが・・・

どちらにせよ、この男は敬愛する主の命に逆らう男ではなかった。

「そうだな、一先ずは初心に帰り、忍びとして情報を収集するか」

——それならば、あの女に仕えるのが最も確か

そう言って今後の方針を決めた右衛門左衛門は暫しの休息のために意識を沈めるのだった。

同時刻

「——ほんと、

死んだ後もつまらない男よねえ、アイツは・・・」

「ん？どうかしたのか？」

「なーんでも無いわよ七花君」

右衛門左衛門の飛ばされた世界から遠い世界のどこかで、このような会話がなされたのであった。

ご都合主義って本当に便利な言葉だと実感する二話的な物（後書き）

後語り

右衛門左衛門、姫との語り合いを思い出す。

ぶっちゃけ内容これだけで超短いね、ぶっちゃけ書き溜め切れるまで暫くマジにこんな感じなんで叩くのは勘弁してほしいなあーって
先手打ってみたい。

Q・この話意味あったの？

A・あります、強引だけどこうしないと右衛門左衛門が否定姫以外に仕えさせる事とか不可能なんで。

Q・姫さん異世界テレパシーなんて出来んの？

A・それがご都合主義くおいていー、先祖が未来予知できる変態刀鍛冶なんだし出来ても良いんじゃない？

Q・話進んでなくね？

A・キャラが勝手に喋るんです、進んでくれないんです。

今日はこんなもんで誤字脱字の指摘・感想（こんな薄い内容にある訳ないか）があればよろしくお願いします。

不忍男レベルの概念に戸惑う三話（前書き）

前語り

Q・今のところ毎日更新してるが大丈夫か？

A・大丈夫だ・・・問題・・・あるね、このペースじゃ対してない書き溜めがすぐになくなっちゃうね・・・早く原作まで作らないと

お気に入り登録してくれた7人の方々ありがとうございます

不忍男レベルの概念に戸惑う三話

「右衛門左衛門さん、起きてるかしら？」

最初の邂逅から三日たったある日、千鶴子は再び右衛門左衛門の病室へと来ていた。

「千鶴子殿か・・・起きている」

礼儀として扉の前から声をかけた千鶴子に右衛門左衛門は扉越しにそう返す

「あら、早いよね・・・朝早くから突然で悪いけど入っても良いかしら？」

「不構かまわず、それに突然と言っても私は千鶴子殿が此方に向かっていることには最初から気付いていたので特に驚きは無い」

その発言に多少驚きつつも顔には出さず、千鶴子は部屋の中へと入って行った。

「それで、何のようかな？」

先日聴きそびれた事でも合ったのか？」

やって来た千鶴子に対して開口一番に右衛門左衛門はそう言った。
それに対して千鶴子は――違うわよと言いながら両手で抱えた少し
大きめの箱を部屋の机に置いた。

「これ、貴方が着ていた服に似せて作らせた服よ」

そう言われ右衛門左衛門は回復してきた体を動かし箱の中身を確認
すると、確かに以前に来ていた元の世界の時代には不自然な洋風の
服が入っていた

「―――どうかしら？」

一応前のものと全く同じに作らせたつもりだけど」

その後、入院服から元の洋服に着替えた右衛門左衛門へ千鶴子が尋
ねた。

「不問題有、もんだいあらず以前と比べても違和感は無い」

「そう、それはよかったわ・・・私としてはもう少し装飾を増やそ
うかと思っただけだね」

そう千鶴子が言うのと右衛門左衛門は千鶴子の着ている煌びやか（悪
趣味）な服を少し眺め

「不必要、ひつようあらず私は本来隠密なのでな
そのような無駄に目立つ装飾は遠慮願いたい」

自分の意見を真っ向から反対された事に若干肩を落とす千鶴子だが、直ぐに持ち直す。

「それより、さっきの話なんだけど・・・
私に仕えたいって本気なのかしら？」

「ああ、私は元々は我が主の為に生きてきた・・・だがその主に再び会うことはもはや無いだろう・・・
ならば、本来死に行く我が命を拾ってくれた千鶴子殿に仕えるのが今の私に出来る唯一の事だ」

「・・・主にもう会えないって言うのはどう言うことかしら？」

「言葉通りの意味だ」

「そう・・・ごめんなさい、無神経なことを言ってしまって」

「かまわず不構、私にとってはもう過ぎたことだ」

もう会えないと言うのは（おそらくは）別世界に来てしまった以上元の世界に戻る目処も無いために会うことは出来ないという事なのだが、千鶴子は違う意味合いで取ってしまい謝罪をしたが、右衛門左衛門も特に訂正しようとはしなかった。

「――ともかく、それで私に仕えたいって事なのね・・・（素性はまだハッキリしてないから、監視目的に目の届く所に置いていた）
いと思っていたからその提案は悪くも無いけど・・・」

そう思いながら千鶴子は右衛門左衛門を見る。
顔の大部分を隠した不忍と描かれた仮面、この時点で怪しい事この

上ないが千鶴子は一度右衛門左衛門が眠っている時に素顔を見ていたので仕方ないことだと思っている。

率直に言うところ“無かった”のだ、本来顔のパーツがあるべき場所にそれぞれのパーツが無かったのだ、正確には何と表現すればよいのか千鶴子には思い浮かばなかったが恐らくは何らかの呪いを掛けられたのだろうと予想することしか出来なかった。

「（まあ、嘘を付いてる感じもしないから、言ってる事は本心なのかしら・・・
だだとすると、コレはチャンスかしら？）」

今、この国は腐っている・・・言い方は悪いがこの表現が一番合っているだろう。

開国から受け継がれ、今では徹底されている魔法第一主義思想、魔法を使えない二級市民は家畜同然と考えている高官達、国の王たるガンジー王自らが世直しをしているが、成果は微々たる物。

変えねばならぬと考えている千鶴子にとっては金や仕事のために動く部下よりも恩で動く部下の方がずっと都合が良い。

それにより、敬愛するガンジー王の負担と気苦労が少しでも和らぐならば・・・

「そうね・・・まだ貴方が信頼にたる人物だと分かるまでは返事は出来ないわ」

「道理だな、私のような得体の知れない人間を直ぐに部下に出来るとは私も思っていない」

「その通りよ、だからもう直ぐその傷も完治するだろうし、その後

に貴方の実力を試験をして見せて貰いたいわ、試験方法はこちらで用意するけど良いかしら？」

「わるからず不悪、むしろその程度で良いのか私が疑問に思うほどだ」

「納得して貰えたのね？」

それじゃあ続きは追って説明していくからもう暫らくここに居てね・・・ああそれと、私も仕事があるから試験が何時になるかは分からないわ」

「そうか、ならばその間に鈍っている体を鍛え直しておこう」

「あら、それならレベル屋の場所も後で教えて置くわね」

「ああ・・・ん？レベル屋？」

「知らないの？」

この世界にはレベル屋と呼ばれるものが存在する。

レベル屋とは、経験値を積んだ者がレベルアップの儀式を執り行う場所である。

そもそもこの大陸で暮らす生き物達には皆生まれ付き定められたレベルがあるのだ。

そのレベルの種類は大きく分けて技能Lvと才能Lvに分けられる。――技能Lvは文字通り各々が持っている技能をLv1～Lv3の三段階にランク分けしたものでコレは後者の才能Lvとは違い生まれ持った資質のために基本的に変動することは無い。

そして才能Lvは才能限界と呼ばれるその者がどれだけ強くなれるかを示す上限があるが、その上限までなら、経験値を積むことで先

に言ったレベル屋やレベル神によって上げることが出来るのだ。

つまり、言ってしまうえばこの世界は才能が物を言う世界なのだ、幾ら努力をしようとも決定的に才能の差があれば決して勝つことは出来ない残酷なシステムなのだ。

——そしてそれは別世界からの訪問者にも例外は無い・・・

「——と言うことだけど、理解できたかしら」

「不信、しんじられず理解は出来てもまるで信じられないな・・・つまりはここでは幾ら鍛錬をしようともそのレベル屋なる場所に行かなくては一向に強くなれないと言うことか」

「一応大陸では常識の筈なんだけど・・・JAPANにはレベル屋がないのかしら？」

ちなみに、JAPANでは特殊なアイテムを使うか、ダンジョンの最深部に到達すれば（何故か）レベルが上がるようになっていて、レベル屋は無い（はず）

「少なくとも、私が知る限りでは始めて聞いた概念だ」

「んー、じゃあまだ時間もあるし、案内ついでに貴方のレベルを計りに行ってみる？」

「不断、未だに信じられないが、一先ずは体験してみなければどうにもならないな・・・それに、今の実力も計れるならば良い目安にはなるはずだ」

尚、この後レベル屋にてステータスを計ったところ、千鶴子がいい意味で驚くのだった。

現在の右衛門左衛門のステータス

LV25

攻撃力430

魔法力0

防御力36

魔抵力20

回避力60

弱点属性・雷

SKILL

攻撃（手持ちの武器で攻撃します。 敵単体）

手裏剣（手裏剣を投げます。 敵単体／遠距離）

手裏剣乱れ打ち（大量の手裏剣を投げます。 敵全体）

相生拳法背弄拳（敵の背後に回りこみ攻撃する。 敵単体／一定確立で即死させる）

不忍法不生不殺（右衛門左衛門の必殺技、大きなダメージを与える。 敵単体）

技能LV

剣戦闘LV1

格闘LV2

忍者LV2

射撃LV2

ちなみに、この世界では技能LVは2つか3つ持っている者は希少

であり、千鶴子の知るところで技能LVを4つ（一つは何故か使用不可になっているが）も持っているのは右衛門左衛門が初めてであった。

不忍男レベルの概念に戸惑う三話（後書き）

後語り

今更だけど、この話はフィンフィクションです、実際のキャラの性格・話し方・その他もろもろが作者の都合や力量不足で変わってしまいう事がありますがご容赦ください。

Q・本編の内容って言うか右衛門左衛門ステータスってどう言う基準？てゆーか強いのか？弱いのか？

A・結構適当です。回避力については忍者LV1のかなみがこのレベルの時にこれより少し下だったかなー？位の基準にはしました。

Q・右衛門左衛門の才能限界値ってどのくらい？

A・だいぶ高いです、それ以上は詳しく決まって無いのでノーコメントで…まあ最低でもかなみよりはずっと高いのは確かです。

誤字脱字・感想お待ちしております・・・こう続けるとくどいかと思ったり思わなかったり

第四語（前書き）

サブタイめんどくなった（挨拶

今回最初の方だけ若干グロ注意です。
ご注意ください。

第四語

——右衛門左衛門がレベルを計った日から数日の時が経った。

現在——右衛門左衛門は首都を離れ、とある森にてモンスターを狩っていた。

「——何度見ても変わった生き物だ・・・」

人間の子供ほどの大きさの埴輪の様な生物——ハニーを手持ちの剣で碎きながら右衛門左衛門は呟く。

「は・・・はにほー!!」

仲間を殺され（壊され）たハニーがハニー特有の攻撃、ハニーフラッシュを右衛門左衛門に向かって放った。

「——ック！厄介な攻撃だ」

ハニー族が顔の穴から放つ衝撃波はどれ程回避に優れていても躲すことが出来ず、さらにはどのような防具を着けていても防ぐことが出来ない厄介な攻撃だ・・・

——最も、この森に存在するレベルのハニーの攻撃力はたかが知れているので致命傷には至らないが。

右衛門左衛門はハニーフラッシュを放ってきたハニーに向かって手裏剣を投げて撃退すると、次にヤンキーと呼ばれる木の棒バットを持った人型の魔物に狙いを定め、一気に接近し瞬時に首を切り落とした。

首が離れたヤンキーの胴体は暫らく切断面から鮮血を噴き出させた後、糸が切れたかの様に倒れ付した。

「――ふむ・・・もはやこの程度の相手では特訓にもならないか」

最初の頃は、人間とは勝手の違うモンスター達に多少梃子摺る事も合った右衛門左衛門だが、数日繰り返し返せばもはや初期ダンジョン程度のレベルでは敵にもなくなっていた。

と言うよりも、元々右衛門左衛門の現在のレベルなら、初めからこの程度の敵に手間どる事こそ無いのだが・・・

「――だが、やはりここ数日の違和感に間違いは無い様だな・・・以前より明らかに戦闘力が落ちている・・・」

そう――右衛門左衛門がこの付近で特訓（リハビリを兼ねた）をし始めた際に真っ先に思ったのは魔物たちの奇怪さでは無く、自身への違和感だった。

気のせい・・・と言うには大きすぎる自身の衰え。

真庭鳳凰や鑢七花と戦った全盛期とも呼べるつい先日までの自身の戦闘力に比べ、今の自分は脆弱すぎた。

確かに傷の完治のために多少の衰えは有るだろうと感じ千鶴子へ自分から提案したことだが、その衰えは予想以上だった。

――その原因は恐らくはこの世界の理だろう、先日千鶴子が右衛門左衛門に説明したように、この世界にはレベル

と言う概念が存在する。

そしてそれはこの世界にいる限り例えどんな者であれその理から逃れることは出来ない。

当然、本来そのような概念の無い世界からの訪問者、右衛門左衛門もその理に縛られ、強引に現在のレベルを決められてしまったのだが、そのレベルが本来の実力より少なく設定されてしまったのだ。

———最も、コレはその時にならねば分からない事だが、才能限界が本来より高く設定された可能性も有るが・・・そのことはまだ右衛門左衛門は知らないし考えてもいない。

「（まあ良い、衰えているのなら以前と同じように・・・否、以前以上の強さを手に入れば良い事だ・・・幸いにも、この世界には敵となる者に不自由はしないだろう）」

眼前に無数の血に沈んだ魔物を見つめながら右衛門左衛門は静かに笑った。

幕間

———帰り道

これ以上この森で魔物を狩ったところで理にはならないと感じた右衛門左衛門は来た道を通り森を抜けようとしていた。

———が、途中で草陰からガサガサと音が鳴り、右衛門左衛門は武器を片手に立ち止まり、出てくるモノに警戒を払いながら気配を探ると。

「キャンキャン」

バニーガールが現われた

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

流石にそんなモノが現れるとは想像だにしていなかった右衛門左衛門は絶句している。

ちなみに、このバニーガールは“キャンキャン”と言う女の子モンスターで人間に似た姿をしているがれっきとした魔物の一種である。

「遊んで遊んで！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

——と言っても、このキャンキャンと言う魔物は人や魔物を問わず誰にでも懐き、あまりにも無防備なために平和の象徴にもされているモンスターなのだが。

「む——遊んでよ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

当然、その様な事を知らない右衛門左衛門は突然出て来た（恐らく）人に似ている魔物を如何するべきかを考えていた。

「（本来、魔物は倒すべき人間の敵らしいが・・・ここまで無警戒

に近づいてくる相手に刃を向けるのは流石に気が引けるな・・・」

任務や主のためなら子供であろうと容赦なく殺害する右衛門左衛門だが、そんな右衛門左衛門をも躊躇させるとは流石は平和の象徴きやんきやん

「ねー遊ば遊ばー」

「不遊、悪いが私はそこまで暇ではないのでな、他の者を当たれ」
あそびず

と言うと右衛門左衛門は再び足を動かし、出口に向かって行った。

きやんきやんは暫らく諦めずに右衛門左衛門に着いて行くが、やがては諦め、森の中へと帰って行った。

それからさらに数日の時が過ぎたある日のこと。

日々のダンジョン攻略によってレベルを3つ程上げた右衛門左衛門は千鶴子に呼び出されていた。

場所は治安維持部隊などが使う訓練所であり、そこには右衛門左衛門と対面する場所に千鶴子の直属の部下である上級魔法使い数名が並んでいた。

「右衛門左衛門君、約束通り貴方の実力試験をするわけだけど・・・何か質問は有るかしら？」

部下と右衛門左衛門の間に立っている千鶴子が右衛門左衛門に問いかける。

「不有、^{あらず}つまりは眼前の敵を打ち倒せば良いのであろう？」

「まあそうだけど、そう簡単じゃないわよ？」

「彼らはゼスの中でも優秀な魔法使いなんだから」

「千鶴子様・・・突然、私達を武装させて呼び出したと思えば――
――私達にこの男と戦えと言う事ですか？」

千鶴子と右衛門左衛門の会話を聞いていた部下の一人が表情には出さない物の、戸惑いの混じった声を上げる。

「――それも無理からぬ事だろう」

千鶴子の部下である彼らは他の一級市民達のように魔法の使えない者を毛嫌いしたり差別する訳では無いが・・・それでもパツと見、腰に剣を下げてはいるが荒事に向いているとは思いつきの右衛門左衛門相手に数人で襲い掛かるのは気が引けたからだ。

だがそんな部下の心中など分かりきっているとばかりに千鶴子は微笑を浮かべ

「そう言ってくれる魔法使いは中々この国にはいないわ、だからこそ私は貴方達を引き込んだのだけど・・・でも心配ないわ
彼は恐らく貴方達よりずっと強いから本気でやりなさい」

止める事も無く、逆に遠慮も要らぬと言い切った。

そこまで言われれば彼等も魔法使いとしてのプライドによって引くに引けず、むしろ自分達の上司にそれ程までに評価されている眼前の男に対して充分に警戒をした状態で構えた。

それを見た右衛門左衛門は相手側の準備はよしと見たのか左右の腰に下げた細身の剣を引き抜きもせず自然体で構えた。

某虚刀流の姉曰く、構えるのは無駄な行為との事だが、右衛門左衛門はただ単純に、彼ら相手には構える必要も無いと悟っただけである

「それじゃあ、お互いに準備は出来た見たいだし

最後に確認して置くわね、右衛門左衛門君は彼らを倒すことが出来たら正式に私の部下として受け入れるわ、貴方達は彼を倒せたら――

――そうねえ・・・まあそれはその時にでも考えましょう」

そう言った千鶴子に部下達は軽く笑みを浮かべ

「千鶴子様、私達は貴方の直属の部下なのです、上司の命令にいちいち報酬など求めませんよ」と言い切った。

「それじゃあ、合図をしたらはじめなさい」

そう言って千鶴子は1GOLD硬貨を取り出し軽く頭上に放り投げた。

それと同時に部下達は詠唱を始める、呪文は明らかに接近戦タイプの右衛門左衛門に長い詠唱は危険と考え、初歩魔法のライトをそれぞれが準備をする。

――そして、コインが地面に落ち、軽い金属音を鳴らした瞬間・・・

右衛門左衛門は彼らの視界から“消えた”

「何ッ!!?」

「——ガハア!?!」

否、実際に消えたわけではなく、彼らの目にも留まらぬ速さで一人に接近したのだ。

そしてそれを認識出来ずに用意していた魔法の撃ち場所に迷った一人の鳩尾に拳を埋めた。

人体急所の一つを（加減されながらも）強打された男は呼吸困難に陥り、ヒューヒューと言う音を出しながら必死で息をしようとすが、もはや呪文を唱えるどころでは無く、千鶴子に戦闘不能と判断された

「——つく! ライト!!」

だが彼らも戦闘の心得を持つ魔法使いであり、右衛門左衛門を視界に捕らえた一人は一息で魔法を放つ。

——が、本来ならば回避の攻撃は右衛門左衛門を捕らえたと思った刹那、右衛門左衛門の体が人間大の大きさの丸太に変化し、丸太を粉碎した。

「何ィ!!?」

人間が丸太に変化したことに当然驚く男だがその背後には既に右衛門左衛門が立っていた。

「変わり身の術と言う物だ・・・忍者の技能としては基本中の基本なので名前など付けてはいないがな」

そう言って頸部に手刀を放ち、男を気絶させた右衛門左衛門は最後の一人へと顔を向けると同時に

他の二人と違い、長く詠唱をしている男の杖に向けて手裏剣を抜き

打ちで放
った。

「—————うわッ！」

想定外からの位置の攻撃で不意を打たれた男は杖を取り落としてしまいい、無常にもカランと音を立てて杖が地面に転がる。

「そこまで！」

急いでそれを拾おうとした男に千鶴子の声が掛かる、
何故と声を出そうと顔を上げた男の眼前には右衛門左衛門が剣を突き出していた。

杖を拾うために上体を下げている自分と既に何時でも自分を刺せる状態の相手・・・どう考えても自分の負けは明らかだった。

第四語（後書き）

後語り

今回で書き溜めの半分は消費してしまった・・・

書きながら出してるけど書くペースと投稿するペースがあっけないなあ・・・

まあ原作前のオリジナル編終了までは何とか一日一更新が出来そうではあります。

Q・レベル20〜30でハニーやヤンキー狩って経験値溜まるの？

A・それ以外にもそれなりに強い魔物もありました、描写してないけど・・・あとは地理も積もればってやつ？

Q・戦闘短くね？

A・レベル差はそこまで極端には無い筈だけど・・・相性の問題だね因みに今回出てきた魔法使いの平均レベルは23です、実はだいぶエリートな方なんですよ瞬殺されたけど

Q・右衛門左衛門って変わり身使えるの？

A・使えます、少なくともこの作品内では使います。使えろと信じます。

Q・ハニーの攻撃が回避不可って？

A・公式だった筈です、少なくともゲーム内では絶対回避できません。

次回に続く

不忍男の初任務な第五話語

その後、試験は当然合格になった右衛門左衛門だが千鶴子が今日は特に頼む事も無いので後日また命令をすることになるのでその場は解散となった。

「（合格するのは半場確信はしてたけど・・・まさか無傷で終わらしてしまおうとは思わなかったわ）」

自室に戻る千鶴子が考えるのは先程の試験の事であった。

「（彼らが弱い訳では無い・・・確かにレベルの差は多少有ったけど最初に初歩魔法で様子見をしようとした判断が間違っていた訳でも無い

——ただ彼が戦い慣れていただけね）」

自分や他の四天王に比べれば天と地程の差がある部下達ではあるが、それでもそこいらにいる傲慢さだけが取り柄の二流魔法使いに比べればずっと優秀な部下を三人も瞬く間に倒してしまった右衛門左衛門・・・しかも相当手加減はしていただろう。

「（これはやっぱり・・・良い拾い物をしたと喜ぶべきかしら?）」

流石にそれは樂觀的過ぎるとは千鶴子自身も良く分かっているが、今後右衛門左衛門の人と成りを理解して、本当に信頼出来るのならばこれ以上無い位に優秀な部下として使えるだろう。

「まあ、それはそれとして・・・彼に頼む仕事を探さなくっちゃね」
そう言って千鶴子は自室への進路を変更し、資料室へと向かった。
った。

指し当たったの問題は、最近急増しているテロへの対策と一級市民を狙う盗人への対処を考えなくてはならなかった。

「盗賊？」

例の試験の二日後、右衛門左衛門は千鶴子にとある盗賊について聞かされていた。

「そう、ここ数か月前から一級市民を狙った正体不明の盗賊が連続出没しているの・・・治安隊も動いてはいるんだけど未だに犯人を見つけることも出来ていないの」

「ふむ・・・では私への最初の依頼はその盗賊の捕縛と言った所か」

「そう言う事よ——あと補足なんだけど、その盗賊はイタリアに出現することが多くて盗んだ物の一部を二級市民に分け与えているから二級市民の中では義賊的に扱われているの」

「義の賊か・・・もしくは偽善の賊か

——しかし、そこまで分かっているなら私が出る幕は無いかと思うのだが？」

右衛門左衛門がそう聞くと千鶴子は苦い表情を浮かべる

「その盗賊なんだけど・・・どうにも動いている人間がハッキリしていないの

手口や侵入方法から同一犯の可能性が高いのだけど目撃証言がバラバラなの」

「バラバラ・・・とはそのままの意味で考えてよいのかな？」

「そうよ、目撃者の一人は犯人は若い男だって言うんだけど別の目撃者は若い女だったと証言したの、他にも老人だった子供だった背が低かった・高かった――とにかく全く一致しないのよ」

「複数犯である可能性は無いのか？」

「その辺りを魔法で調べた所でも同一犯の可能性が高いのよ・・・恐らくは犯行の度に変装をしてるんだろうけど、骨格や性別まで変えられるとなるとこっちも御手上げだわ

――それに、さっきも言ったように二級市民からの人気は高いから目撃していても庇っている人も多いの」

だから証言は殆どが魔法使いの物なの――とため息交じりに千鶴子は締め切った。

「了承した、一先ずその犯人を捜し出すが…その後はどうする？」

「出来る限りは拘束して欲しいわ、被害に合っているのは一級市民ばかりだから被害総額は相当な物になっているの――治安隊の面子の問題もあるから私の独断でその犯人の対処するのも拙いのよ――出来る？」

「不問題有、発見さえしてしまえば逃がす事はないだろう・・・では、私は網を張ってその義賊擬きを探しに行くでしょう」
そう言うのと右衛門左衛門は一瞬の内にその場から消え去った。

「—————まあ、こんな素早さで移動できる彼なら見つけてしまえば逃がす事も無いわよね・・・」
目の前から人が消える事に既に慣れ始めていた千鶴子は溜め息交じりにそう呟いたのだった。

夜———イタリア

ここはゼス北部の中堅都市であり、ゼスの中央銀行が存在する場所であり右衛門左衛門はここで気配を消しながら隠れていた。

「（情報が確かならば、この街で張り込めば何れは発見できるだろうが・・・）」

右衛門左衛門は意識を尖らせ些細な気配であろうと逃さないように、また僅かな人影も見逃さないように暗闇の中、目を凝らしつつも自分のいる場所と二級市民街との格差にこの国の現状を正しく把握していた。

イタリアの下層市民街である二級市民街は下水技術も上下水道も（右衛門左衛門が元居た幕府はその様な技術は有りもしなかったが）発展しておらず衛生状態も非常に悪いことに引換、この上層の貴族街は何処も彼処も清潔に保たれている。

「（魔法とやらが使えるか使えないかだけでこの格差か・・・いや、千鶴子殿の話では高度な教育を受けさせれば魔法使いになれるのだったな

しかし、そんな教育を受けさせる金を持つのは貴族たちだけか・・・よく出来た仕掛けだな）」

結局の話し、この国では生まれた瞬間から運命が決まってしまうシステムなのだ、一級市民の子供は魔法使いになり二級市民の子供はどれだけ努力しようが二級市民になるしかない。

———イン

「—————来たか！」

そう考えながらも気を張っていた右衛門左衛門は僅かだが何かが壊れるかのような音と共に何者かの気配が一級市民の住む街の方から逃げるように動いているのを察知した。

「のがさず
不逃」

二級市民街へ向かう気配を即座に追跡する右衛門左衛門、移動速度事態は上なのか徐々に追っている人物のシルエットが目視出来るようになってくる。

見た所背格好は男のようだが盗品らしき物は持っていないが追われている男は右衛門左衛門の接近に気付いたのか進路を変更し街の中心へと向かっていく。

「（私が簡単に追いつけないとは・・・なるほど、移動速度だけな

「ただの盗人では無い様だな」

そう心の中で感想を漏らしつつも右衛門左衛門は徐々に男を追い詰めていくが男も右衛門左衛門を振り切るために街の中を縦横無人に飛び回りなかなか追いつけないでいた。

——ヒュ

「——ツム!?」

——キイン

男が腕だけを振り投げて来た物を咄嗟に腰に差した細身の剣で弾く
右衛門左衛門だが投げられた物を見て驚く

「——これは・・・手裏剣

——ならば奴も忍びと言う事か？」

そう呟きながらも右衛門左衛門は時折向かってくる攻撃を回避しつつ男との距離を詰めていく——そして漸くある程度ひらけた場所・・・二級市民の墓地で男が立ち止り右衛門左衛門が追いついた。

「まさかここまで着いてこれるとはな・・・だがお前はもしかして、俺を追い詰めた気になってるんじゃないだろうな？」

男は振り向かずに右衛門左衛門へ話しかける、その声は追跡された側としての緊迫感などなく極めて軽い口調だった。

「逆だぜ、俺がお前をここまで誘導したんだよ・・・俺の本拠地を知られる訳にもいかねえからな——最も、本来はここまでの不意

打ちでお前はおつ死ぬ予定だったんだが、なかなか優秀なようだな」

「——お前が連続強盗の犯人か？」

饒舌に語り続ける男の言葉に興味が無いかのように右衛門左衛門は問いかけた。

すると男は笑いながら振り返った。

「きやはきやは！そのとおりだぜ！！この魔法使いとやらは間が抜けてるから絶好の鴨だったぜ、きやはきやは

——冥土の土産に名乗ってやろう、俺は“真庭忍軍十二頭領”が一人 真庭 蝙蝠、人呼んで冥土の蝙蝠だ！！」

不忍男の初任務な第五話語（後書き）

後語り

色々と急展開ながらもようやく右衛門左衛門以外の刀語のキャラが出ました。

一応今の時点ではまだ何人かは出る予定ですが出して欲しいキャラがいましたら感想と一緒に行ってくださると思えなく・・・なくもないです。

（ただし刀語本編で死亡したキャラに限る・・・あと鳳凰、人鳥、鴛鴦、海亀はちよつと無理っぽかったりします）

特にアンケートでもないので期間は設けないので思いついたら言ってみる価値はあるかもです！

第六話語（前書き）

前語り

長文パワー！！長文パワーは会話パートと戦闘パートが合わさって最強に見える（訳・今までで最長になりました・・・と言っても4000文字程度ですが）

逆にスキルが無いものが使うと頭が可笑しくなって死ぬ（訳・しっかり纏められている自信が無いですが見てやってください）

第六話語

「――冥土の土産に名乗ってやろう、俺は“真庭忍軍十二頭領”
が一人 真庭 蝙蝠こうもり、人呼んで冥土の蝙蝠だ!!」

それを聞いた瞬間、仮面に隠されていても分かるほどに右衛門左衛門が驚愕の表情を浮かべた。

「真庭忍軍……だと!？」

在り得ない――真っ先に浮かんだ感想がそれだった。

何故なら真庭忍軍はもはや一人も残っていないのだ、何より実質的には最後の一人であった十二頭領の真庭 人鳥べんぎんを殺したのは他でもない右衛門左衛門自身なのだ、だが目の前にいる男は奇策士の刀集めの報告書に書かれていた真庭蝙蝠と完全に一致している。

「んん? その反応、お前真庭忍軍の事を知ってるのか?

――きゃはきゃは! もしかして同郷の人間かよこいつは傑作だねえ」

甲高く耳障りな声に特徴的な笑い方をする男――真庭蝙蝠は気さくな友に語りかけるような口調で右衛門左衛門に話す。

「いやゝ因果なもんだなーオイ、ちよっくら死んじまって気が付いたらこんな訳のわかんねえ場所に放り込まれてよお最初はあの世かと思っちゃったが信じられねえ事に生き返ってるもんだからびっくら仰天しちゃったよ……しかし今回もびっくら仰天だぜ同じ場所から来た人間ってのもそうだが、真庭忍軍の事を知ってる人間なん

ざそう多くねえからな・・・あんた、ひよつとして幕府の人間か？」

「元——だ」

「そりやそうだなあ、きやはきやは！」

この世界には幕府も何にもありやしねえからな、言っちゃえば俺も正確には元・真庭忍軍十二頭領が一人になっちまう訳だがよ——
——」

そこで一端一息ついた真庭蝙蝠は声を落とし鋭い眼光で右衛門左衛門を睨み付けた

「同郷の好だ、今すぐ逃げるんなら見逃してやってもいいぜ・・・」
そう言いながらも真庭蝙蝠は何時でも戦闘に入れるように距離を取っている。

「不及^{おとよはず}、貴様程度を相手に逃げるほど、私は弱くはないのでな」

「ほう、対した自信だな・・・だが、これを見た後でも同じことが言えるかな？」

そう言うと真庭蝙蝠は口を大きく開きそこに自分の手を突っ込んだ
「——ンガァ——」

そうして驚くことに真庭蝙蝠は口から抜き身の刀を取り出したのだ。

「——それは・・・絶刀・鉤か!？」

その刀を見た右衛門左衛門は驚愕の声を抑えられなかった。
何故ならその刀は此処にあることは在り得ない物だったからだ。

「まあ幕府関係者なら知ってても可笑しくはねえか?
お察しの通り、こいつは四季崎記記の完成系変体刀十二本が一つ“

「絶刀・鉋”だ!!」

切刃造の直刀で刀身は五尺ほどの長さで“頑丈さ”に主観を置いて作られたが故に鏝や鞘などとは無く、本来消耗品である刀と違い決して曲がらず決して折れず決して切れ味の落ちない天才刀鍛冶師・四季崎記記の作り出した最も完成度の高い刀の一つである。

「それは虚刀流がお前から収集し、最後には完全に破壊した筈なのだが・・・」

何故お前がそれを持っている真庭蝙蝠」

「何？あの野郎マジでこの刀を折っちまったのか？

———かぁゝ勿体無え、本っ当に物の価値ってもんが分かってねえよなアイツ」

「答えろ、なぜ貴様が絶刀を所持している

まさか虚刀流が回収したのは偽物で本物はお前が持っていた等というふざけた設定を持ってくるつもりでは無いだろうな？」

「んな設定ねえよ・・・まあ俺自身もなんでこいつを持ってるのかは分かんねえんだけどな気が付いたら腹の中に納まってたんだからしょうがねえだろ？———ところがだ、この国の連中も物の価値ってもんが分かってねえ、折角だから売っぱらっちゃまおうと思ったんだがこの国じゃあこの刀の価値が分かる人間が全然居ねえんだよそんな訳でしょうがねえから俺自身が使ってる訳だよ」

「（ふむ、奴が全てを語ったとは思えないが・・・私もこの世界に來ている時点で本来は在り得ないことか、今更刀の一本や二本が蘇った所で死人が蘇るよりも不思議では無いか・・・この男まで四季崎記記の完成系変体刀を取り戻していたのは以外だったが・・・）」

——だが、それで忍びが盗人の真似事か」

「おおっと、そこを突っ込まれるかあ

だがなあ、別に俺を正当化する訳じゃねえがこの国の魔法使いとやらはドイツもコイツも性根が腐り切ってやがるぜえ、自分たち以外の人間を使い捨ての家畜位にしか見てねえぜ

俺も元忍びだから幕府の裏の汚え部分は色々見てきたが此処の上流階級の人間はドイツもコイツも最低で最悪な奴ばかりだぜ」

「りゆうにならず不理由成、だからと言って、お前が盗みに入って良い理由にはならない」

「まあ、そりゃそうなんだがな、

別に俺も貧しい生活をしてる人間から金を奪おうが痛む心も罪悪感も有りはしないんだが——この国の二級市民？だっけか？本当にその日その日を生きるのに精一杯で何も盗む物もありやしねえんだよ、手っ取り早く金を手に入れるならヤッパリ持つてる奴から盗らねえと効率が悪いっいたらありやしねえんだよ」

「そしてそのついでに義賊の真似事か？

金の為に奇策師殿を裏切った忍者にも優越感に浸るために金をばら撒く趣味が合ったとはな」

「あん？そりゃ誤解だぜきやはきやは

別に俺はここに住んでる奴らがどうなろうと知ったこっちゃねーよ、ただあの辺に住んでる奴らは相当に貯め込んでて盗んだは良いが腹の中に納まりきらなくて邪魔で動きにくかったから余った分を適当にばら撒いてやっただけだよきやはきやは」

そこまで言った蝙蝠は右衛門左衛門を見て何か思い出すかのように首を傾げた

「んんーそう言えばアンタ、どこかで見た仮面だな・・・」
暫くウンウン唸っていた蝙蝠だが勢いよく顔を上げ右衛門左衛門を指さしながら叫ぶ

「あー！そうそう、あの子猫ちゃんが何時も目の敵にしてた金髪の姫ちゃんの側近じゃねーかお前
——なるほどねえ、あのお姫様の部下なら真庭忍軍や完成系変体刀に詳しくても可笑しくねーな、何てったってお前ら主従を子猫ちゃんの命令で蹴落としていたのは他でもない俺ら真庭忍軍なんだから——なッ！！」

言い終わると同時に真庭蝙蝠は上空へと飛び上がり武器を振り上げて奇襲をかける。

「報復絶刀！！」

真庭蝙蝠の強烈な攻撃によって地面から砂埃が舞い散り一瞬視界が遮られるが風が強く吹いていたために砂埃自体は数秒で消え去った。

「手ごたえがねえな・・・うまく躲しやがったな」

煙が晴れると右衛門左衛門は元の場所から数メートル離れた場所です立っていた。

「——奇襲に不意打ち・・・流星は忍者と言った所か」

「当然、卑怯卑劣が忍者の売りなんでな——手裏剣砲！」
次に真庭蝙蝠は絶刀ではなく口から大量の手裏剣を発射する忍法・手裏剣砲を右衛門左衛門へ放つ

——キキキキン

だが右衛門左衛門もすぐさま自身も手裏剣を取り出し一つの狂いもなく放たれた手裏剣へと投げ直撃させた

「チィィ！やるじゃねーか、じゃあこう言うのはどうだ？報復絶刀！！」

一足で接近した真庭蝙蝠は今度は絶刀を突き出し攻撃する——だが

「——相生拳法背弄拳」

そう右衛門左衛門が呟いた瞬間、真庭蝙蝠は眼前に居た筈の敵を見失った。

「——馬鹿なッ！？何処に！？」

「此方だ^{うしろ}」

——ズバン

「——グッ——があああああああ」

真庭蝙蝠がその声を背後から聞いた一瞬後、左肩に鋭い痛みを感じ咄嗟に前方に飛び退き右衛門左衛門から距離をとる

抑えた肩からは傷口から赤い液体が滲み出てくるが骨や筋までには至っていない様だった

「咄嗟に体を振じり致命傷を避けたか、本来なら腕一本奪うつもりだったのだから・・・」

真庭蝙蝠よ——私はお前との直接の面識は無いが、お前がどのような忍法を使うのかは知っている。

お前の忍法骨肉細工は確かに忍者としては暗殺・潜入に特化してい

る良い忍法とは言えるだろう――

だが、お前個人の戦闘能力は私から見て真庭忍軍十二頭領の中では中の下と言った所だろう。

如何に四季崎の刀を所持していようが剣士ではないお前が持ったところで私はそれほど脅威には感じない――」

「――ゴチャゴチャ・・・ウルセエツツの!!」

そう言って真庭蝙蝠は再び右衛門左衛門に向かっていく。

「――ッゴ!？」

だが、刃が右衛門左衛門に届く前に真庭蝙蝠は強烈な衝撃を腹に受け、息を吐き出しながら地面に転がりこむ。

「――ッガハア!? ハアハアハア」

呼吸困難に陥りながらも真庭蝙蝠は右衛門左衛門へと視線を向ける。

「まっ――待てっ! 同郷の好だぜ少し語らねえか?」

そう言いながらもその目には殺意は消えていない、右衛門左衛門を出し抜くために様々な策を練るための時間稼ぎに話しかけただけである。

「不語、かたらず私はお前の様に冥土の土産に送る言葉は持たない
我が主の名により・・・真庭蝙蝠、お前を捕縛する」

聞く耳持たずとはまさにこの事かと言わんばかりに切り捨てる右衛門左衛門だが、真庭蝙蝠は何か策があるのか、若干の余裕を取り戻しつつ続ける。

「きゃはきゃは、俺を捕まえるってか?

今更だが今のアンタはつまりは魔法使いの下僕って訳かよきはきやは」

「わからず不解、今のお前に何故それほどの余裕がある・・・その肩の傷ではもはや満足に刀を振るうことも出来ないだろう」

そう言われた真庭蝙蝠は絶刀・鉤を呑み込んで腹の中へとしまい両手を頭の高さまで上げた。

「――なんだそれは・・・降参のつもりか？」

「――あんた、情けは人のためならずって諺知ってるよな？」

突然、真庭蝙蝠は前触れもなく語りだした。

「――情けをかけるのは人のためではなく、最終的に巡り巡って自分の元へと帰ってくると言う意味だろう・・・きんじえす不禁得、まさかとは思うがお前は私に情けをかけるとも言うつもりなら失笑を禁じ得ないな」

「きやはきやは、んな事は言わねーよ

――ただ俺は今その諺の意味を噛み締めてるだけだっつーの！！」

そこまで言われた右衛門左衛門は隠れてはいるが自分を囲んでいる人間に気が付いた。

「（不覚！真庭蝙蝠に気を取られすぎたか！？）」

「今だー！！義賊・真庭蝙蝠様をお助けするんだー！！」

その声を切欠に木の棒や鍋の蓋などの申し訳程度の武装をした二級市民達が一斉に右衛門左衛門へと群がって行く。

実は真庭蝙蝠は最初から万が一の可能性を考えてこの場所に移動したのだ。

この周辺の地域は真庭蝙蝠が特に盗んだ金品をばら撒いた場所であり、明日を生きるのもギリギリな二級市民達を義賊の真似事までして手駒にしていたのだ。

「（不笑、わらえず真庭蝙蝠め何が適当にばら撒いただけだ、二級市民を使い捨てるための必要経費だった訳か）」

「きやはきやは！やっぱ情けは自分に返って来るもんだな、ンじゃあな仮面野郎次に会う時はぶっ殺してやるから覚悟しとけよ——きやはきやは」

千鶴子からなるべく二級市民は傷つけるなどの指示を受けていた右衛門左衛門が向かって来る二級市民の対応に手間取っている間に真庭蝙蝠は懷から球場の物を地面に叩き付けると辺り一面を白い煙が覆い隠した。

「煙幕か！？芸の無い真似を・・・待て！真庭蝙蝠！！」

「待てと言われて待つ馬鹿がいると思うか間抜け！」

真庭蝙蝠の気配が墓地から離れていくのを感じた右衛門左衛門は群がる二級市民を飛び越えてすぐさま散策するが既に姿を見失い気配を消してしまった真庭蝙蝠を見つける事は不可能だった。

「血の跡は・・・残すほど馬鹿ではないか

——真庭蝙蝠、今回は不覚を取ったが次に見つけた時は確実に捕

える！」

こうして右衛門左衛門のこの世界での初任務は見事に失敗に終わってしまふのであつた。

「ふー危ねえ危ねえ・・・あの仮面野郎、トンでもねえ強さだ——下手すりゃ鳳凰さんに匹敵するかもしれねえな・・・」

そうして無事に右衛門左衛門から逃げおおせた真庭蝙蝠は肩の傷口に応急手当を施しつつ森の中を歩いていた。

「あんな奴に目を付けられちまうとはツいてねえな・・・ほとぼりが覚めるまで暫くは大人しくしとくか・・・」

そう言いながら真庭蝙蝠は森の奥に隠されている施設へと入って行った。

「つー訳なんで提督さんよお、暫くは資金集めの依頼は断らせて貰うぜ」

「フム・・・仕方ないな、君は今では我々ペンタゴンに無くてはならない人材だから・・・」

暫くは休暇のつもりでゆっくり休むといい」

第六話語（後書き）

後語り

一般人を盾にするとかお前絶対忍者だろ汚いな、さすが忍者きたない。

はい、と言う訳で

衛門左衛門君、某英雄王のごとく慢心してたら逃げられてしまったでゴザルの巻でした。

最後に蝙蝠が話してた相手はバレバレでしょうが蝙蝠は別に彼の力リスマ（？）に惹かれている訳ではありません。

あくまで忍者として報酬を貰う代わりに仕事をしているだけです。

それはそうと書き溜めの方では原作前のオリジナル編が終わったので後2〜3話程度で原作に入る予定です。

その辺から原作やりながら同時進行で書いて行くので毎日更新は終わりになると思います。

一応なるべくは周1で更新できるようには努力します。

ネチネチ文句言われるだけの第七話語（前書き）

前語り

原作を初めからプレイし始めました。

所々カットしつつ展開を作って行くのが結構大変ですが何とか頑張っています。

ネチネチ文句言われるだけの第七話語

——ゼス王国首都・ラグナロックアーツ

「——と言う事で、件の連続盗難事件の犯人は捕まえる事は出来ませんでした、暫くは被害は納まると予想されます」

各長官たちの集まる会議室にて千鶴子は右衛門左衛門の報告書を片手に事件の経緯を説明していた。

——結果としては失敗に終わった独断での捕獲作戦だが、今まで犯人の正体すら掴めていなかった現状では、これ以上の被害が出ないだけでも十分な成果……とは言えずとも、まずまずの成果だと言えるだろう……ただし普通の感性を持つものならばだが

「つまりは何ですか山田殿？」

あなたは我々治安隊に何の報告もなく、しかもあろう事か二級市民の部下を使って事件を解決しようとして見す見す捕えられる筈だった犯人を逃がしてしまったと？」

治安長官であるポピーは皮肉を最大に籠め、千鶴子へと問いかける。

「——確かに結果的にはそうなりましたが彼はこの国の住人ではないので二級市民と言う訳ではありません、それに彼以外では犯人を見つけ出す事も出来なかったでしょう」

その反応が来ることは予想していたのか、千鶴子は澀みなくポピーの問いかけに答えた。

——しかしその答えに各長官から失笑の声が漏れだす。

「ほう——魔法も使えない野蛮人をそこまで評価しているとは山田殿は心の広いお方だ」
軍務長官のナジリが言う

「魔法が使える使えないで能力の価値が全て決まるわけではありませんので」

その言葉にも冷静に受け答える千鶴子だが頭の上には怒りマークらしきものが見え隠れしている。

「ほうほう、四天王ともなると言う事が違いますなあ——」
しかし、我々治安隊ならば見つけ出した犯人を逃すような間の抜けた事は決してなかったでしょうなあ」

「それに関しては報告した通り、一般人の妨害に合いやむ終えなかった事だと説明しましたが？」

「いやいや——やはりそこが魔法使いを使わなかった山田殿の落ち度と言えますなあ

魔法の使えない物を使うから二級市民共は魔法使いで無いならば・
・等と考え妨害して来たのでしょうか
しかし、仮にも我々魔法使いに被害を与えている下劣な盗人を庇うとは・・やはり一度二級市民達はある程度駆除をした方が良いのではないですか？」

「——ッその話は今回の会議の議題とは関係ありません
一先ず私からの報告は以上ですので、本題に入りましょう・・・最近のテロ組織の動きについてですが——」

その後会議は続いたが、ほとんどの長官は興味が無いようにいい加減に聞いていた。

「あーッもう！！イライラするわねアイツら！！」

会議が終わり、千鶴子は右衛門左衛門と部下数名を率いて自身の管理する王者の塔へと向かっていた——会議での各長官たちの態度に愚痴りながらだが・・・

「自分たちでは何一つやろうとしない癖に文句ばかり言って来て！！それに私が山田って呼ばれるのが嫌いって分かっているながら態と山田山田って呼んできて——ああもう黒色破壊光線でブッ飛ばしてやろうかしら！！」

「————すまないな、千鶴子殿」

相当に嫌味を言われ続けたのか、何時にも無く不機嫌な千鶴子に部下たちが若干戸惑っている中、右衛門左衛門は謝罪をするのだった。

「——別に貴方が謝る事じゃないわ、貴方は十分に役目を果たしたんだから」

「不果、^{はたさず}私が受けた任務は犯人の捕獲、奴との実力差に慢心があつたが故にあの様な失態を招いてしまったのだ・・・これで役目を果

たした等とはとても言えない

——それに、奴の隠密能力は相当な物だ・・・逃がしてしまった結果、事態がさらに悪化したと言っても過言ではない」

「——確かにより捕まえにくくなった点からすれば状況が悪化したと言えなくも無いけど・・・顔や特徴が分かっただけでもそれなりに事態は好転したんじゃないの？」

「不成、^{ならず}奴相手には顔や体形など何の手がかりにも成りはしない・・・奴の忍法“骨肉細工”は顔や体形・性別までも自由自在に変装・・・いや、変身する忍法だ」

「ってそんなこと人間に可能なの？」

その話を聞いた千鶴子は思わず右衛門左衛門に聞き返す。

——魔物の中にはまねしたと言う他人そっくりに化ける事が出来る能力を持つものがいるが、人間にもその様な真似が出来るとはとても思えなかっただろう。

「事実だ——またその派生として、奴は体内に様々な物を仕込む事が出来る・・・

この辺りは後で詳しく纏めた報告書を提出するのでそれを参考にしてくれ」

そこまで話してそれなりに落ち着いたのか、先ほどとは打って変わって静かに塔へと向かう千鶴子たちだが、塔がハッキリ見える辺りで何かを見つけたのか千鶴子は傍から見ても分かるほどに表情を歪めた。

「——？どうかしたのか千鶴「千鶴子様——！！キャンプサラ

サラカレーの材料を買ってきましたー早く作ってくださいー
「ー!」――あれは？」

その千鶴子の視線の先には不審に思った右衛門左衛門の問いかける言葉に大声で被せながらこちらに買い物袋らしき物を持った手をブンブン振りながら叫ぶ青髪の女性がいた。

「一応、私の弟子――って事になるのだけれど・・・紹介しておくは、アニス・沢渡よ」

「おおー千鶴子様、その見覚えのない趣味の悪い仮面の男は誰なのでありますか!？」

――ハッ!？　もしや千鶴子様の恋人でありますか!？　その趣味の悪いセンスは千鶴子様と何処か通じる所があるように感じます――
「ってああー!？　買ってきたキャンプサラサラカレーの材料があちらこちらに散らばってしまっています!？　いったい何故!？」

「それだけ振り回せばそうなるに決まってるでしょう・・・
それよりアニス!　趣味の悪いセンスに通じる所があるってどう言う意味よ!?!？」

「痛い!？　痛いです千鶴子様!？　何故怒っているのですか?　キャン
プサラサラカレーの材料が散らばった事を怒っているのですか?」

「(――真庭蝙蝠よ・・・この借りは必ず返すぞ)」

先ほどから危うかった現・主のキャラが完全に崩壊しているのを見
ないで心の中で決意を固める右衛門左衛門だったが――人

はそれを現実逃避と呼ぶのだった。

ネチネチ文句言われるだけの第七話語（後書き）

後語り

原作の腐敗長官ズの屑っぱさを少しでも表現できればいいのですが自分にはこの位が限界でした・・・いやマジでムカつくんですよねこいつら、魔法と自分らの事しか考えてなくてマジ死ねば良いのにつて何度思ったことか・・・

尚、次回の幕間を挟んで原作に突入する予定です。

時間がちよつとキングダムゾンずると思いますがご容赦ください。

幕間（前書き）

ランスで言う拠点イベント的な物？

ぶっちゃけただの原作入る前の繋ぎで内容的には本編には全然かわりありません。

でも書いて結構楽しかったです。

幕間

「――交流？」

真庭蝙蝠の件の後処理が落ち着いた頃、右衛門左衛門は千鶴子に呼び出されていた。

「そうよ・・・今日一日は仕事や依頼は無いのだけれど、いい機会だから私の部下、つまりは貴方の同僚と雑談でもして交流して欲しいの」

「わからず不解、それにどの様な利点があるのだ？」

私は基本的に隠密行動や単独任務が適材なのだが・・・」

「そう言っても、貴方は今は私の部下なのだから共同任務を与えることも有るわ

そんな時の為にお互いを多少でも知っておいた方がいいんじゃないの？」

「――確かに一理はあるが・・・」

「あとこれはお願いじゃなくて命令

――もう彼らにも別室で待機して貰っているから早く行ってきなさい・・・」

基本的に主人の命に反する事はしない律儀な男、右衛門左衛門は結

局そう言われれば拒否する事は出来なかった。

———自己紹介

「リヒト・アルデヒドです」

杖を持った几帳面そうな長身の男が最初に名乗った

「クロム・ブロンズルだ」

同じく杖を持った男気溢れる長髪で白髪の男が続く

「へ、ヘリム・リビルス・・・よ、よろしくッス」

同じく杖を（略）前の二人に比べると若干若く気弱そうな男が最後に名乗る

「・・・左右田 右衛門左衛門だ」

指示された部屋に入っていたのは三人の男だったが、右衛門左衛門は全員の顔に見覚えがあった——何故ならつい先日の戦闘試験にて戦った（結果は右衛門左衛門の無双だったが）三人だったからだ。

模擬戦とは言えお互いに争い合った面子が揃ったこの部屋には何とも言えない気まずい空気が漂っているが残念な事に上司の命令で彼らはこれから交流を深めることは決定事項になっているのであった。

———上司の服装

———兎にも角にも交流を深める為には会話が必要不可欠。

そう考えた右衛門左衛門は何か話の種になるものは無いかと少し考
えると、以前から自分が疑問に思っていた事を聞くことにした。

「突然なのだが・・・千鶴子殿のあの不必要なまでに装飾を付けた
着物は何か魔法的な意味があるのか？」

本当に突然でしかも答えに困る質問を投げかける右衛門左衛門に雰
囲気から察するに三人のリーダー格であろうリヒトが答える。

「いえいえ、あれは単純に千鶴子様の趣味ですよ左右田殿
本人はあの服がとても気に入っているから着ているのですよ」

「ちょっと前衛的過ぎる気もするけどな」
笑いながら補足説明を入れるクロム

「クロムさん！千鶴子様の耳に入ったらヤバイッスよ！！」
慌てて嗜めるヘリム

どうにも関係的には
リヒトⅡ優等生で纏め役
クロムⅡ自由で問題児
ヘリムⅡ気弱で常識人
と言った感じのようだ。

尚、質問の答えを得た右衛門左衛門は

「（――なるほど、千鶴子殿は奇策師殿と似た趣味の持ち主と言
う事か・・・）」

――仮に本人が聞いていたらチェリオの気の抜ける掛け声と共に
殴って来そうな事を考えていた。

———四天王と四將軍

先ほどの会話を皮切りに元々二級市民への差別意識の薄い三人やそもそもそんな意識を持ち合わせない右衛門左衛門達はそれなりに会話を続けていた。

——本人は否定するかもしれないが、元々話し好きな面もある右衛門左衛門は義務的な受け答えながらも三人の興味を引く話しを続け、思いの外順調に交流は進んでいた。

「そう言えば、千鶴子殿はこの国の四天王の筆頭らしいがやはりこの国の魔法使いの中でも有数の使い手であるのか？」

「そうですね、そもそもゼス四天王は実力主義なので優秀な魔法使いの中でもさらに優秀な人間しかなれませんね」

「そうそう、千鶴子様を筆頭にナギ・ス・ラガール様にパイヤ・サーバー様、それとゼス王国王女でもあるマジック様だぜ」

「でもでも、ゼスにはそれ以外にも凄い魔法使いはいるッスよ!!」
ガタンと勢い良く立ち上がりながらヘリムが言った。

「——興味深いな・・・私はこの国に詳しく無いのでその辺りの事を詳しく聞きたいのだが」

右衛門左衛門がそう言うのとヘリムが目を輝かせながら言う

「ズバリ!!ゼス四將軍の皆様ッスよ!!」

特に光の魔法団隊長のアレックス様は凄いですよ!!

光魔法のスペシャリストで自分は超絶懂れてるッス!!」

「ちなみに補足しますと、雷の魔法団隊長のカバツハーン・ザ・ライトニング様、炎の魔法団隊長のサイアス・クラウン様、氷の魔法団隊長のウスピラ・真冬様
この四人を合わせてゼス四將軍と呼ばれます」

「俺はあのお坊ちゃんはある限り良く思っただけがな・・・ちっとばかりやり方が綺麗すぎる辺り将来利用されてポイされそうだけ」

「クロムさん！何て事を言うんすか！！アレックス將軍はとっても真面目で誠実な良い人ッスよ！！そんな人にそんな事言うなんて人格疑うッス！

あやまってくださいッス怒られたく無かったなはやく謝って！！」

「だーもうウルセエな！！ホントの事言っただけが悪いんだよ！！」

————ギャーギャーワーワー

売り言葉買い言葉で突然喧嘩を始める二人を止めることなくリヒトは「まあこの通りヘリムはアレックス將軍を心酔しているのでこの様な喧嘩は良くあるので気になさらないでください」と言い括った。

————最凶の魔法使い？

「————フム、ではこの国で一番の魔法使いとなるとやはりその八人に絞られて来るのかな？」

そう右衛門左衛門が聞くと、三人は揃って気まずそうな顔をする。

「いやーそうですねえ……一番優秀と言う意味ではやはりガンジ
ー王が挙げられますが……」

「―――不禁得^{きんじえず}、驚きを禁じ得ないな……この国では王がそれほ
どまでに強いのか」

「まあ魔法力はゼスでもトップクラスのお方だからな……」

「体も大きくて普通に戦っても強いって聞くツスけど……」

次々とまだ見ぬ国王の実力を聞かされる右衛門左衛門だが、どうに
も三人とも何処か歯切れが悪いことに気付いた。

「何やらその言い方だとその国王以外にも思い浮かぶ者がいるので
はないか？」

右衛門左衛門がそう問いただと三人は顔を合わせて一斉にため息
を付く。

「ええ、いるんですよこの国には」

「最強……いや最凶と名高い魔法使いがな」

「それも自分たちの極身近にツスよ……」

三人で順番に語って行くがその口調は重く、出来れば語りたくもな
いと言った意思が入っている。

「興味深いな、それはいったい誰だ？」

そう聞かれた三人は再び顔を見合わせ、暫く無言でいたが決心が付いたのか三人の代表でリヒトが答える。

「左右田殿も見掛けた事がありますよ・・・
千鶴子様の弟子のアニスですよ」

その答えを聞いた右衛門左衛門は先日に出会った少女の事を思い出すがとてもそうは思えず、表情には出さないが困惑してしまう。

「——まあ信じられないでしょうが事実ですよ、彼女は魔法Lv3の伝説クラスの魔法使いなんですよ・・・ですが」

そこで少し話すのを戸惑うリヒトだが深呼吸を一度すると話を話す。

「先日も見たかと思いますが彼女あの通りどんくさいと言うかヘッポコと言うか・・・頭の方が弱くてかつドジを連発するのでなまじ力が有り余っている分敵よりも味方の方が危険でして——付いた異名が“味方殺しのアニス”なのですよ」

「・・・ものいえず不物言・・・呆れて物も言えないのだが・・・」

「人間爆弾って言うのはあー言うのを言うんだろうな・・・いや、安全装置のついてない時点で爆弾より性質が悪いぜアニスの嬢ちゃんは・・・もうあれは天才って言うより天災だぜ」

「でっでも、千鶴子様の事はとても慕っているので千鶴子様の言う事は聞くんスよ!!」

千鶴子様も普段はしっかりコントロール出来てるんでそこまで言う事も——」

————ズドーン

フォローを入れようとヘリムが話す途中で衝撃と共に少し離れた場所で轟音が鳴った。

「………何事だ？」

その場にいる全員の代弁をする右衛門左衛門だがすぐに原因と思わしき場所から声が聞こえて来る。

「あっアニス！？あんた一体何をしてるのよ！！？」

焦ったような千鶴子の声

「おお千鶴子様、先ほど部屋の中に黒光りする虫が入り込んでいたのですぐさま退治しておきました」

先ほど話題に上がったアニスの呑気そうな声

「そんな事のために白色破壊光線なんか使ってんじゃないわよ！ああ！？部屋の中が瓦礫だらけで原型を留めていないじゃない！？」

「おおっ！申し訳ありませんでした千鶴子様

——やはり黒い物体には黒色破壊光線を使っておくべきでし（バシ）痛——！？痛いのです千鶴子様！？何故急に頭を叩くのですか！？」

「こんな何も入ってない馬鹿な頭なんて幾ら叩いても平気でしょう！！！」

——バシバシバシ

「痛い痛い痛いのです千鶴子様——千鶴子様はもしかしてあの黒光りする虫が好きだったのですか！？だからこんなに怒っているのですか？」

「そんな訳無いでしょうが——！どうすればそんな結論が出るのよこの頭は——！！」

もう一度一際大きい打撃音が右衛門左衛門らのいる部屋まで響いた。

「——————普段はしつかり・・・何だったかな？」

一連の流れを聞いていた右衛門左衛門はフォローしようとしていたヘリムへと問いかける

「・・・いや、何でも無いッス」

結局交流会は此处で終了し、この後全員で瓦礫の山と化した塔の一部の修理に当たるのだった。

幕間（後書き）

次から原作に入りますがあれこれ飛ばしています。

だって原文そのまま移すだけじゃ詰まんないし二次で書く意味無いっすから・・・

ちなみに次から更新ペースはかなり下がると予想されます。

補足ですが暫くは右衛門左衛門たちは若干空気と言いか出番が減ってランス側がメインになります。

時間が若干飛んで原作突入な九話語（前書き）

前語り

とりあえず今回はランス側メイン。。。になってるのかな？
ランス？やりながらなんで書く↓投稿 から プレイ↓書く↓投稿
と一段階増えるので更新が不定期になったり長期更新停滞するかも
しれませんがラスボス倒すまでは頑張りますのでどうか末永く付き
合ってください。

時間が若干飛んで原作突入な九話語

それから数か月たったある日のこと
この国の運命は着実に動き始めた。

————— 奴隷観察所

ここはラドン教育長官の住む琥珀の城に作られた、2級市民とモンスターとの戦いを見物し、どの奴隷が先に死ぬか賭けると言う金持ちの悪趣味な道楽で作られた娯楽施設である。

その施設のとある部屋にて一人の男が不機嫌さを隠そうともせず佇んでいた。

「クソ、何故俺様がこんな所に入れられなければならないのだあ」

男の名はランス、資金調達のための依頼の為にゼスまでやって来た彼は依頼人であるラドン教育長官とのイザコザによってこの奴隷観察所へと入れられてしまったのである。

「うむむ、こんな場所は俺様にはふさわしくない、さっさと脱出するか

————— おいそこのお前出口はどこだ？」

暫く愚痴り続けたランスはそう結論をつけ、隣で寝転んでいる男へと声をかけた。

「出口？そんなもんここにねえよ、そんなもんあったら誰でもとつ

くに逃げ出してるっつの、ちょっと考えれば分かるだろう」

眠りを妨げられた男は不機嫌そうに答える

「むか、なんだお前はここの俺様に向かってその口の聞き方は!?!」

自分勝手と自分本位が服を着て歩いているような男であるランスは男の物言いに腹を立て男の背中へと蹴りを放った

「ゲフウ!!?!」

「クソ!仕方ない、自分で出口を探してやるは!?!」

そう言ってランスはズカズカと部屋の外へと出て行った。

外へと出たランスの目に最初に移ったのは人口的な壁であった。

洞窟のようなその場所を見渡すが出口はおろかよじ登る事も出来そうになかった。

「————ン?おいお前、あそこに誰かいるのか?」

ランスは近くにいた男に問いかける。

ランスが指さす方向には幾つかの窓がありそこには何人かの人影が映っていた。

「ああ————俺たちの誰が死ぬのかをお偉いさん達が見物してるのさ」

その言葉を聞いたランスはまた怒りを表した

「なんだと——!?!?賭けるだけじゃなくて見物までしてるのか!?!」

？なんなんだここの連中は！？」

およそ人を人と思わない非道だがこの国の貴族達にとってはこの程度の事に痛める心など持っていないが当人たちにとってはその怒りは当然であった。

「クッソー！こうなったら意地でも死んでやるか！死んでも死ななぞ！！」

「————ふあああ・・・煩いねえ、こっちは寝起き何だからもうちょっと静かにしてくれないかい」

矛盾した決意を固めるランスだが背後から聞こえた声に振り返った。

————そこに立っていたのは奇妙な男だった。

その男は肌が病的に白く髪が頭の上の部分だけが白く他は黒髪で服装は薄い着物を一枚羽織り帯を締めているだけで、寝起きと言う割には目の下には濃い隈があり、さらに腰のあたりに細身の剣を差している。

ハッキリいってこの国の雰囲気には何一つ合わない奇妙な男であった。

——そして何よりも身に纏う空気に幾つもの修羅場を潜り抜けてきたランスの勘が警戒を呼び掛けたのだった。

「ヌ・・・何だお前は！？」

「何だって言われてもねえ、ここに居るんだから、奴隷って事になるんじゃないのかねえ」

ランスの問い掛けに奇妙な男は容量を得ない答えを返す。

「・・・ふん、まあ良い俺様は今非常に不機嫌だからお前の様な奴に構っている暇はない」

そう言っただけでランスは奴隷観察所の探索に向かうのだった。

「しかし、本当に雑魚しか出てこないな」

暫く探索を続けるランスだが、時折襲い掛かってくるモンスターのランクの低さに呆れていた。

しかしランスにとっては雑魚であっても唯の奴隷であるだけの他の者にとっては脅威となるのか、少し辺りを観察すれば時折モンスターにやられる人間もいた。

——この奴隷観察所では毎週に決められたノルマが存在し、そのノルマ分モンスターを倒さなければ食事が抜きになるルールが決められており、皆明日を生き残るために必死に戦っているが、その様は見物している貴族たちにとっては滑稽極まりないのだろう。

——時を少し遡り

王者の塔にて右衛門左衛門は千鶴子からの任務の説明を（天井裏で）聞いていた。

「今日、ラドン長官の琥珀の城に何人かの長官が集まるという情報

が入ったの・・・どうせ碌でも無い事でしょうけど調べて来てくれない？」

「ラドンと言うと、例の奴隷観察所の持ち主か」

「そう、あの悪趣味な娯楽施設の持ち主・・・証拠がキツチリ揃えばガンジー王に報告できるって言うのにあいつ等は上手く隠してるから――」

そこで千鶴子は言葉を止め憎らしげに顔を歪める。

「――では物のついでに物的証拠になる物でも探して来ようか？」

「――いいえ、あいつ等も自分たちの娯楽には最大の警戒をしてるから迂闊には踏み込めないの・・・今回は非常に遺憾だけど、侵入調査に留めて頂戴」

「了解した」

そう返事をすると共に右衛門左衛門の気配は天井裏から消え去った。

――ちなみに今のやり取りは唯の繋ぎであり特に伏線や前振りでは無いので悪しからず、尚今回の彼らの出番はこれだけです。

閑話休題

時間は少し進んで奴隷観察所の待機部屋にて――

「ランス様、お水が入りましただ」

「うむ」

ランスはその後奴隷観察所の探索を続け、モンスターを倒したり奴隷たちのボスであるジャイアンを気に入らないと言う理由で殺したりとしている内に何故か懐いてきた背の低い割れ顎の男・ロッキーを仲間にしていた。

――実際は仲間と言うより盾くらいにはなるかと言う考えなのだが本人には言わぬが花だろう。

快適とは言えぬ部屋だが連戦による疲れを癒すために休んでいたランスだがその部屋に先程後ろから話しかけて来た男が入ってきた。

「おお！銀さん、お帰りなさいだ」

入ってきた男に気付いたロッキーはそう挨拶した。

「む？何だお前か生きていやがったか」

男に気付いたランスはほぼ初対面の人間に言う言葉ではないがそう言いきった

「ああ、アンタも生きてたのか――まあ体の鍛え方と重心の置き方から見てここに居る程度の化物相手に不覚を取るとは思っていないがなかったがな・・・ふあああ」

そう答えた男は大きな欠伸をするとベットを使わずに部屋の奥の壁

へと背を預けて座り目を閉じた。

「何なんだこの変な男は？」

「この人は何時もこうやって寝てるだ——そうだ、ランス様寝てる時にこの人にはあんまり近づいたらだめだすよ、この人は目にも止まらない速さでスッパリと何でも一刀両断出来るだ・・・少し前にこの人の持つてる剣を寝てる間に盗もうとした人がいただが、気が付いたらその人の首がボトンと落ちてしまっただ

——だから、それくらい寝ているこの人には近づいちゃいけないルールがあるんで気を付けてくださいだ」

「な・・・見た目に寄らず物騒な男だなこいつは」

言われて真っ二つになった自分を想像してしまったのか、顔色を若干悪くしたランスはそう言って壁に寄り掛かる男から距離を少しとったのだった。

それから暫く休んでいたランス達だが、突如部屋に取り付けられたスピーカーから女の声が流れた。

『ただ今からパイヤ様ご提供の合成魔獣が放たれます★
期間中、あなた達奴隷を20人殺すまでです、せいぜい逃げ回ってください★

大変だー★』

「なんだとーッ！！？てめえら安全な場所にいてふざけるなあー！！」

放送の声に怒りそう叫ぶランスだが当然声の向こう側に届く訳は無

く放送はそこで切られた。

——その放送の宣言通り、何体化の合成魔獣が奴隷観察所に解き放たれ、無情にも逃げ惑う奴隷達を殺していく中で、ランスは他の者とは違い真っ向から合成魔獣を切り捨てていた。

時折ロッキーを盾にしたり、途中で謎の大男の加勢を受けはしたが5体ほどの合成魔獣を殆ど一人で倒したランスは先ほどの眠そうな男が別の合成魔獣に壁際に追い詰められているのを見つけた。

「ああーランス様！大変ですよ！！早く助けに行きましょうだ！」

ランスと共に戦っていたロッキーは追い詰められている男を見てそう言ったがランスは興味なさげに

「ふん、何故俺様が男なんかを助けなければいかんのだ
それにアイツは俺様に生意気な口を聞いた奴だし助ける必要性は全くないな」

と何の戸惑いもなくそう答えた。

「そんなー・・・」

結局頼りにしているランスに断られたロッキーは自分一人で助けに行けるとは思えず、男を不安げに見守る事しか出来なかった。

——そんな危機的状况の中、男は特に焦ることも無く気だるげに溜め息を吐いていた。

「ハァー・・・今週の分の化け物はもう終わってるって言うのに・・・」

今にも襲い掛かって来そうな巨大な異形を前にしても男の声には何の恐怖も混じっていなかった、それもその筈、壁を背に立っている男にとっては魔獣が自分を追い詰めたのではなく、自分が魔獣を正面からしか接近できない状況に追い詰めているのだから。

「グガアアアアアア！」

業を煮やした合成魔獣は一斉に男へと飛び掛かった。
そこで男はようやく腰に差している剣の柄を握った

———シャリン

次の瞬間に少し離れた場所で見物していたランス達の耳にその様な音が聞こえた。

それと一瞬遅れて飛び掛かった合成魔獣の上半身と下半身が別れたのであった。

「———秘剣・・・零閃」

———零閃

それが今男が放った技であり、端的に言えば極度に研ぎ澄まされ、剣の刀身を見る事すら不可能な程の超高速で放たれた居合切りである。

———この男の名は宇練銀閣うねりぎんかく

かつては右衛門左衛門や真庭蝙蝠と同様に四季崎記記の完成系変体刀の一本、斬刀・鈍なまくらの元所有者であり虚刀流・鑢七花との死闘の末に敗れた日ノ本の人間であった。

「いやー凄いですね、あの魔獣をそんなにあっさり倒せるなんて」その光景を啞然と見ていたランス達ににこやかな笑みを浮かべた男が話しかけて来た。

「でも貴方も凄いですね、あの魔獣を複数相手取りながら殆ど傷を負っていない・・・」最近噂のここで一番強い人って言うのは貴方の事ですよね？」男は笑みを絶やさずにそう続ける。

「何だお前は？」
ランスがそう問いかけると男は

「僕はアベルトと申します・・・えーと貴方のお名前は？」

「ふん、男に名乗る名前なぞ」このお方はランス様と言うだ——
「貴様は何勝手に答えとるんだ——っ!!」

台詞の途中で勝手に名を告げるロッキーを怒鳴りつけるランスだがアベルトと名乗った男は全く狼狽えずに

「ランスさんですね、それと貴方は？」
確認を取った後にいつの間にか近くに来ていた銀閣へと聞く。

「——宇練銀閣だ・・・あんた、ここの連中とは雰囲気が違うな・・・何者だい？」

そう問いただした銀閣にも男は戸惑うことなく。

「へえー、解るんですか・・・まあその件に関してランスさん、そして銀閣さんにいい話があるんで後で聞いて貰えませんか？」

そう告げるとアベルトは答えを聞かずに部屋へと去って行った。

「何だあの男は？」

突然現れた男に疑問の声を上げるランスに

「さあねえ・・・少なくともこの場所に外から入りこむ手段は持っているんじゃないかね」

自身の推測を告げた銀閣は欠伸を一つすると興味が失せたかのようにアベルト同様に部屋へと帰って行った。

「――おいちょっと待て！？今のはどう言う事だ！？おいコラ俺様を無視するなー！！」

「ら、ランス様、落ち着いてくだせえ！？」

銀閣が言い残した言葉に反応したランスは直ぐに問いただそうとしたが聞こえていないのか背を此方に向けたまま歩く銀閣を怒鳴りながら追いかけて行った。

時間が若干飛んで原作突入な九話語（後書き）

後語り

はい、と言う訳で三人目の刀語のキャラは個人的に一番渋いんじゃないかなと勝手に思っている宇練銀閣さんでした。

ちなみに銀閣さんが奴隷観察所にいたのは七花クンにやられて気が付いたらラドンの城の近くで倒れていてラドンが盗みに入ろうとした賊と勘違いして入れたと言う感じにしといてください。

そう言えば、今更だけど何時も自分夜中に書いて予約投稿で朝の6時に設定してるんですけどこの時間に投稿ってどうなんですかね・・・別に気軽に入り登録してくれている方にとっては関係ないんでしょうが、やっぱり出来れば多くの人に見て貰いたいって思いはあるんですね・・・

次回から試験的に予約投稿の時間を変えて行くかもしれませんが、何か意見があったら是非お願いします。

奴隷観察所を脱出する第壱拾話語（前書き）

前語り

銀閣さんのキャラがいまいち掴めない（挨拶）

早いものでもう十話です、プロローグ入れたら11です。

良くもまあ毎日更新が続くもんですね・・・その変わり原作が全然進みませんが・・・まあそれなりに飛ばし飛ばしにしていく予定だからだんだん進んで行くだろう（願望）

奴隷觀察所を脱出する第壹拾話語

「では、改めて自己紹介をします

——僕は反政府組織アイスフレームのブルー隊隊長を務めているアベルト・セフティと申します」

ランス達の奴隷待機部屋へとやって来たアベルトはランス、ロッキーそして銀閣へと名刺を差し出しながら名乗った。

名刺にはアベルトの言う通りの事が書かれていた

——最も宇練銀閣にとっては馴染みのない文字の為、読む事は出来なかったが。

「アイスフレーム？」

「要するにレジスタンスですよ、この場所を見れば分かる様にこの国の魔法待遇による差別や身分の違いによる迫害は酷いものです——そんな現状のこの国を何とかするために僕たちアイスフレームが活動しているんです」

「おお！凄いですだ！！」

感動の声を上げるロッキーだがそれとは逆にランスと銀閣の反応は冷やかだった。

「そんな事を言っているがお前は此处で捕まってるんじゃないか」
そうランスが問いかけるとアベルトは首を横に振り

「いえいえ、僕は此処へ優秀な人材をスカウトするために秘密の入り口から忍び込んでるんですよ」

「何い！？と言う事はそこを使えば此処から出ることが出来るんだな！！？」

「ええ、そうですよ

——ですがその代わりにランスさんには僕たちアイスフレームの仲間になって欲しいんです」

アベルトがそう言うと言ランスは興奮した様子から打って変わって面倒くさそうな顔になった。

「何故俺様がそんな事をしなければならんだ・・・そもそも俺様はこの国の人間でもないのだからレジスタンスなんかには全く興味が無いぞ」

「まあ、そうですね・・・でもランスさんにはそれ以外にもいい話がありますよ

——この事とか」

そう言っアベルトはランスに向かって小指を立てた

「——ほう」

それを見たランスは鼻の穴を少し膨らませながら続きを促す

「此処の様な男ばかりだと女性の肌が恋しくなりますからね・・・アイスフレームにはランスさんもきつと気に入る良い女性がいますので僕たちの仲間になってさえ貰えればその女性を紹介しますよ」

「ほほう・・・だが何人もの女を抱いてきた俺様が満足出来るほどの女なのだろうな？」

「それはもう、自信をもって保証しますよ」

「（フウム・・・どの道ここから脱出するにはこいつの言う秘密の道とやらを使うしか無いのだし・・・もしこいつの言う女が気に入らなかったならさっさとオサラバすれば良いのだしここは乗ってやるか・・・）よし、わかった
ただし本当にその女を抱けるんだろうな？」

「ええ、それでは交渉成立ですね——アイスフレームは貴方を歓迎しますよ」

「——あのくおらは？」

「？——ああ、大丈夫ですよ、アイスフレームは入団希望者は何時でも大歓迎ですから」

こうしてランスとロッキーの入団を取り付けたアベルトは次に部屋の隅に座っていた銀閣へと向かって言った。

「と言う事なのですが銀閣さん、貴方もその剣技をこの国の為に振るってくださいませんか？」

そう問いかけるアベルトを一瞥した銀閣は欠伸を一つし答える。

「国のため・・・ねえ、国だの国家の為だのと言う人間には碌な奴がない

——だが・・・」

傍から聞けば否定的な答えを返す銀閣だったがそこからこう続ける。

「いい加減この飯にも飽きてきた所だし・・・そのアイスフレー
ムってところではここよりはグッスリ眠れるんだろうな、お兄ちゃん
？」

意外な切り返しに軽く目を見開くアベルトだがすぐに表情を微笑に
戻し

「ええ、こんな所よりはずっと落ち着いていい所ですよ」
そう答えた。

それからランス達はアベルトの案内の元、血文字を目印にした隠し
通路を通り時折襲い掛かるモンスターを蹴散らしつつ進み、奴隷観
察所の外へと脱出する事に成功した。

「おおー

やっただす！外だす！！本当にあそこから出る事が出来ただすよ！」

「うむ・・・そうだな」

長い間死との隣り合わせな生活を強制されていたロッキーはそこか
ら解放された感動を表し、ランスもそれに静かに同意した。

「あー嬉しいだす、空ってあんなに広かったんだすねー」

久しく見る広い空を眺めながら感慨に浸るロッキーは隣で無事に脱
出出来てほっとしたのかランス達の隣で背伸びをしているアベルト
へと向き直る。

「アベルトさん、ありがとうございますだ！」

まさか本当に外に出ることが出来るなんて夢にも思ってただ
！！」

「ふふ」

「うむ・・・罨ではなかったか・・・」

「ああ、あんたも一応その辺は疑っていたのかい・・・ふあああ」

それぞれに外へ出れたことで気が緩み舞い上がっていたその時

『待て、宇練銀閣』

突然背後から名を呼ばれた銀閣はすぐさま振り返った。

——だがそこには誰も居らず、一匹のカラスだけが木の枝に止まっていた。

『・・・やはりお前は宇練銀閣だったか、その刀を持っている所からまさかとは思ひ鎌をかけては見たが・・・お前もここに来ていたとはな・・・その男は反政府勢力の者か？』

つまりはお前は反政府勢力へ着くと言う事か・・・』

真っ先に反応した銀閣から一瞬遅れて振り返ったランス達は空耳かと勘違いしたが声は驚く事にその枝に止まるカラスから声が出ているのだ。

「奇妙な術を使うねえ・・・そいつはもしかして何かの忍法って奴かい？」

『不違、これは相生忍法声帯移しと言って自分以外の生き物の口を

借りて話す忍法だ・・・お前の居合切りの事は奇策師殿の報告書に書いてあったが故に接近するには厄介なのでこの様に間接的に話させて貰っている』

「奇策師って言うとおのお嬢ちゃんの事かい？つまりはアンタは俺と同じ場所から来た元幕府関係者って所かい？」

流暢に喋るカラスと会話すると言うこの上なくシユールな光景だが、銀閣はこのカラスの向こう側にいる男の素性を予想した。

「えーっと・・・銀閣さん、この喋るカラスとはお知り合いで？」
事態を上手く呑み込めないアベルトは一先ず多少なりとも理解しているのだろう銀閣へと問いかける。

「知り合いつて程でもないねえ・・・アチラさんは俺の事を知っているようだが俺は逆さ喋り何て妙な話し方をする奴とは面識はあっても、カラスから声を出すなんて特技を持った人間とは面識はないねえ」

「だあー！！そんな事よりも折角脱出したのに速攻でばれているではないか！！」

ゴチャゴチャ言う前にこの訳の分からんカラスをぶっ殺すぞ！！」

暫く呆然としていたランスだがふと我に返り剣を構えて流暢に話すカラスに向かって剣を振りぬくがカラスはそれを嘲笑うかの様に空へと回避する。

『そう興奮するな・・・私はラドンの部下でも手下でも無いのでお前たちを捕まえる気など一切ない

——そもそも私は別件の任務を終え、何やら気配を感じたので見

に來ただけなのでな・・・その男については我が主に報告はする
がお前たちについて話すつもりは一切ない』

「その男——と言うのは銀閣さんの事でしょうか？一体何故？」

『不答、こたえずお前達の様な無関係な人間にわざわざ答える義務は無いの
でな・・・どうしても知りたければ心当たりのある本人に聞くことだ
——最も、その本人も正直に答えるとは思えないがな』

——そもそも自分が別の世界からやって來た人間などと話して信
じる人間も少ない、良くて夢を見たと思うか悪くて狂人と思われて
も可笑しくないのだから。

『——しかし、これで私の知る限り三本か・・・万が一に備えて
何らかの対策を取っておく方がいいかも知れんな・・・』

最後にそう意味深な事を呟くと、言葉を話していたカラスは鳴き声
を上げた後、空の果てへと去って行った。

「銀閣さん？今は・・・」

疑問を隠しきれないアベルトは先ほどのカラスの言うように銀閣へ
と問いかけるが

「さあねえ・・・とりあえずアンタらには関係無い事さ、気にしな
さんな」

それだけ言うと後は何も語らない銀閣にこれ以上聞いても無意味だ
と感じたアベルトは、一先ずランス達を連れてアイスフレームのア
ジトへと向かうのであった。

奴隸觀察所を脱出する第壱拾話語（後書き）

後語り

前話で言った通り本当に伏線も前触れでもないと思っていたのか？
あるんだなこれが（まさに外道！！）

ってまあ実際は書いてる内にこのシーンと言うか右衛門左衛門を絡
ませたくなったただけなんですけどね・・・ほら、一応主役ってこと
にしてるんで・・・

ついでに感想返しもおきます。

》黄泉傀儡さん

確かに何でも切れる鈍を持つ銀閣と力任せな剣技のランスじゃ真っ
向勝負じゃランスが不利ですけどあくまで『真っ向勝負』ならです。
闇討ち不意打ち卑怯三昧な事に何の抵抗もないランスなら手段を選
ばなければ何とかなると思いますよ（それに真っ向勝負でも主人公
補正的な物で何とかしちやいそうだし・・・）

あとどこぞの山門のキャラって言うのは忍んでないSAMURAI
な暗殺者のことですか？

ちなみにどうでも良い補足設定。

現時点での刀語キャラのレベルは

右衛門左衛門LV37＞真庭蝙蝠LV29＞宇練銀閣LV13です

右衛門左衛門のレベルが初期設定からだいぶ上がってるのは原作前と原作編への空白期の数か月に任務であれこれしてたからです。

尚、銀閣さんのレベルが他二人に比べて低いのは仕様です。

——だってランス世界に来て真っ先に奴隷観察所に閉じ込められてレベルの概念を知らないんです。

戦闘はチョコチョコモンスター相手にしてはいましたがあそこで出るモンスターなんてハニー・イカマン・フリーダム見たいな雑魚しかいないから徐々にレベルダウンしてるんです。

まあ今後はレベル神のついてるランスがいるんでどんどん上がっていくんでこのレベル設定はあんまり意味が無かったりします。

あんまりあとがきでだらだら補足入れるのもあれ何でこの位にしておきます。

誤字脱字、感想お待ちしております（何かこの書き方だと誤字脱字の感想を願ってるみたいですねww）

壱拾壱話語

アベルトの案内で二時間ほど一人通れるかどうかの木々が密集した森を歩き続け、一行はようやくレジスタンス・アイスフレームの本拠地へと到着したのだった。

「着きましたよ、ここが僕たちアイスフレームの隠れ里です」

「ほう、何だか思っていたのとは違うな・・・
もっと如何にもな洞窟とかが隠れ家だと想像していたが」

ランスの言うようにこの場所には幾つもの建物が建設されており小さな村の様な印象すら持てた。

「僕たちの仲間には建設系に強い人もいますので」
ランスの疑問にそう答えるとアベルトはそれから暫くランス達に隠れ里について説明を続けるのであった。

一通り里の説明と孤児院経営をしている女性、キムチ・ドライブをランスに紹介した後アベルトはアイスフレームのリーダーの元へと一行を案内した。

——そこに現れたのは車椅子に乗り憊い雰囲気を纏った女性が一

行を迎えた。

この女性こそがレジスタンス・アイスフレームのリーダーであるウルザ・プラナアイスである。

「おー・・・９７点」

「はい？」

その整った顔立ちと優しげな雰囲気はランスがボソリと評価を下す。――それと同時にランスの中で必ずこの女性を抱く事が決定した瞬間でもあった。

それからウルザはランス達にアイスフレームの活動を説明しつつ（途中に何度もランスがウルザ個人に対しての質問を投げかけては同席していたアルバートの父であるダニエル・セフティに睨まれると言う事を繰り返すが）アイスフレームに入隊するか否かを聞いていた。

それに対してランスは即答で入団の意を示し（むろん下心しかないのだが）それに続く形でロッキーも入団を決めた。

最後に残った宇練銀閣だが、彼は唯一人、名も自身では名乗らず（代わりにアルバートが紹介していたが）ウルザの説明にも興味なさげに――さらには時折欠伸を漏らしつつ――佇んでいた。

「それで、銀閣さんはどうなんですか？」

他の二人と違い肯定も否定もしない銀閣にどう対応すれば良いのかウルザが悩むのを感じたアルバートはウルザの代わりに銀閣に問いかけた。

「——そうだねえ・・・正直、お姉ちゃんの説明ではアンタらの反政府活動って言うのには全く興味が湧かないねえ」

「——そうですか・・・では仕方ありませんね、私たちの活動は危険を伴う事も多々あるので強制する訳にもいきませんし」

遠回しながら否定の意が含まれていると感じたウルザは若干表情を曇らせるがそれと同時に危険を冒させなくても済む安堵を浮かべていると、銀閣は「ただ——」と返答を続ける。

「此処に来る前にちよつと面倒な事になっちまってねえ・・・どうにも俺は何処の誰かも分からない奴さんやつに目を付けられちまったみたいでねえ」

その言葉を聞きその『面倒な事』の現場にいたランス・アベルト・ロッキーの三者の脳裏に奇怪な言葉を介するカラスが思い浮かんだ。

「まあその辺の問題が何とかなるまでは、言い方が悪いが隠れ蓑が欲しい、その代わりと言っちゃあ何だが、アンタらの手伝いくらいならしてやっても良いとは思っている」

銀閣のその物言いの仕方にダニエルが顔を顰めるがウルザは特に表情を変えることなく穏やかに。

「そうですか・・・大丈夫です、私たちアイスフレームは元々事情があつて隠れなければいけない方の保護も活動の一環です

協力してくださるのなら銀閣さんの問題も出来る限りのお手伝いをさせていただきます」

と言い放つウルザだが、その後に確認を取るかのようダニエルへ

と不安げな表情で顔を向ける様は一組織のリーダーとしては何処となく頼りない印象を与えるのだった。

——その後、それぞれが自分の部屋の場所の説明と次の日の予定を決められた後（因みに銀閣はランス同様に実戦部隊のホワイト隊に所属することになった）ランス達と別れた銀閣はアイスフレームの周辺の森へと足を運んでいた。

暫く歩き続ける銀閣だが、ふと足を止めると誰に向けるのでもなく声を上げる。

「——それで？あれからずっと後をつけていたアンタは俺に何の用があるのかな？」

「——————気付いていたか・・・」

その言葉と共に銀閣の背後に仮面を付けた洋服を纏った男——右衛門左衛門が姿を現した。

「——いやいや、適当に言ってみるもんだねえ、まさか本当に出てくるとは驚いたよ」

振り返り右衛門左衛門の姿を視界に収めた銀閣はさも意外そうにそう言った。

「なるほど、気配は完全に絶って居た筈だと思っていたが・・・鎌を掛けられたと言う事か」

特に動揺する事も無く納得した様に声を出す右衛門左衛門

「それじゃあ次はアンタのその首に手を掛けて見ようかね？」

そう言いながら斬刀・鈍に手を掛けながら居合の構えを取る銀閣だ
が右衛門左衛門は間合からさらに数歩離れつつ答える。

「不笑、それが本気だとしても冗談だとしても宇練銀閣たるお前が
言え^{わらず}ばとても笑えないな――」

最初に言って置くが、今この場でお前と争う気は私には無い」

そう言うのと右衛門左衛門は腰に差してある大小二本の剣を外し地面
に落とし言葉の通りに戦意が無い事を銀閣へと示す。

「――まあ、そこまで言うのなら、俺もお兄ちゃんと戦う理由も
ないか」

銀閣もそう呟くと斬刀から手を離す。

「――で？戦う気が無いのは分かったが、それなら何の為にわざ
わざと尾行なんてして来たのかな？」

「ハッキリ言ってしまうえば監視だ、偶然見つけたとは言え、四季崎
記記の刀を所持する人間は大なり小なり刀の毒に冒され、放ってお
くと危険極まりないのでな・・・万が一、我が主に害をなす存在な
らば、主に牙を？く前に可能性を潰して置くのが部下の務めと言う
物だからな」

「本当にハッキリと言うねえお兄ちゃん・・・しかし、そこまで伝
えるって事は、俺はアンタの言うアンタの主とやらの牙を？く存在
じゃないと判断したのかな？」

「不当不遠（当たらずも遠からず）、お前個人の事はどうかは知ら

んが、お前が所属したアイスフレームは我が主も一目を置いている組織故に一先ずは安全であろうと判断を下したまでだ・・・
だが万が一、お前が我が主に敵対する事があれば、私は全力を持って真っ先にお前を殺しに行くことになるだろう」
その言葉には虚言も誇張も一切なく、ただ事実だけを告げる力を込めた言葉だった。

「――怖いねえ、まあその時は俺も、黙って抵抗するだろうけどねえ」

「今日の所はこの辺りにして置こう、私はこれから本来の任務についての報告を主に告げなければならぬのでな・・・当然、お前の事も報告はして置くが」

「まあ、こっちも掛かって来なければ何もするつもりも無いしねえ・
・報告なり何なり好きにだけするといいさってもう居ないか――
―ふあああ、全くせっかちな奴だねえ」

銀閣がそう言っている頃には既に右衛門左衛門は姿を消していたのだった。

壱拾壱話語（後書き）

後語り

あい、銀さんと仮面さんの直接対峙な話でした。

ぶっちゃけ特に話すこともないんで感想返しを

≫あびゃくさん

実を言うと順番とかは全然考えていませんでした・・・ただ単純に刀語は序盤の方は七花くんは敵を殺すんで出すキャラが序盤に固まってるだけなんですよね・・・それと、期待してもらってるなら、申し訳ないのですが、迷彩さんは今の時点では出る予定はないですね・・・実はもう刀語側からだすキャラはそんなに居ないしキャラも（脳内では）現時点では決まっているので残念ながら迷彩さんはワンチャン無いかと・・・あんまり出し過ぎるとキャラの書き分けがgggggggggg

もし出すとしたらランス？編が完結出来て戦国ランス編が始まるとしたら、出るかもしれないくらいの気持ちです・・・

第拾貳話語

——アイスフレームの里へと到着した翌日

「ふああ——さて、ホワイト隊とやらは何処に行けばいいのかねえ・・・」

日が昇り暫く立ってようやく起床した銀閣は自身が所属することになったホワイト隊へ向かおうとしていたが、如何せん場所が分からずに彷徨っていた。

「あれ？銀閣さんじゃ無いですか、どうしたんですかこんな所で？」

フラフラと辺りを彷徨う銀閣を鎧を着た茶髪の女性と共に見つけたアベルトが声をかける。

「ああ、お兄ちゃん、悪いんだけどホワイト隊ってのは何処に行けばいいのか知ってるかい？」

「ああ隊舎ですか、ちょうどよかった、僕たちもこれから様子を見に行こうと思っていたんですよ」

「アベルト、あなたが連れて来た優秀な戦士とはこの人か？」
アベルトの隣にいる女性が銀閣を見ながらアベルトに問う。

「そうですよ、スカウトして来た人はもう二人ほどいますがこの人

ともう一人はとても優秀な戦士ですよサーナキアさん」

「お兄ちゃん、そこのお嬢ちゃんは此処の仲間かい？」

初めて見る顔に銀閣はアベルトへと問いかけるがお嬢ちゃん呼ばわりされた本人は少し顔を顰める。

「お嬢ちゃん等と女々しい呼び方をしないでくれ、私はサーナキア・ドレルシュカフ

——誇り高き騎士だ——！」

「ふああ——ああ分かったよ、悪かったな、お嬢ちゃん」

「全くわかっていない——！！」

悪びれも無く訂正もしない銀閣に吼えるサーナキアを宥めつつアベルトは銀閣を案内しながらホワイト隊へと向かう。

——そして暫く歩き隊舎が見えて来た所で銀閣は異変に気付く。

「——随分と血の匂いがするが、ここではそこまで鍛錬に気合を入れてるのかい？」

そう問いかけられたアベルトとサーナキアは遅れて異変に気付き、一先ずアベルトが隊舎の中の様子を確かめた。

「あーあーあー……」

これはちよつとまずいですよランスさん……」

「何を言う、先にケンカを売って来たのはこいつらだ」

中からアベルトと男の声が聞こえた銀閣とサーナキアは続いて隊舎

へ入る。

「アベルトどうした？」

「一体何がどうなって・・・」

「あらら、さっそく殺っちまったのかい？」

部屋の床には切り殺されたホワイト隊の隊員が何人も沈み惨状なっており、その中心では血糊のついた剣を振るうランスが立っていた。

「ん？」

その惨状を作り出したランスはサーナキアの姿を見て何か思い出そうとしている。

「き・・・きっさまー！！！！！」

「おお！石化から醒めて俺様にナニされたサーナキアちゃんじゃないか！！！」

「五月蠅い黙れ！！！」

互いに面識があるような二人だがサーナキアの反応から良い印象を持っていないことは明らかだった。

——その後、入隊そうそうに隊一つを全滅させてしまったランスはウルザとダニエルの元へと連れられたのだが、元々ホワイト隊の隊長は他の団員とのトラブルを良く起こしていたのと、一人で隊員すべてを倒した実力とランスの口八丁やアベルトの弁明により、ランスが隊長になり、新たにグリーン隊を作り実績を果たす事を条件

にこの件は不問とされたのであった。

「――で？俺は結局どうすればいいんだい？」

「こうなってしまったのは仕方ないので銀閣さんはとりあえずグリーン隊に所属すると言う事で」

「俺様は男の部下はいらんぞ」

「まあそう言わずに、ほらロッキーさんもランスさんの部下みたいなものじゃ無いですか」

「チツ――だが役に立たなかったら直ぐに捨てるぞ？」

「――やれやれ、勝手な男だねえ・・・ふあああ」

――その後、この様なやり取りによってなんだかんだで銀閣はランスの部下と言う事になってしまったのだった。

――その頃、王者の塔

「――以上が昨日の琥珀の城を訪れていた人間だ」

「そう・・・パイアまで・・・」

「――四天王パイアと千鶴子殿は旧知の仲だったと聞くが・・・」

私にはあの女を友と見ることが出来ることが不思議でならないのだが・・・」

右衛門左衛門は本来の任務であったラドンの館へ集っていた貴族のリストを千鶴子に渡しつつ口頭での説明を混ぜ報告し終わり、報告後の意見の交換をしていた。

「あの子は！昔はあじゃなかったの！！」

——禁断の魔道書に触れてしまってあぁなってしまったの・・・
あの子は本当は優しい子なのよ・・・」

「——失礼した、主のかつての友人を侮辱するような発言をしてしまったな・・・」

「——構わないわ・・・それで？報告が終われば直ぐにいらなくなる貴方が残っていると言う事は、他にも何か報告があるんでしょう？」

「不違^{ちがわず}・・・今回の任務中に偶発的にだが不安分子を発見したためその詳細を報告する」

——その後、宇練銀閣について、自分と同様に異世界の人間であると同時に危険な武器を所持している旨を千鶴子に報告する右衛門左衛門。

——尚、右衛門左衛門は既に千鶴子にだけではあるが、自分がこの世界の人間では無い事を話している。
その理由としては、何時までも隠していても意味が無い事と千鶴子ならばその事を知った所で悪用や偏見を持つことは無いだろうと感

じられるほどに、現在ではお互いに信頼し合っていることが一番の理由であった。

「――なるほどね・・・何でも切ってしまう剣・・・いえ、刀だったかしら、確かに脅威ではあるけど、その彼がペンタゴンでは無くアイスフリームに所属したのは幸いね」

「だが、油断は禁物だ・・・以前にも言ったが、四季崎の刀の毒は体験せねば分からぬ程に強力だ・・・万が一の事は常に考えて「千鶴子様――!! アニス・沢渡お使いから帰ってきましたー!!」」話しをぶった切ってアニスが部屋の中へと買い物袋を片手に侵入してきた。

「アニス!! アンタはノックくらいしなさいって何回言えば分るの!!?」

「おお、右衛門左衛門殿も居ましたか!!」
「ちょうどよかった、右衛門左衛門殿が気に入ると思ってこれを買ってきたのです!!」

そう言ってアニスが買い物袋から取り出したのは紫色の蝶をあしらった仮面・・・通称パピヨンマスクだった。

「ちょっとアニス!? あなたそんなの買うお金が何処にあったのよ!?!」

「申し訳ありません千鶴子様ー!!! 衝動買いしてしまったのでお使いの分は半分ほどしか買えませんでしたー」

「あ・ん・た・わー!! 何でお使いも碌に出来ないのよ!!? あなた公式では特技・お使いってなってるんだからせめてお使いだけは完璧にこなせるようになりなさいよ!!」

「おおーメタい、メタいです千鶴子様! 公式とか平然と言ってしまえるとはそこに痺れます! 憧れます!」

——結局、この後千鶴子はアニスの説教に移ってしまい、報告途中で完全に脱線してしまった右衛門左衛門はアニスから手渡された蝶の仮面を見つめながら、何とも言えない表情で立ち尽くすのだった。

第拾貳話語（後書き）

後語り

アニスのキャラが書くのが楽しくて仕方ないです。

そしていつの間にかPVが10000を超えていました。

折角なのでもう少し進んだら番外で右衛門左衛門の空白の数か月の任務の一部分な物を書こうかと考えているんですがどうでしょうか？
ちなみにメインは右衛門左衛門とアニスの予定です。

もしくは何かリクエストがあればそれに応じた番外編を書くかもしれません・・・まああくまで今の段階でやるかも知れないくらいですが・・・

宇練銀閣がメインな壱拾参話語（前書き）

前語り

サブタイの通りに銀閣メインです、仮面の人は今回は完全に出てきません。

それと今回、若干・・・本ッ当に若干だけ性的な描写があります。って言うっても本当に大した事は無いので特に気にしなくても良いと思います。

宇練銀閣がメインな壱拾参話語

———グリーン隊メンバー

新たに作られたグリーン隊の隊舎にて、隊長であるランスを除く隊員全員が集まっていた。

———むろん、そこには宇練銀閣の姿もある。

「さて、隊長が来る前に新人の方もいらつしやるので先に私たちだけでも自己紹介を済まして置きましょうか・・・
私はカオル・クインシー・神楽と申します・・・
一応はこのグリーン隊の副隊長と言う事になります」

黒髪に袴姿の和風な女性・カオルは先んじて新入り二人（この場所ではロッキーと銀閣）へと名乗る。

「お、おらはロッキーと言うです！」

美人への耐性が少ないのか緊張気味に答えるロッキー

「ふああ———宇練銀閣だ」

何時も通りに眠たげに答える銀閣

「俺はバーナード・セラミテだ・・・よろしく頼む」

極端に逆立てた赤い髪の子・バーナードが二人に続いて名乗る。

「ナターシャよ、よろしく」

最後に少々（悪い意味で）個性的な顔立ちの女性・ナターシャが名乗り、この場にいる全員の名が行き届いた。

——が、この後ランスのブスはいらないからチェンジしろと言う身勝手によってナターシャは救護担当のプリマ・ホノノマンと交代してしまったのであった。

——似た格好？

「何だかカグラさんと銀閣さんって服装の雰囲気似てるだな」
隊長であるランスへも紹介を終えた後、ロッキーはふと二人を見比べてそう言った。

「そう言えばそうですね・・・私のこの服はJAPANで良くある服装なのですが、銀閣さんはもしかしてJAPANの出身の方ですか？」

「さあねえ・・・俺は気が付いたら奴隷観^{あそこ}察所に居たんで故郷の事なんて覚えてないねえ——ふあああ」

そうカオルの問い掛けに答えた銀閣だが、若干誤解を招く物言いをしたために、気まずい事を聞いてしまったのかと周りの空気が少し重くなってしまった。

——カオルと零閃

周辺の森の入り口近くの一角で銀閣は密集する木々を前に構えていた。

そのまま数秒ほどの間を置き風が一吹きし葉を揺らした瞬間

――――シャリン

「――零閃」

剣筋すら見せない高速を超えた居合抜きが正面の木を通過し数秒後、ようやく両断させた事に気付いた気はユックリと切り口から倒れていった。

「――――すばらしい技量ですね・・・」

それを後ろで見ていたカオルは感嘆の声を上げる。

因みに何故ここにカオルと銀閣がいるかと言うと孤児院のお姉さんことキムチに薪が足りなくなって来たと偶然孤児院を訪れていた（カオルは子供たちへの勉強のため、銀閣は食事を取りに来たため）二人に告げ、カオルがならば自分たちが調達してくると答えたため、なし崩し的に銀閣も協力していたのだ。

「私も居合切りには多少の自信があったのですが銀閣さんのその零閃を見てしまっただけは井戸の中の蛙であった事がヒシヒシと伝わります」

「そこまで言うほどの者じゃないさ、俺はこれしか出来ない剣士だからな、俺から言わせれば、大の大人を軽々と投げるアンタの柔術

の方がよっぽど見事だと思うがねえ」

「あら、ありがとうございます」

「——これでも免許皆伝で『神楽』の姓を頂いた身ですのでそう言
って頂けると自信が持てます」

そう言いながらカオルは銀閣がさらに細かく切り刻んだ木を束ね、
持ち込んでいた籠へと入れて行くのだった。

——宇練銀閣と睡眠娘

——銀閣は特にする事も無く里の中をふら付いていた

元々以前の世界では部屋の中で延々と一人で眠る毎日が続いていた
銀閣だがこの世界でその様な事をしていたはたちどころにレベルが
下がる・・・要するに弱くなってしまいう事をした銀閣は時間があ
れば外で鍛錬をする事になっていたのだった。

——仮にも剣士として、銀閣も自身の技を錆びさせる事には抵抗
があるようだ。

そして暫く歩いていると、日当たりの良さそうな草原を見つけ鍛錬
に丁度いいと思った銀閣はその草原へと入るがそこで仰向けで倒れ
ている少女が居る事に気が付いた・・・

「——グウーグウーグウー」

そこで倒れて・・・いや、眠っていたのはつい先日ランスが隊の
追加として連れて来た青髪の少女・セスナ・ベンビルだった。

「——日当たりが良いとは言えこんな所で寝てたら風邪を引くぞ、
お嬢ちゃん」

日当たりが良くとも風はそれなりに吹く草原は長時間いれば体が冷えてしまう事が予想できた銀閣は一先ずセスナを起こそうとセスナの肩を揺さぶる。

「――グウグウグウ」

しかしどれだけ揺さぶられてもセスナは一向に起きる気配がない・

「おい、お嬢ちゃん・・・はあ、まあいいか、別に」

暫く続けていた銀閣だがどれだけ起こそうとしても目を覚まさないセスナに諦め、傍目から見たら剣を握って立っているようにしか見えない零閃の素振りを始めるのだった。

「――んん？・・・おお!!」

数時間ほどが経過し、ようやくセスナは目を覚ました。

「ふあああ―――ようやく起きたのか、お嬢ちゃん、そこまでグツスリ眠れるとは羨ましい限りだよ」

一通り鍛錬を済ませた銀閣は、かと言ってそのまま放置する訳にも行かないのでセスナの隣で座り、セスナが起きた物音で目が覚める程度の浅い眠りにっていたのだった。

「えーと・・・銀閣・・・・・・・・だっけ？」

寝起きで脳が覚醒しきっていないのか、疑問符をつけ尋ねるセスナ

「ああ、起きたのならさっさと部屋に戻りなよお嬢ちゃん、何時までもこんな所で寝てたら体を冷やすぞ」

「・・・そっちの服装の方が・・・ずっと寒そう・・・」

セスナの言う通り、銀閣の服装は肌に直接薄い着物を一枚羽織っているだけでセスナよりも寒そうな格好だった。

――――宇練銀閣と睡眠娘 PART 2

先日と違い銀閣は近くの森の中を歩いていると、前回同様仰向けで寝入っているセスナを見つけた

――しかし、その周囲には2～3人の男が集まり様子が可笑しかった。

その内の一人の男は服越しにセスナの胸元を弄り、他の二人もそれぞれ一人は自身の股間へと手を伸ばし、また一人はセスナの服に手を掛けていた・・・

「何をやってんだい、お兄ちゃんたち」

自分たち以外には誰もいないと思っていた所に突然声を掛けられた男たちはビクツと体を震えさせ振り返ると声の主が最近入隊したばかりの新入りだと気付き下卑た笑みを浮かべる。

「何だ新入りかよ、驚かせやがって」

「何って見てわかんねえのか？ナニしてんだよ」

そう答える男たちに良く見なければ気付かない程度に僅かに顔を顰めた銀閣は

「セスナのお嬢ちゃんはグッスリ眠っている様だが？アンタらのそれは強姦って言うんじゃないのかい？」

と問いたですと男たちは悪びれも無く

「大丈夫だって、こいつこんな風に何せれても起きなくなる時があるんだよ

——だからその間に俺らがナニをしようが眠ってて気づかねえよ」
そう言い張った

「何時もはキムチさんに頼むけどやっぱ偶には違う味も楽しみたいからな・・・」

また別の男が続けてそう言うのと銀閣は黙って男たちへと近づく

「ん？何だ新入り？お前もこいつの体を楽しみたいのか？

いいぜ今見た事とこれからやることを黙ってるんならお前にもお零れをやってもいい——シャリン——ぜ？」

その言葉がその男の最後の言葉だった。

「—————零閃」

銀閣がそう呟くのに一瞬遅れて男の体がズレ、胸辺りから上部分だけが地面へと落ちた。

「うッ——うわあああああああああああ！！！！？カッ
ツォ！！？」

パニックになりながら死んだ男の名を呼ぶ一人

「デメェ！！？何をしやがったあ！！？」

突然目の前で命を刈り取られた仲間になが起きたのか分からないまでも手を下したのであろう銀閣へ向かって武器を構える一人だが

「――零閃編隊・二機」

そのどちらも、苦痛を感じる間もなく先の男の後を追ったのであった。

「――はあ、一張羅が汚れちゃった・・・」

血糊がベツトリと着いた服を見つめながら銀閣はそう呟いた。

「ん？・・・おお？・・・これは？」

そこでようやく目を覚ましたセスナだが目が覚めた途端、上半身と下半身が泣き別れた死体が三人分も倒れている状況など初めてだったのか、唯一生きて立っている銀閣へと目を向ける。

「ああ、気にすんなお嬢ちゃん、人として、男として最低な奴が何人かいなくなったただだよ」

――この後、報告が上がりウルザ達に呼び出された銀閣だが、眠っていて無防備なセスナを襲おうとしていたとの銀閣の証言と例の男たちは以前にも同じことをしていたとのセスナの弁明もあり、銀閣はこの件に関しては嚴重注意と言うだけで不問と言う事になったのだった。

——なお、この後セスナは

「銀閣・・・良いお茶をもらったから・・・一緒に飲もう？」

「ん？ああ、別にかまわねえけど」

「ん・・・♪」

銀閣に懐いたのであった。

——それから、これは完全に余談だが、アイスフリーム内ではこの件によって、「セスナが眠っている所を襲うと、情け容赦なく一刀両断されてしまう」との噂が広まり、わざわざ部下にしたのに迂闊に手が出せなくなってしまった為にランスの機嫌が悪くなったのは言うまでも無い。

宇練銀閣がメインな壱拾参話語（後書き）

後語り

セスナ可愛いよセスナ

ブツチャケ最後のシーンが書きたかっただけで前半はほぼ飾りです

ww

ランスクン、マジスンマソン

実は、『暇があれば眠ってる』・『一撃必殺系の技を持っている』
見たいな共通点も若干あるんでこの構成は何となく決めています・

銀セスは俺のジャスティス（待て

ちなみに今回銀閣さんがつい切っちゃったのは刀の毒とかそんな
じゃなくて単純に武士としてあの三人が気に入らなかったからなの
と、何となくセスナにシンパシー的な物を感じて気に掛けてたから
—————って事にしといてください。

累計20000アクセス記念番外〜右衛門左衛門の休日〜前編（前書き）

前語り

番外って言っても原作前と原作入るまでにあつた右衛門左衛門のとある一日？

的な話です。

累計20000アクセス記念番外／右衛門左衛門の休日／前編

——これは、ランスがゼスに来る2ヶ月ほど前の事・・・即ち、右衛門左衛門が千鶴子の部下となり1ヶ月ほど経ったある日の事である。

——パチリ

「——休暇？」

唐突に千鶴子から掛けられた言葉に戸惑い聞き返す右衛門左衛門。

——パチリ

「ええそうよ、貴方も私の部下になってから毎日頑張ってくれてるし、一日くらいは羽を伸ばしてユックリして来たらどうかと思って」

——パチリ

「ム——しかし、今はそれほど悠然として居られるほど暇ではないだろう・・・この国は少し叩けばいくらでも粗は出てくるのだから・・・ここか？」

——パチリ

「そうね・・・だけどそれは貴方が一日休んだくらいで劇的に悪化するような事でも無いわ、それに貴方も人間何だから、少しは体を休めないと何時かは無理が祟って取り返しの付かない事になるかも知れないじゃない・・・そう来るなら」

——パチリ

「ツ・・・まあ確かに、一理はあるな、分かった明日一日は休息を取らせて貰うことにしよう——あらず不有、参りました」

そう言って盤上の駒が自身の王を完全に追い詰めているのを認めた右衛門左衛門は千鶴子へと負けを宣言した。

——ちなみに、先ほどから二人がやっているのは右衛門左衛門が故郷の娯楽として紹介した将棋であった。

初めの内はルールと定石を把握しきれなかった千鶴子が負け越していたのだが、さすがは情報処理魔法を得意としている分、呑み込みも早く、6ゝ7局目には右衛門左衛門を圧倒するほどに腕を上げてしまっていた。

——閑話休題

翌日

——休暇を与えられた右衛門左衛門だが元々休日を与えられた事など皆無に等しい彼にとっては何をして過ごすかなど全く分からなかった。

故に他の同僚へと休日のごし方を尋ねて見る事にしたのだった。

——休日の過ごし方／リヒト・アルデヒドの場合

「——えっ？休日の過ごし方ですか？

・・・そうですね、自分はこれと言った趣味を持ち合わせていないので、せいぜい家で読書や魔法の修業をする程度ですかねえ・・・」

真面目な人格通りオフの日まで生真面目な男、リヒトだった。

——クロム・ブロンズルの場合

「はあ？休みの日に何をしえか？

そりやお前、日ごろの仕事の疲れを癒すために酒屋で酔い潰れるまで飲んだり

（自主規制）な店で（自主規制）な事をしたりって色々あるだろう・・・ウヒヒ」

本能に忠実な答えを返すクロム・・・て言うか本当に貴族かお前は？

——ヘリム・リビルの場合

「っえ？休みの日ッスか？

そうッスね・・・僕は何時も休日には学生時代の仲間と出かけたり服やら生活必需品やらを調達するために買い物に行くッスね・・・本当は彼女でもいいれば一緒に出掛けたりとか出来るんスけど・・・

どうにもゼスの貴族の女の子とは合わなくって・・・」

「——ム？その言い方だと、ヘリムはこの国の人間ではないように聞こえるが？」

「いやー実はそうなんスよ・・・僕は自由都市の出身でこの国には数年前に引越して来たんスよ・・・幸い、僕は魔法使いだったんで差別とかはされなかったツスけど、どうにも二級市民の人たちの扱い方を見るとこの国の貴族の女性とは価値観が合わなくて・・・大体なんで彼女たちは同じ人間の人たちをあんな扱いに出来るのが僕には理解出来ないツス——それに貴族ならもっとそれらしい自覚をもってブツブツブツブツ」

最後の方ではこの国の貴族の女性に対する愚痴を延々と語るヘリムに付き合いきれないと感じた右衛門左衛門は早々に姿を消していた。

——アニス・沢渡の場合

「はぁ？この子に休暇？」

そんなのあるわけ無いでしょう」

丁度千鶴子と共にいたアニスを見つけた右衛門左衛門が尋ねるとアニスより先に千鶴子が答えた。

「そもそもこの子は私が監視と管理をしているからここに居るのであって特に仕事をしてる訳じゃないのよ？」

——て言うかこいつに仕事なんて危なくしてお使いくらいしかさせられないわ・・・だからアニスは常に休日な状態だから休暇なんて与える必要も無いのよ」

「ガーン!? そうだったのですか!?

つまりアニスはずっと働いていて休日を全く与えられずに馬車馬の如く働かされていると言う訳なのですか千鶴子様」

「今のをどう聞けばそんな解釈が出来るのよアンタは!?!?」

「うーこうなったらストライキをしてやります! 手始めにこの部屋の壁一面に『我休暇求む』と血糊で書きまくります」

そう言って何処からともなく赤いペンキがタツプリ詰まったバケツを取り出すアニス

「ちょ!?! やめなさいアニス!?! 右衛門左衛門も早く止めなさい!」

突然始まった珍事をただ眺めていただけの右衛門左衛門だったが千鶴子に命令されたため、今にも赤いペンキを壁に塗りたいろうとするアニスを両手首を握り万歳させる形で拘束した。

「うー・・・離してください、右衛門左衛門殿! 女にはやらねばならない事があるのです!?!」

壁をペンキで汚す事が女としてやらねばならぬ事なのだろうか? 等の真っ当な突っ込みをした所で意味が無い事はこの1ヶ月で分かり切っていた右衛門左衛門は拘束を緩めることは無かった。

「不離^{はなれず}、とは言ってもこうして何時までも捕まえていても何も変わりはないか・・・

千鶴子殿、この際アニス殿にも休暇と言う形で今日1日自由にしてやってはどうかかな?」

「――馬鹿言わないで!?! 私が目を離したら1日でこの国は消えてしまうわ!?!」

右衛門左衛門の提案に割と本気でそう答える千鶴子——だが、言ってる事は事実だったりするので笑えない。

「では、休暇を与えられて今日1日暇な私がアニス殿を監視して置こう・・・それならば問題ないだろう？」

そう言う右衛門左衛門だが、暗に「問題を起こしそうなら、起こす前に自分が処理する」と言っていた。

それを感じた千鶴子は暫く悩むが最後条件を一つ付けることで右衛門左衛門の提案を認めるのだった。

——こうして、異世界の元忍びと人類唯一のLV3の魔法使いと言う奇妙なコンビの休日が始まるのだった。

——尚、千鶴子の出した条件とは、何事も無く生きて帰って来るとの事だった。

——これが死地へと向かう部下へ掛ける言葉としてなら正しいのだろうが、あくまで休日に出掛けるだけの部下へ掛ける言葉としては如何様な物なのだろうか？

だが右衛門左衛門はまだ分かっていなかった。

超絶級のトラブルメーカー・マジカル★アニスと出かけて何事も無く終わる事など有り得ないと言う事実を・・・

累計20000アクセス記念番外く右衛門左衛門の休日く前編（後書き）

後語り

前後編だけど実際一話に纏めてもよかったかと感じた・・・

でもそうすると本編の続きを書いていないので夏休み中毎日連続がなくなるのかもしれないんで時間稼ぎも兼ねて前後編にしました。

後編では右衛門左衛門とアニスのデート（と言えるのか？）が始まりますがぶっちゃけ前編と長さほとんど変わらない短さなので過度な期待はしないでください・・・

つかオレツチに甘い話なんてかけねーべ（泣）

累計20000アクセス記念番外〜右衛門左衛門の休日〜後編

——急遽始まった右衛門左衛門とアニスのドキドキ★休日大作戦
(仮)

果たして二人は無事に戻ることが出来るのか？ 千鶴子の胃の調子は如何に！？

「さあ出発しましょう右衛門左衛門殿！！」

気合十分に何時もの格好で右衛門左衛門を呼ぶアニス——ただし、杖を持っている。

「アニス殿……街に出かけるのに杖は必要ないだろう」

出だしからアニスに杖を置いて来させる様に説得する羽目になった右衛門左衛門だった。

——王者の塔から首都・ラグナロックアーツへと到着した二人だが、生憎にも右衛門左衛門は何処へ行くと言った予定も無いためこの後の進路はアニスに任せるつもりでいた。

————が

「——アニス殿……一応確認しておくが、ここは女性用の下着を取り扱う店では無いのか？」

右衛門左衛門の言う通り、アニスが真っ先に向かったのはゼスの代

表的なランジェリーショップだった。

「？　それがどうしましたか？　最近下着が古くなってきたので新しいのが欲しいと思っていたのですが」

羞恥心やらの感慨も無いのか、平然とそう言って店へと入るアニスに呆れる右衛門左衛門だが何処へ行くかを任せたのは自分のため、特に何かを言う事も無く黙って店へと入って行った。

——基本的にこのような場所で男女でくる場合は仲の良い親戚関係か恋人関係くらいの物だが、思いの他男女のペアが多かったために右衛門左衛門の存在も目立つことは・・・あった。

「おお！！　右衛門左衛門殿！！　これを見てください、こんな大胆な下着があるなど驚きました！」

——そう言って殆ど紐だけのショーツを右衛門左衛門に見せる人類唯一の魔法LV3（目立つ元凶その1）

「りかいできず不理解、それではもはや下着としての機能すら怪しいではないか……胃や、くノ一の色仕掛けとしてなら効果的なのかもしれぬか・・」

——冷静にそう答える仮面を付けた変質者風の男（目立つ元凶その2）

ハッキリ言って店の中の他の客はドン引きしていた。

「お客様も御目が高い…そのショーツは最近発売された新デザイン

の物でして：ご利用のお客様からは穿いている筈なのに穿いていない様な解放感が味わえると人気の――ブチ「あー！ちよっと引っ張ったら千切れてしまいましたー」ちょ――お客様！！？」

商売魂を見せて果敢に商品のアピールをする店員そっちのけで興味津々に紐パンを眺めていたアニスだが、バナナの皮があれば必ずスッ転び、物に触れれば直ぐ壊す彼女がそんなデリケートな物を弄繰り回せばこうなる事は当然であった。

――その後、その店では右衛門左衛門がアニスに商品を触られず、機能性を重視しつつも最低限のオシャレを残す絶妙な商品を選別し弁償と購入を済ませて店を出た・・・

隠密・暗殺から女性の下着選びまでこなすこの男は結構万能なのかもしれない・・・

――その後も良く遊んでいるから得意だと言うアニスに連れられボウリングに行ったり、ゼス王宮博物館に向かおうとするアニスを（魔法使いしか入場を許されなかったため）全力で止めたりと、二人はそれなりに楽しみながら過ごしていた・・・

「いやー、今日は楽しかったですね・・・千鶴子様以外とこんな風に二人で過ごすと言うのは初めてかもしれません」

右衛門左衛門の方を見ながらそう言うアニス――ちなみに体ごと後ろを向けて歩いているため後ろ歩きをしている。

「不悪、わるからずそう言って貰えるのは悪くは無いが……前を向いて歩いた

ほうが良いぞアニス殿」

注意を促しつつそう答える右衛門左衛門だがそれを聞いているのかいないのか、そのまま後ろ歩きを続けるアニスだがその先に階段がある事に気付いているのか？

「心配ご無用、私はお使いで何度もここは通っているのでこの辺りは私の庭も同然です

ですからこの先に階段がある事など百も承知であります」

そう言いつつ階段手前でクルリと半回転し正面を向くアニスは悠々と階段を降りて行く。

「（フム——普段が普段故にもしやとは思ったが要らぬ警告であったか）」

そう右衛門左衛門が心の中で呟いた瞬間だった。

————ドーン！！

自分たちが降りる階段の目と鼻の先に建っている宝石店の入り口が突然爆破した。

「————わきゃあ！！？」

「————アニス殿！！？」

元々バランス感覚や運動神経がある訳でも無いアニスはその爆風に煽られてバランス崩し、あわや階段から転げ落ちるかと言った瞬間、いち早く反応した右衛門左衛門がアニスの体を支えた事によって事

なきを得た。

「た、助かりました右衛門左衛門殿……ッハ!!? 今アニスは男の人に抱き抱えられると言う人生初めての事態に陥っています!!?」

「……およはず不及、思ったより大丈夫そうだな、心配するに及ばなくて良かったと言うべきか——」

この状況下でもマイペースを崩す事のないアニス（だが多少顔を赤らめている）に若干感心しつつ右衛門左衛門は何が起こったのかを把握するためにこの爆発の元凶を確認するために抱えたアニスを降ろし爆心地へと目を向ける。

爆発によって黒煙が舞う宝石店の入り口から次々に同じ服装で統一された武装した男女数十人がそれぞれ背中に大きめの袋を抱えて出て来る……確認するまでも無く宝石強盗であるが統率されたその動きは唯のゴロツキとは違っていた。

「反政府組織……テロリストだったか? ——それにあの服装は確かペンタゴンだったな」

犯人の服装から自身の調べた情報から正体を断定した右衛門左衛門はすぐさま思考を戦闘用の物に切り替えた。

「むう、テロリストならば私が魔法でバーンとやっつけてやりまし

よう！

杖は置いて来ましたがそれくらいならお茶の子サササイです！！」

「ひつようあらず不必要、奴ら程度なら私一人で事足りる故、アニス殿は大人しく此処で待っている……くれぐれも援護をしよう等とは思うな」

「そ、そんなあー」

自分の提案をバツサリと切り捨てられ釘を刺す右衛門左衛門に涙目になるアニス

——実際、こんな街中でアニスが魔法を使おう物なら大人しく寶石を持って逃げさした方が被害が少なく済むので性質が悪い。

「のがさず不逃、そこで止まれテロリスト共」

「何だテメェ！？ 魔法使いか！？」

「この人数相手に一人で来るとはいい度胸じゃねえか！！」

「今すぐ泣いて謝るんなら逃がしてやってもいいんだグボオオオオ
！！？」

「この野郎！？ やりやがったな！？」

「リーダー！ グズグズしてたら治安隊の奴らがきちまいますぜ！」

「だからどうした！？ こいつ一人くらいぶっ殺してからでも十分時間はグハア！！？」

「「「りっ…リーダー！！？」」「」」

——結局この日の休暇の締めは右衛門左衛門によるペンタゴン団員の大捕縛劇によって幕を閉じたのであった。

——余談であるが最後の最後に一人だけ逃げ出そうとする者を偶然見つけたアニスが白色魔法光線で足止めしようとした所を素早く抑え込んだ右衛門左衛門を見た治安隊の隊員は四天王・千鶴子以外にアニス・沢渡を制御出来る人間が現れたと騒ぎ、右衛門左衛門はゼスの一部の人間の中で話題になってしまい、暫く仕事がい難くなってしまったのであった。

——そしてこれはさらに余談であるが、その話を聞いた千鶴子はこれを機にアニスの監視の役割を右衛門左衛門に押し付けてしまおうかと割と本気で考えたりするのだが・・・それはまた別の話である。

累計20000アクセス記念番外〜右衛門左衛門の休日〜後編（後書き）

後語り

思ったほどトラブルを起こさなかったアニスでした。

本当はボウリング場でマイボールとか言ってパイアが作った周囲2キロの人間を殺傷するmボムを取り出してボウリングをしようとして右衛門左衛門が阻止するようなエピソードも入れようかと思っただんですが、さすがに普段から持ち歩いている訳ないかと思い削りました・・・

しかし右衛門左衛門はいまいち甘い雰囲気には出来ないと痛感しました（LOVE的な意味でも）……今更だけどノクターンに番外ってかR18も書こうかなあ……いやいや、なんて言っても自分にそんなモノが書けるわけ無いんですけどね……

――あ、次回からは本編に戻りますよ（一応報告）

巻拾四話語（前書き）

前語り

本編戻りまーす・・・因みにランスサイドでーす。

壱拾四話語

——イタリア 二級市民街

ランス達グリーン隊一同はこの場所で二級市民を対象とした連続殺人事件の犯人であるサーベルナイトと名乗る人物の討伐および捕獲の為にやって来ていた。

「うーむ……何かえらく寂れた街だな」
街に入り辺りを見渡したランスは第一声にそう言った。

「ここイタリアはゼスの中でも大都市ですが、居住区が二つに分かれています……」
ここは二級市民の居住区です…」

「おらが生まれたところもこんなです」

そうランスに答えるカオルとロッキー

「二級市民って事は魔法使いがない場所ってことか？」

「はい、魔法使い達は街の北側の優雅な街並みの中で暮らしています」

「おらたちがそこに行くには通行手形が必要です
だけどそれを手に入れるのは一握りです……大抵は魔法使いに気に入られてご奉公って感じだす…」

「それは・・・」

「……大抵…玩具扱いです…」

そう答えるカオルの声は暗く、一同に重い空気が流れる・・・

「いい趣味してやがるな・・・」

言葉とは裏腹に不機嫌そうに呟くランスだった。

「——ところでよ」

そこでそれまで会話に参加していなかった銀閣は辺りを見渡しながら尋ねる

「見た感じ人があんまりいねえけど……本当にここに人が住んでるのか？」

それに答えるのは先ほどから銀閣の後ろを子犬の様に付いて行くセスナだった。

「……今は……夜に出歩くと…サーベルナイトの格好の獲物になる……だから殆どの人は怖がって家に隠れてる……グウ」

「こらこら寝るな」

「——————おお!？」

説明を終えると同時に眠りに入るセスナを起こすランス

—————ちなみにこの任務を受ける前にランスは一度寝ている

セスナにちよっかいを掛けようとしたのだが、間の悪い事に行動に移す寸前で銀閣が現れたために未遂に終わっている……むしろコトの真っ最中に銀閣が現れればランスと言えども命の危機だったかもしれないので運が良かったとも言えるかもしれないが……

「それとですね、隊長……夜になるとこの界限には夜盗が出ます」

「ん？ そいつらも魔法使いか？」

「いえ、二級市民です」

「そいつらはどうしたら良いんだ？」

「彼らは二級市民を苦しめる二級市民ですので……もし仮に戦闘を仕掛けられる様な事があれば、一緒に退治しても良いかと思います」

「それは助かるな、いちいち分けるのは面倒だからな」

「——そう言ってる間に来たみたいだぜ……隊長さんよ」

そう言って腰の刀に手を掛ける銀閣の視線の先には武装した二級市民の集団が道を塞いでいた。

——明らかに敵意を持った集団に一同はそれぞれの武器を構え迎え打つのだった。

「——はい、これでもう大丈夫でしょ」

そう言ってロッキーへの応急処置を施すプリマ

「あ痛たたたた……でも大分良くなったですだ、ありがとうございます
ますだプリマさん」

「プリマちゃん、次はモロミちゃんの治療もおねがーい」

「いや、アンタは後ろで矢を撃ってただけなんだから治療も必要ないでしょ!？」

「んで隊長は……特に傷も無さそうだしバーナードから済ませとこうかしら」

「——大丈夫だ……それ程深い傷は負っていない」

「そーだそーだ……男なんて放っておいてプリマちゃんは俺とナースHでも——あで!？」

「隊長に何をするカオル!!!？」

「隊長なら状況を考えて発言してください」

——襲い掛かって来た二級市民の夜盗との戦闘を終えた一同は救護隊員のプリマの応急手当を受けつつ休んでいた……

手当と言っても、イカマン程度にも梃子摺る戦闘の心得がある訳ではない二級市民を相手にした所で大きな怪我を負う訳は無い一同だが、壁役として他の仲間への攻撃を防ぐロッキーだけはそれなりに攻撃を受けた為、カオルの提案で大事を取って休んでいるのだった。

「――ふあああ……それにしても、ヒデエ臭いだな……」

一同から少し離れた場所で壁にもたれつつ、嫌でも鼻に突く異臭に顔を顰める銀閣

「ウイ……この街は……上下水の整備もされて無いから……衛生面がとっても悪い……」

その隣で膝を抱えて座り込んでいたセスナが銀閣の呟きに答える。

「上下水？」

と言っても水道などの概念など持ち合わせていない銀閣にそう答えた所で分かる筈が無いのだが――

その後一同は時折襲い掛かる夜盗やモンスターを蹴散らしつつ、街の中を隈なく回っていると、男の悲鳴が聞こえすぐさまその場所へ向かうと、其処には血溜りの通路と、バラバラに切り裂かれた男と思わしき死体が放置されていた。

「ひいひいポマードポマード!!」

「あー……こりゃあダメだ、見事にばらばらだ」

あまりの惨状に怯えるロッキーとは対照的に軽い声で感想を述べるランスだが

「酷い……あ……」

カオルはばらばらに刻まれた男の死体のある建物の影に隠れて震えている男を発見した。

「もし、あなたは大丈夫ですか？ 怪我はありませんか？」

極力怯えさせない様に静かに問いかけるカオル

「う……ううう……」

「これは……サーベルナイトの仕業ですか？」

「うっ……そうだ……急に現れたかと思うと……」

必死で答えようとする男にカオルは静かに男を制し

「此処は危険です、動くことが出来るようでしたらあなたは直ぐにここから逃げて下さい」

と言うと男はそれに従いこの場から離れようとする

「その前に、サーベルナイトの馬鹿は何処に行った？」

「分からない……俺は恐くて頭を抱えてずっと震えてたから……」
そう答えると男は今度こそその場から立ち去った

「ツチ、役立たずめ」

「ランス隊長、そういう言い方をしてはダメですよ」

男が去った後に憎らしげに呟くランスを注意するカオル

「しかし今現在サーベルナイトがこの街に居る事は確かです

次の犠牲者が出る前に早く見つけてしましましょう」

そのカオルの言葉に、サーベルナイトを捜し始めた一同を見下ろす3つの人影に気付いている者はいなかった————

——それから暫く辺りを探索し、人が数人並んで通れる程度の狭い通路を通っていたランス達の前に奇妙な男が現れた。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

その男は全身に線が走る刺青をしており、前髪が虫の触覚の様に跳ね、何よりも特徴的なのが首の後ろから背中にかけて不自然な程に盛り上がっており、ただの人間にはとても見えなかった。

「なんだ、こいつは？」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

疑問の声を上げるランスだが男は何も答えずに黙したままだ

「もしかして、二級市民の夜盗か？ 邪魔だ、どけ」

「あんた方には罪はねえ：恨みもねえ：」

男は妙にかすれた低い声で呟く

そこでその男の纏う妙な空気に気付いた一同は警戒心を高め、各々の得物を構える。

「だけど：エミ様がおぬしらを殺せと：そう命じられた：」

「はああ？」

突拍子もない男の言動に訳が分からないと言った風に声を上げるランスだが男は覚悟を決めたような目で

「……行きますぞ!!」

そう叫ぶと同時にランスへと襲い掛かった。

「——ランス様!? 危ないだ!!」

——ガギン

咄嗟にランスの前へ出たロッキーが斧を盾に男の拳を受け止めると辺りに鉄と鉄がぶつかり合った様な音が鳴り響く。

——味方ガード……ロッキーの持つ敵から攻撃を受ける味方を庇い、自信がその攻撃を肩代わりするスキルである。
だが、だからと言って肩代わりしたロッキーにダメージが無い訳では無いが咄嗟に斧で受けた為にダメージは僅かですんでいた。

しかし、男は間髪入れずに狙いをロッキーへと変更し先ほどとは逆の左の拳で攻撃を受け止めてまだ硬直の解けていないロッキーの腹を容赦なく殴る。

「ウツギヤー!?!」

鎧越しに強力な衝撃を受けたロッキーは悲鳴を上げながら狭い通路の壁へと叩き付けられた。

「――ハッ!」

「グウ!」

その直後に全速で男へと接近したカオルが得意の柔術で男を地面へと叩き付ける。

――だが男は何事も無いかのように即座に立ち上がり、ロッキーに止めを刺すのを後回しにし、次の標的をカオルへと定めるが突然悪寒を感じ咄嗟にその場から飛び退いた。

――その瞬間鋭いナニかが眼前を通過した

「――おっと……間合いの外に逃げられちゃったか……」

飛び退いた男の視線の先には銀閣が居合抜き構えをした状態で立っていた。

すると男は自身の額に濡れた感覚を感じ拭ってみると、赤い液体が手に付着していた。

――そこで男は眼前の男は既に自分へと攻撃していた事によく気付いた。

文字通り目に見えぬ程の剣速で攻撃してきたのだと理解した男は銀閣を最も警戒すべき敵だと感じ、距離を離しつつ全身を硬質化していった。

――だが男は気付いていない、この中で最も攻撃力のある人間が誰なのかを……

「隙ありイイイイ!! ランスアターック!!」

「……てい!!」

銀閣へと完全に意識を向けていた男は背後からのランスの必殺技・ランスアタックと本来命中率の低いセスナの渾身の一撃をもろに受けてしまった。

「——ガハアアア!!?」

それによって深い傷を負いながら吹き飛ばされた男は息も絶え絶えながらその場から離脱したのだった。

「うー…何だったんだ…あいつは」

ダメージを与えたにも関わらず、攻撃した自分の剣が刃毀れしているのに気付いたランスは率直な感想を言った。

「ムシ使いです」

そのランスの言葉にカオルが答える。

「「ムシ使い?」」

聞き覚えのない単語にランスと共に銀閣も声を合わせてカオルへと尋ねる。

「はい、そうです」

ムシ使いは複数のムシを体内に宿し、その力を使って色々な能力を使う事が出来る人達です——ただ……」

そこでカオルは表情が曇った。

「ただ、人々に忌み嫌われて迫害されて・・・」

「確かに少し変わっていたが……迫害される程の物か？」

カオルの言葉に割り込んでそう尋ねるランス・・・

——人は本来、自分たちとは違う物を区別し差別する傾向があるが、その様な感性を持たないランスはある意味では珍しいのだろう・

「・・・・・・」

そんなランスの疑問に暫く沈黙するカオルだが、一呼吸した後には重い口を開く

「7年前に当時の王が、ムシ使いの存在自体を消去する為に大規模な粛清を行い、各地のムシ使いの村は焼き払われました……」

すべて皆殺しにされた為、もう誰も生き残っていないと聞いてましたが……」

「生き残りがいたと言う訳か……害虫駆除は完璧にしないと一匹でも残すと後から増えるからな、まったく……」

あっ!!もしかしてあれがサーベルナイトか？」

「違います、資料として渡された似顔絵とは全然違うので……」

「ちっ、仕方ないもう少し歩き回ってサーベルナイトを捜そう」
そう言ってランスは再び街の中を歩き出すのだった。

壱拾四話語（後書き）

後語り

ブツチャケほとんど原作まんまですね。

今回はドルハン・クリケット戦までで文字数がいい感じだったので、サーベルナイト戦は次回と言う事で・・・

どうでもいい話なんですけど……この本文書いてる時に『夜盗』ってヤトウを交換するときに『野党』って出てきて、その後ヨトウで交換しようとしたら『与党』って出てきたもんですから深夜のテンションで一人で大爆笑してました。

なんでゼスのイタリアで日本の政治体系が襲い掛かって来るんだよって深夜に一人で大爆笑する男……………うん、スゲー迷惑ww

さして、明日から盆休み終了でバイト再開だー！！

第拾五話語（前書き）

前語り

サーベルナイト戦です。

どうでも良いですが、これ投稿する前に次の話し書き終わったらちようどワードで100ページ目に行きました……いや本当にどうでも良い事なんですけどね……

しかし原作やりながらの同時進行だと珠集めが面倒で面倒で……後ドンくらい行けば銀閣メインの話してから抜けるのやら……仮面の彼が主役と言ったが……ありや嘘じゃ————って事にマジでなり兼ねませんねww

あ——早く真庭蝙蝠だしたい……ペンタゴン早く来い！

第拾五話語

——それから程なくして、ランス達一同の前に鎧と兜で正体を隠す男が現れた。

「っ!？」

「ふん、ケダモノが薄汚く群れて……見苦しい」
男はランス達を一瞥するなり、そう言った

「ムカ……何だお前は」

「サーベルナイト……」
突然見ず知らずの男に侮辱されたランスは不機嫌そうにそう問いかけるがそれに答えたのはカオルだった

「なんだと?」

「手配書の似顔絵そのままです」

確認の為に手配書を取り出し見比べながらカオルは答える

「じゃあこいつが無差別殺人鬼か」

そのランスの言葉に男・サーベルナイトは兜に隠れた顔を不機嫌そうに歪ませる。

「殺人鬼? この私が?」

二級市民と言う名を持つだけのケダモノが、人権を所有しているなど、甚だ勘違いと言うものだ

——我々人間がケダモノを狩って、何か罪に問われるとでも？」

人を人と思わぬ傲慢そのものの物言いにその場にいるサーベルナイトを除く全員が顔を顰める。

「なんか…スゲェムカつくぞこいつ…」

「……ゼスの一部の貴族はこんなものです」

ランスの率直な感想に苦々しげに答えるカオル

「ふーん、難儀な国だな…こんな国に生まれなくて本当に良かったぞ」

「まあ、それには同感かな——全く、眠気がスツカリ醒めちゃったよ……」

——ランスの言葉に同意しつつ、サーベルナイトへと距離を少しずつ詰める銀閣

「ま、どーでもいい、とりあえずこの目の前のキチガイ野郎をぶっ殺せばいいんだろ？」

「ふん……ケダモノが何をほざくか」

「ウルセェー！とにかくぶっ殺す！！ウオリャアアアア」

あくまでも余裕を崩さないサーベルナイトにもはやこれ以上の問答

は必要ないとばかりにランスは切り掛かった。

ランス達グリーン隊の現在のメンバーは、
隊長のランスを筆頭に、副隊長のカオル、
前線部隊のバーナード ロッキー 銀閣 セスナ
遊撃及び救護隊員のメガデス プリマの合計8人であり、
対するサーベルナイトはたった1人であるのだが、戦いは以外にも
拮抗していた。

——その原因としては、まずグリーン隊にとってこれは初任務で
合った故に、未だ隊員同士の息が合わず、お互いが足を引っ張りあ
ってしまっているのだ。

「——つと、隊長さんそこを退きな」

「ええい五月蠅い俺様に指図するな!!」
今もまたサーベルナイトへと斬り付けようとする銀閣だが、その間
にランスが入ってしまい攻撃を中断せざるを得なくなった。

——そしてもう一つの原因は……

「——チィ……どんだけ堅いんだよあの鎧は……」

そう呟くメガデスの放った矢はサーベルナイトの纏う鎧から弾かれ、
本人には何のダメージも与えられていなかった。

サーベルナイトの纏う鎧は唯の鎧では無く、高度な魔法によって強化された特別に頑丈な物だった……即ち、グリーン隊の面々にはその鎧に守られたサーベルナイトに決定打を与えられない人間がいる為、数の有利を生かし切れていないのだった。

——現にサーベルナイトはセスナやカオル達の女性陣からの攻撃を全く気かけず、バーナードやランスと言った攻撃力の高そうなメンバーの攻撃のみを迎撃し、隙あらば攻撃へと移っていたので合った。

「ハハハハハハ！！ 何人集まろうとケダモノはケダモノ！！ この私の敵では無い！！」

一方的に敵を蹴る事に悦に入っているサーベルナイトは大振りに剣を振り上げ、目の前のバーナードへと振り下ろした。

————ザシュ

「グウウウウ！！？」

咄嗟に防ごうとしたバーナードだが、防いだ剣がサーベルナイトの剣圧に耐え切れず折れてしまい、そのままの勢いで袈裟懸けに斬り付けられてしまう。

幸いにも致命傷には及ばないが、斬り付けられた個所から鮮血が舞い苦痛によって膝を着いてしまう。

「ハッハッハ！！ 先ずは一匹だ！！」

——身動きの取れないバーナードへと止めを刺すために再び剣を振り上げるサーベルナイトだが、自分の横から別の敵が向かって来るのを見て標的を変更した

——しかし、それは悪手だった。

何故ならサーベルナイトへと向かって行ったのは他の仲間は体制を整える為に一端距離を取っていたために、何の気概も無く秘剣を振るう事が出来る宇練銀閣だったのだ。

「フン!! 先ずは貴様からだ!!」

サーベルナイトは振り上げた剣の標的を銀閣へと変更し、一気に振り下ろす!!

「————零閃編隊・五機!」

だがそれよりも圧倒的な速さで、銀閣の超人的な居合切りの五連撃がサーベルナイトを襲った。

一つは向かって来る剣を切り落とし

一つは胴体の鎧ごとサーベルナイトの体を横一直線に切り裂き

一つは兜を切り裂きその中に隠れた頬に一線の深い傷を付け

一つは先ほどのバーナードと同じようにサーベルナイトを袈裟懸けに切り裂き

最後の一つはそれに交差するように逆袈裟に切り裂いた

————チン

「――お痛が過ぎたな……お兄ちゃん」

目にも止まらぬ剣技を見せた銀閣は刀身を鞘へと戻し、そう語りかけた

「ヒッ――ギャアアアアア!?!?」

一瞬もの内に武器を破壊され、自身も四つもの傷を付けられたサーベルナイトはあまりの苦痛に絶叫を上げた。

「(……凄い……五回も斬り付けた筈なのに刀身を見ることも出来なかった)」

銀閣のあまりの剣技にカオルは驚愕を隠しきれなかった……

――しかしそれはカオルに限った事では無く、グリーン隊全員の共通意識でもあったが……皆は銀閣が本気になればさらに倍の十連撃が可能だとはまだ知らなかった。

――何はともあれ、これでサーベルナイトとの決着は着いたのだった。

「――ツクウ!!?」

「がはははは、口ほどにも無かったな! 止めだ死ね――!!」

膝を着くサーベルナイトにランスが剣を向けたその時、サーベルナイトは懷から何かを取り出した。

「ム!？」

サーベルナイトは取り出した物を素早く口に近づけ、一気に息を吹き込んだ。

—————ぴよよよよよよよ

その瞬間辺りに大きな音が鳴り響く——

サーベルナイトが取り出した物はマッハピヨと言う生き物をモデルにした笛だった。

「こら——!!」

何処だ——!! ゼスの治安を乱す極悪人は——!!?」

途端に何処からともなく現れたのはゼス治安部隊の指揮官であるキューティー・ハンドだった。

「おお治安隊だな? ちょうどよかったこの男が……」

何の疑問もなくサーベルナイトを指差そうとするランスだったが、キューティーは何故か迷わずランス達を指差し

「お前たちだな——!!? 総員かれ——!! 逮捕しろ——!!」

「————冤罪だ——!!?」

俺様は悪くない——!!?」

「ひ——!! 堪忍してくれだす——!!」

必死に逃げ惑うランス達だが最終的にはランスとロッキーは捕まっ

てしまうので合った

——尚、他のメンバーは上手い具合に逃げ出していたのは余談である。

「はあ……はあ……」

傷を庇いながら夜のイタリアを歩く影が合った。

——サーベルナイト……否、ズルキ金融長官の息子ハッサム・クラウンは今頃治安隊に捕まっているだろうランス達を想像しながら歩いていた。

「クク……馬鹿な連中だ、

この私がお前たち如きに捕まる訳がないだろう……

クソッ！ エミさんの前で恥をかかせおって……

ただでは済まさんぞ……」

まるで反省の色も見せないハッサムは憎々しげに呟いている。

「治安隊の奴らに逮捕させた後、どのような目にあわせてやろうか……生きたまま、四肢を捻じ切って……」

ランス達への憎しみを募らせるハッサムだが自身の歩く前方に道を塞ぐような形で男が立っている事に気付いた。

「——何だ貴様は？ 私は今気が立っているんだ、今すぐ道を開

けなければどうなるか分かっているだろうな…」

最大限にドスの聞いた声で前方の人物を脅すハッサムだが、その人物は何の怯えも無く…

「不通、サーベルナイト…いや、ハッサム・クラウンよ、お前はやり過ぎた、ここで捕まってもらう」

そう言い切った。

当然ハッサムは即座に頭に血が上り自分が傷ついているのも気にせず男へと飛び掛かる。

——しかし、男は無駄のない身のこなしで躲すと同時にハッサムの足を引っ掛けた事により、ハッサムは無様に地面へと転がり込んだ。

「——きつ…貴様あああ!! この私にこの様な真似をして、どうなるか分かっているんだろうな!!?」

怒り心頭にハッサムは男へと怒鳴り付けるが、男は何一つ気にせずに

「わからず不解…：今から幽閉されるお前に何をされと言うのか…：

最も、私の役割である足止めは終わったのでな…：後はお前の後ろの人物に任せる事にする」

「ウム、任せるがよい」

「——!!? 誰だ!!?」

背後からの声にすぐさま振り返るハッサムだが、何時の間にか背後に立っていた男は巨体で咄嗟に顔を見る事は出来なかった。

「晴天が知る、大地が知る、人民が知る！！」

征伐のミト、スケさん、カクさんを引き連れ、ただいま推参！！」

男の両脇には二人の女が立っているが、男たちの背後から不自然な光が差しているせいで、逆光によって正体を見る事が出来ない……。しかし、男の名乗った名にハッサムは驚愕の表情を浮かべる。

「せつ…征伐のミトだと！！？ あれは与太話ではなかったのか！？」

——征伐のミト、正体不明の人物だが、神出鬼没で二級市民を苦しめる悪に正義の鉄槌を下すゼスの高官達に最も恐れられている人物である。

——その様な人物に遭遇したハッサムは必至で抵抗するが、征伐のミトはその様な抵抗を物ともせず、あっさりとハッサムを無力化し、捕まえてしまったのであった。

「（不禁得、きんじえず国王自らこの様な道染染みた真似をしているとは驚きを禁じ得ないな……）」

以前にとある任務にて征伐のミトと遭遇していた男・右衛門左衛門はそれ以来、主である千鶴子の命によって、征伐のミトことゼス王・ラグナロクアーツ・スーパীগンジの手伝いをする羽目になっ

ていたのであった。

——尚、この後、治安隊に捕まったランスとロッキーは無事に釈放された。

第拾五話語（後書き）

後語り

はい、サーベルナイト戦で銀閣さん大活躍の巻でした！

え？原作主人公のランスが戦闘で空気？　　と言うか戦闘が短すぎ？

だってサーベルナイトぐらいで長々と戦闘が続く訳無いもんぶっちゃけ原作でもその以前に戦うドルハンの方が強いべ？

ってか戦闘を長く書くのって苦手なんですよね……ぶっちゃけ本当の殺し合いなんかじゃ相当実力が拮抗でもしてない限り長期戦になんてならないと思うんですよねー！ほら、人間、一回切られれば痛みで動きが鈍ってそこからまた切られてって言う風に先手取った方があつという間に勝ちちゃいそうじゃないですか……

実際、今回もバーナード君は一回切られただけでピンチになっちゃったし……そこを現実じゃないんだから良いだろ！！って切り替えられない自分が未熟なんですかねえ……

幕間く字練銀閣とアイスフレームく（前書き）

前語り

今回はサブイベ的な？
感じでお送りします

幕間く宇練銀閣とアイスフレームく

——サーベルナイトが征伐のミトによって捕まり、拘留されてから数日が経ったある日

レジスタンス——アイスフレームは大きくその形を変えていた。

リーダーであるウルザの進言により兼ねてから資金難だったアイスフレームは大幅に人員を削減した。

殆どの男性隊員は解雇になり、ウルザから解雇金を貰い組織から立ち去り。

組織の人数は大幅に減り、残った人数はグリーン隊、ブルー隊、シルバー隊の各隊員だけとなってしまい、隠れ里の活気はさらに無くなっていった……

——しかし、この改革の裏には、ウルザへと夜這いを掛け、あまつさえ脅迫したランスがアイスフレームの裏のリーダーへと成り変わり、自身の願望によってこの案をウルザに出させていたのであったが……そんな事を知らない残った団員は特に気にする事も無く日々を過ごしていた。

「——ふあああ……随分と静かになったもんだねえ」

活気の減った隠れ里を歩きながら、残った数少ない男性隊員の銀閣は里の様子を眺めながら呟いた。

——何故銀閣は解雇されなかったのか？

そもそも銀閣はリーダーであるウルザとほとぼりが冷めるまでの間自身を匿う事を条件にアイスフレームへと入隊したのであって、それを突然解雇させられては契約違反となってしまうとダニエルがウルザを説得したのだ……ちなみにダニエルがウルザを説得した理由は、信用の出来ないランスよりは腕が立ち、欲も薄そうな銀閣を残して置いた方が組織の役に立つだろうと考えたからだった。

最も当の本人はその様な組織のトップ達の思惑などに興味は無く、出ていけと言われれば出ていくつもりでもあったのだった。

「——あ……」

「——ん？」

暫く里をうろついていた銀閣は途中で花を携えたプリマ・ホノノマと遭遇するのだった。

——ブラック隊の弔い

その後、プリマが元々所属していたが、先のサーベルナイトによって全滅されてしまったブラック隊のメンバーの弔いに向かうと聞き、特に予定も無かった銀閣はそれに付き合う事にしたのであった。

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

簡素な墓の前に花を添え、静かに黙祷するプリマの後ろで、銀閣も同様に目を閉じて沈黙している。

「――すまないね、わざわざ付き合わせちゃって…」

暫くして黙祷を終わらせたプリマは銀閣へと振り向きながら礼を言った。

「いーや別に……特にやる事も無かったんで付き合っただけさ」

「それでもさ……きっと皆も感謝してるよ」

それからお互いに見合った二人はどちらからとも無く、隠れ里へと足を向ける。

「――本当にありがとうね……あの時、アンタがいなかったらバーナードまでサーベルナイトの犠牲者になっていた」

再び、今度は先日のサーベルナイトの戦いの時について礼を言うプリマ

「――いや、あの時俺がもう少し踏み込んで斬っていればあの兄ちゃんは殺れていた……見す見す仲間の敵を取り逃がしちまって悪かった」

「いいさ、そんな事……確かにチャンスを逃してしまっただけで悔しかっ

たけど、これ以上仲間が死ぬことが無かったのが一番さ——
—それに、あの隊長さんがその内サーベルナイトを殺してくれるんだってさ、刑務所に居るのにどうするつもり何だか」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そう笑顔で話すプリマだが、銀閣はそれをただ黙って聞いているのだった。

それから里に戻って来た二人はその場で解散し、銀閣は再び里を彷徨っていた。

——だが先ほどとは違い、銀閣の表情は険しい物となっていた……

「（プリマの嬢ちゃんはある程度言っていたが……何れまた同じ様な奴と戦う機会があるだろうしな……零閃は必殺に違いないが、それは間合いの中だけの話し

——部屋の中で迎え撃つ分には問題なかったが、此処では間合いの外からでも攻撃手段を持つ奴らとの戦闘も多くなる、考えてみる必要があるか……“新しい零閃”を——）「フギュー!?」——ん？」

物思いに耽りながら歩いていた銀閣は進む道の足元に居たモノに気付かず踏み付けてしまった。

「…………ああ、セスナの嬢ちゃんか、道の真ん中で寝るとは変わった趣味だな」

「……とりあえず……足を退けて欲しい……」

「おっと、すまないねえ」

「……ムウ……誠意が籠って無い」

「元々、道の真ん中で寝てたお嬢ちゃんが悪いのさ」

「……………銀閣のイジワル（ボソ）」

小声で文句を言うセスナだが、幸いにも銀閣の耳には届いていなかった。

それからセスナは自分の部屋へと戻り、用がある訳でも無いので直ぐに別れた後に銀閣は空腹を感じ、キムチの居る孤児院に食事を集りに行こうと孤児院への道に向かう途中に奇妙な歓声を上げる人だかりを見つけた銀閣は様子を見ようとその人だかりへと近づいていた。

——そしてその人だかりの中心には、ピンク色の少女に自信のハイパー兵器を咥えさせているランスの姿があった……

「……何をやってんだ？ 隊長さん……」

思いがけない事に呆然と呟く銀閣の近くに居た女性隊員が答える。

「あの新しい隊の隊長さん！ 魔法使いを奴隷にしてるんですって

！！ わぁー凄い…あんな事まで……」

そう答えると直ぐに興味津々に騒ぎの中心を見つめる女性に銀閣は一つ溜め息をついた。

「やれやれ……往来で何をやってるんだか……」

呆れ気味にそうぼやいた銀閣は興味を失った様に孤児院へと向かって足を進めるのであった。

——その途中に、ランス達を興味深げに見つめるランスが拾って来て今では数少ない男性隊員の自称調教師、タマネギの姿を見かけたが、特に何も話しかけずに銀閣は通り過ぎるのだった。

幕間く宇練銀閣とアイスフレームく（後書き）

後語り

宇練銀閣とプリマがちよいメインな感じだったかな……
セスナはおまけ的な感じで……セスナ可愛いよセスナ

後は、シイルとタマネギがアイスフレームにもう来てるって報告だけでしたけど

——最後のやつRー15程度で大丈夫ですよね？
一行だけしか描写はないし、こんなのジャンプで掲載してたトLO
VERLに比べれば……え？比較対象が間違ってる？

ハハハ、何を仰いますやら子猫さん

現在時刻深夜3時……夏休みとは言え生活リズムが完全に狂って来てるな…

久々に仮面の彼がメインな壱拾六話語（前書き）

前語り

話数あつてるよね？

幕間入れると分かりにくくなってしまいう罨w

今回若干、ガンジー王アンチっぽくなっちゃってるかも知れませんが筆者は別にガンジー王は嫌いじゃ無いので誤解しないでくださいな…

久々に仮面の彼がメインな壱拾六話語

——王者の塔のとある一室

先日のハッサム・クラウンの件の詳細を千鶴子へと報告した右衛門左衛門は一人考えていた。

「（わからず不解…我が主は何処あそこまであの国王に心酔しているのか…
…）」

そう思う右衛門左衛門の脳裏には先程の千鶴子とのやり取りが浮かんでいた——

「————と、言う事で、無事に連続殺人の犯人であったハッサム・クラウンは拘留されている」

「そう…やはりあのお方なら、あんな弱者を嬲る事しか出来ない小物は相手にならなかったのね」
誇らしげに報告を聞いた千鶴子は言うが、右衛門左衛門の表情は優れなかった・・・

「その件なのだが、千鶴子殿……あの男は本当に捕まえるだけでよ

かったのか？」

珍しく意見を出す右衛門左衛門に千鶴子は興味深げに意識を向ける。

「それはどう言う意味かしら？」

「どうと言う訳では無いが……私は特に今回の件の男の事を知る訳では無いが、僅かな時間見ただけでも、あの男は拘留された程度で心を入れ替える事はない——ハッキリ言って、ああ言う人種は生かして置くだけでも此方にとって邪魔になりうる存在だ……」

その言葉に納得し肯定するように首を振った千鶴子だが

「そうね——だけど、あのお方は、そんな相手でも改心すると信じて命を取らずに捕まえているの……その慈悲の心に触れて少しでも未来のゼスにとって役に立つ様になるかもしれないは」

「（不有得——^{ありえず}と言った所で聞きはしないだろうな……） そうだな……報告は以上なので次の任務まで待機する」

「ええ、何時もありがとうね」

そして右衛門左衛門は退室したのだった。

「罪人も、罰を受ければ自らの行いを悔い、改めるかもしれぬか——だがそれは自身の行いを罪と感じる者でなければ決してありえぬ……」

——ならば、今回捕まえたハッサム・クラウンは自身が起こした事件を罪と思っているのか？

否

この国の貴族は事件の本人は元より、他の貴族達も罪と感じてはいない……

それ程までに固まり切った二級市民に対する差別意識は多少牢に入れた所で変わる事など有り得ない……そもそも、捕まったハッサムは貴族間のコネクションにより、刑務所内でも牢に入れられる所か、特別待遇で贅沢三昧だ。

——だが、その現状に千鶴子は当然分かってはいるが、ガンジー王自身は分かっているのかいないのか……

右衛門左衛門から見ても千鶴子自身はハッサムは——と言うより現在の腐敗した長官達も含めてだが——心を入れ替え、魔法選抜の意識を変えさせる事など出来る筈が無いと考えている。

先の問答で、ハッサムの心変わりの可能性の話など、心酔するガンジー王の為に言っているだけでしかない……

「（この際……そう言った相手を全て暗殺してしまえば千鶴子殿達の理想のゼスとやらに近づきはするのだろうか……）」

——だがその様な事になれば、ゼスのほぼ全員の長官はいなくなり、政治体系は自ずと麻痺し、その国の揺らめきに乘じてペンタゴ

ンの様な過激派のレジスタンスは一挙に押し寄せてくるだろう・・・

「（だが、今刑務所に居るハッサムならば……）」

そこまで思考した右衛門左衛門は即座に自身の考えを打ち消した

「（私がそこまで考えても仕方がない……この国にはこの国に住む千鶴子殿達が解決すべき問題もあるのだから———」

所詮、仮初の主にそこまで尽くす必要も無いか———今はそれよりも、四季崎記紀の刀だ……現在確認出来ているのは絶刀と斬刀……そしてその所有者か

この二つなら私にとっては如何とでも出来る相手だが……もし仮に、向こうで死んだ人間がこの世界にやって来ると言うのならば……あの男と再び会いまみえる事になる可能性も捨てきれない）」

その時の右衛門左衛門の脳裏には、かつては友と呼び、そして自分の全てを奪い、最後には四季崎の亡霊によって憑りつかれた男の姿が映る。

「（———とは言っても……この大陸も狭くは無い、仮にもしあの男も此方に来ていたとしても、早々に出会う事も無いだろう）」

それから数日後

再び征伐のミトからの呼び出しを食らった右衛門左衛門は今度はハッサム・クラウンの父親、ズルキ・クラウンを捕まえる為に、夜のイタリアを駆けていた。

だが、到着した頃には既に征伐のミトはズルキを張り倒しており、お供のカクさんスケさんがズルキを縛り上げていた。

「まにあわず不間合…少し遅かったか」

「おお！ お主か！ ウム、既に悪党は私が捕まえた所だ
これに懲りて心を入れ替え、人々の為に働く様になれば良いが」

そう語る征伐のミト・・・いや、ゼス国王ガンジーを右衛門左衛門は暫く見つめる。

そして右衛門左衛門は静かに口火を切る

「本当に……」

「ム？」

「本当に、その男がこの国の民のために——否、二級市民のために働く様に心変わりすると思っているのか？

——だとすれば相当に御目出度い考えだと言わざるを得ないな
国の頭がその様な楽観思考では、変わる物も変わりはない」

「なっ——！？」

「無礼なッ！！」

齒に衣を着せぬ右衛門左衛門の物言いにカクさんことカオルとスケさんことウィチタ・スケートは殺気立つ。

しかし当の本人であるガンジー王は特に表情も変える事無く二人を

諫める

「よい、二人とも

——しかし、それはどう言う事かな？ 私はこれでも真剣にこの国を思っているのだが」

「では何故その男を生かしている？ 私はこの国の長官はある程度調べているが、その男はこの国の典型的な貴族だ

——自身の歪んだ性癖を法外な利息で貸した借金に返す当てを無くし、銀行へと忍び込む二級市民を捕まえては死ぬまで罫り続ける事を趣味としている——

そもそも、刑務所内の息子すら優遇待遇されているのだ、その男を刑務所に入れた所で何も変わりはないぞ」

相手は国王だと言うのに右衛門左衛門は何も遠慮する事も無く事実だけを語って行く。

現に、先程にアイスフレームの一員として、ズルキの住む共同銀行の内部の実態を目の当たりにしたばかりのカオルにとっては反論しようにも出来ないものだった。

「では、お主はズルキを今ここで殺せと言うのか？」

「不違、ちがわずだが他の貴族への見せしめとして使うのならばそれだけでは足りないな……各長官への脅しも込めて、拷問し、その様子を十分に見せてから公開処刑にするのが最も効果的だろう」

そこまで言った右衛門左衛門は後ろに飛び退き、眼前に迫っていたガンジー王の拳を回避する。

「不笑……反論出来なければ拳で帰すか？　それで良く国の頭が務まるな」

「貴様！！　さっきから聞いていればガンジー様に向かって何を！！？」

敬愛する王を侮辱され続けたウィチタはどうとう限界を超え、剣に炎を纏わせるが、それをガンジー王は制す。

「フム……そう言えばまだ主の名を聞いていなかったな」

唐突な問い掛けだが、右衛門左衛門は特に驚く事も無く答える

「左右田　右衛門左衛門だ」

「そうか……右衛門左衛門よ、お前の言う事は確かに正しい」

「「ガンジー様！？」」

まさかの肯定にカオルとウィチタは声を揃えて驚く

「——ほう……では私の言葉のままにこの男を処刑するのか？」

「否——そうでは無い故に先ほどはお前に殴り掛かったのだ……」

確かにお主の言うようにすれば、奴ら長官達も二の舞を恐れ、大人しくはなるだろう……だが、その様な恐怖による変化では本当の意味ではこの国は変えられないのだ！！」

「可笑しな事を言う……そもそも最終的に国を支配するのは力であろう？

権力・財力・軍事力……この国では魔法力も適応されるかな？

結局、力あるものが国を率いるのであれば、頭に立つものが強力に国を引き連ればよいでは無いか……それが出来ないならば、お前は王になるべきでは無かった」

「なっ!？」

その言葉に今までウィチタを抑えていたカオルもとうとう限界を超え、ウィチタと共に右衛門左衛門へと駆け出そうとするが、その間にガンジー王が体を割り込ませ、二人を止める。

「退いてくださいガンジー様!!」

「よい」

「ですが!？」

「よいのだ! 右衛門左衛門よ、お前の言う事は確かに一理ある——そもそも、私の王としての力量が無いからこそ、この様な回りくどい方法しか取れていないのだから————だが!!」

語尾を強めたガンジー王は右衛門左衛門へと近づきながら言葉を続ける

「お主のその持論は確かに国を治めるだけならば十分だろう……しかし、それでは国を一体にする事は出来ぬ!!」

さらに言えばこの国は今マジノラインによって守られているが、幾度となく魔人の襲撃を受けて来た!!

来る有事のためには例え時間がかかろうとも、この国を貴族や二級

市民の区切りを無くし、一つに纏める事が必要なのだ!!」

「そのために、強引な方法は取らないと言うのか？」

「否——確かにこの国の固まり切った差別意識は何か切欠がなければ無くなる事はないであろう故に何時かは強引な手段も取らざるは得ないだろう……。だが、お主の提示する方法は些か乱暴すぎる」

「————なるほど」

そこまでガンジー王の話を聞いた右衛門左衛門はそう呟き踵を返した。

「確かに、国の在り方も王の在り方も一つ一つ違うのであろうな……数多の無礼な言動は詫びよう国王よ……

それが貴殿の考えならば、これ以上は何も言うまい、この国の行く末をじっくり観察させて貰う事にしよう」

「ウム——この国が変わる様子をしっかりと見て置くと良いぞ、右衛門左衛門よ」

その言葉に軽く振り返り、薄っすらと口元に笑みを浮かべた右衛門左衛門は夜の闇へと消えて行った。

久々に仮面の彼がメインな壱拾六話語（後書き）

後語り

今回の右衛門左衛門の持論は筆者の個人的な意見なのであまり気にしないでください。

それから最近モチベーションの維持が難しくなってきました……感想もらえればまだ暫く維持出来そうかなあ（チラツチラツ

いや実際何の反応も無いままひたすら書いてると自分が何をやっているのか疑問に思ってくるんですよ……って言っても感想欲しいならこんなマイナーな奴じゃなくて有名どころの二次書けって言われればそれまでなんですけどねw

壱拾七話語　ランスたちメイン

——アイスフレームは現在、縮小した規模ながら様々な任務をこなしていた。

銀閣の所属するグリーン隊もそれは例外では無く、資金調達の為に中央銀行を襲撃したり、二級市民を苦しめる無人金貸し装置を破壊したり、街道村に現れるモンスターを退治したりと、多種多様の任務の日々を過ごしていた……

そしてある日、魔法使い以外の侵入を禁止されているゼスの王宮博物館の偵察任務により、魔法使いである様に偽造する特殊な服を着たランスとその奴隷である魔法使いのシイルが向かい、戻って来た時には何が合ったのか、自由都市のカスタム出身の魔法使い、魔想志津香とマリア・カスタードを連れて戻って来たのであった。

——その事に関して一部の人間は少々揉めかねない事態もあったのだが、暫くすれば二人も少しずつ、アイスフレームに馴染んで行くのだった。

「————ふあああ……ここもこの人数だと少し手狭に感じるねえ」

グリーン隊の隊舎にてそう呟く銀閣の言葉通り、今この部屋にはウルザの元へと任務を受けに行っている隊長のランス・副隊長のカオルの両名以外の隊員が集まっているのである。

旧隊員男性陣　銀閣・ロッキー・バーナード（後一応タマネギ）

旧隊員女性陣　セスナ・プリマ・メガデス

新隊員（魔法使い陣）　シル・志津香・マリア

合計十人が一つの部屋に集まれば当然部屋も狭く感じるだろう・・・

「—————と言うか、そこのお二人さんは誰なんだい？」

そう疑問を投げかける銀閣（ランスが男にわざわざ説明するつもりが無かったのと、基本的に寝ているため二人の事を聞いていなかった）

「……ランス様が連れて来た魔法使いだす……」

魔法使いに対して思う所が無い訳では無いロッキーは若干表情に影を落としながら答える

「……よ、よろしく」

少々居心地が悪そうに挨拶するマリアと

「———よろしく」

無然とした態度で挨拶する志津香

魔法使いの貴族達に反発するために活動しているレジスタンスの一同にとっては、この二人の入隊は大なり小なりの反対があらう事に二人も感じているため、あまり目立とうとはしていないのだったが

「――ま、あの隊長さんの顔が随分広いって事が分かったよ……宇練銀閣だ

――長い付き合い……になるかどうかは分からねえが、まあよろしくやってくれ」

――元々、この国の住人でも無く、魔法使いに特に思う所もない銀閣は顔色や雰囲気も変える事無く平然と自己紹介を済ませると銀閣は定位置である壁際に座り、壁を背もたれにして目を閉じた。

「な…何だか、変わった人だね」

「――あの馬鹿程ではないけどね」

少々失礼な第一印象を持たれた銀閣だった。

「今日の任務はサーナキアちゃん達のシルバー隊の任務の援護だ！
！」

隊舎へとやって来たランスの第一声はそれだった。

「あのゝランス様…具体的には何をするんでしょうか？」

要領を得ないランスの説明に代表としてシイルが質問をする。

「ム？ まったく仕方がないな

ウルザちゃんの話しでは、この前ここを首になった奴らが夜盗になって秋の森を拠点にしている

それで周囲にも迷惑だからそいつらを退治するのがサーナキアちゃん達の任務だったが、奴らはどうやら（女の）用心棒を雇っていて苦戦しているらしいから俺様が横取りしてやるのだ」

「最後に本音が出るわよ、馬鹿」

即座に指摘する志津香だがランスはスルー

「と言う訳だから直ぐに出るぞ！！ モタモタしてたらサーナキアちゃんに赤っ恥をかかせられないからな」

「とうとう隠す気も無くなったな……ま、別に構いはしねえけど――

――ふああ」

そして、グリーン隊一同は秋の森へと向かうのだった。

――秋の森……ここは不思議な魔法の力によって年中季節が秋と言う変わった森である。

「不思議なもんだねえ……」

栗にキノコに落葉に紅葉……おおよそ今の季節ではありえない光景を目の当たりにした銀閣は思わずそう言っていた。

「サーナキアちゃんはもう来ているかな？」

「どうでしょう？」

「とにかく、俺たちが先に美人魔法使いを見つけるぞ！！」

「あ、あれ？」

悪くなっちまった仲間をやっつけるんじゃないかっただですか？」

「そんなもんは知らん！！」

秋の風景を堪能している銀閣そっちのけでその様なやり取りをしていたランスとロッキーであった。

それから、グリーン隊は現れるモンスターを撃退しつつ森の中を探索していくと、シルバー隊を見つけたのだが

サーナキア本人はこれはシルバー隊の任務だと言い、手助けを拒否しかし、ランスは聞く耳を持たず、むしろ喜々としてサーナキアより先に夜盗を退治しようと散策を続け、地下へと続く階段を発見した。

「ほう…ここは地下基地か？」

「はい、元は軍の練習所だったところらしいですが、今は使用されていません」

カオルの説明に納得がいったランスは笑みを浮かべ

「で、集団解雇された連中が集まったわけか……
まあ、さっさと皆殺しにしよう、サーナキアちゃんが来る前になク
ククク」

その会話を聞いていた銀閣はふと疑問を感じ、カオルへと問い掛ける

「——しかし、何でまたこんな森の地下なんか練習所なんて作
ったのかねえこの国は……？」

「——————言われてみれば……どうしてでしょうかね？
……（今度ガンジー様に聞いて見ようかしら？ でもこの
施設が出来たのはガンジー様が即位する前でしたし……まあ、気に
する事も無いですかね）」

「お前ら……」

カオルが自己完結しながら進んでいた時、地下施設の置くからアイ
スフレームを解雇された男が現れ、一同を見ると驚きながらも声を
かけて来た。

「ん？ 誰だあいつは？」

「ランス様、この間解雇された方ですよ」

当然、興味の無い男の事など覚えている筈も無いランスにロッキー
が説明をする。

「おお、ではこいつもターゲットだな」

「ターゲットだと？ お前も俺たちを殺しに来たのか？」

「殺すか殺さないかはお前たち次第だ、俺様の寛大な慈悲を受けるかどうか、さっさと決めるが良い!!」

見下すようにそう言い放つランスに男の顔が大きく歪む

「何が寛大な慈悲だ!! 俺たちをアッサリと切り捨てたくせに!! 俺たちだって、アイスフレームの為に出来る限り頑張ってたと言
うのに……」

だから!! 俺たちは新しいレジスタンスを作るんだ!!
その為に必要な資金を作るのに村や旅人を襲っているだけだ!!
大事の前の小事何だよ!!」

「いいや、ただの盗賊だ」

「ッグ——くっそおおおお!!」

珍しくもランスが正論で帰すと、言い返せなくなった男は仲間と共に叫びながらランス達へと襲い掛かった

しかし、所詮は平凡なレベルでしかない解雇された男達はランス達の敵では無く、物の数分もしないうちに無力化されてしまった。

「クソッ、やっぱり敵わないか……」

そう呟く男だが、その目には諦めが宿っていない

「だが!! 俺達にはリズナ先生がいるんだ!!」

先生がお前達を蹴散らしてくれるわ、おい、逃げるぞ!」

男はそう言うと、仲間と共に逃げだした。

「リズナ??」

「例の用心棒って奴かねえ?」

聞き覚えのある名前に呆然とするランスには銀閣の疑問はまったく聞こえていなかった。

その後、逃げた男達を追って奥まで進む一同はついに男達を追い詰めた。

「こ、こんなところまできやがった!!」

「だ、だが俺達には先生がいる!!」

「先生、せんせーい!!」

追い詰められた男たちは必至で先生とやらを呼ぶと

「あ、はい……悪い宇宙人はこちらですか?」

良く分からない事を言いながら豪華な着物を幾つも着た金髪の女性が現れた。

その女性は、ランスの姿を見ると驚きながら

「まあ、ランスさんによく似た宇宙人さん」

「何をまた……」

半場予測していたランスは予想道理の人物に呆れたように声を掛けた

「——え？ あれ？ 本物？」

「おう、そうだ 久しぶりだな」

ようやく理解が追いついた女性・リズナは頭に幾つもの？マークを浮かべながら、元アイスフレームの現夜盗のリーダーである男へと話しかける。

「あの……ブッシュさん……」

私は宇宙からやってきて人類皆殺しをたくらむ宇宙人を退治して欲しいと言われてお手伝いをしていますが……この方、私のお知り合いなんですけど……」

その言葉を聞いた一同はその様な嘘で騙そうとした男と、あっさりと騙されてしまった女性に呆れて絶句していた。

「お前、そんな子供でも引っかからない様な嘘に騙されていたのか……」

「えっ！？ そうなのですか!？」

一同を代表してランスがそう言うとりズナは驚きの声を上げランスを見つめる。

「ち、違う!! こいつは悪党だ!! 俺達を追いだした!!」

咄嗟に事実だけを言って自分たちを正当化しようとする男だが——

「仕事で生き残り競争があるのは当然だ
解雇されたからと言って夜盗をやってる奴らが正義の味方だと本当に思うか？」

ランスも紛れも無い事実を言いリズナに問いかけると、リズナは暫く視線を右に左にと移動させた後、ランスの方へとトテトテと歩いていった。

「「セツ!? センセー! ! ! ! ! ?」」

信頼していたリズナが裏切った事にショックを隠し切れずに叫ぶ男達

「ランスさんにはご恩があります

だからもう、ブッシュさんのお手伝いは出来ません、ごめんなさい」

リズナ自身は騙されていただけなので謝る必要はないのだが、律儀にも謝るリズナに男たちはパニックを起こす。

「リズナ先生が寝返った! ? もう駄目だ! 逃げろ! ! ! ! !」

レジスタンスの残党はバラバラになって逃げて行く……が出口にはようやく到着したシルバー隊が居り、全員あえなく御用となるのであった。

——ちなみに、その後リズナは魔法使いであるのでダニエルやサーナキアの反対もあったが、ランスが強引にグリーン隊へと入隊させてしまうのであった。

壱拾七話語 ランスたちメイン（後書き）

後語り

マリア・志津香・リズナがパーティに参戦する話でした。

メインキャラが続々と増えるのはいいのですが、そうするとどんどんサブキャラと銀閣が空気になってしまおうと言うジレンマ……

まあ今回特に話すことも無いんで感想であった宇練銀閣の現在のステータスをちょい公開

宇練銀閣

LV23

HP200

攻撃力・900

魔法力・0

防御力・30

魔抵力・0

回避力・30

弱点属性・炎

SKILL

零閃（斬刀・鈍による高速の居合切りを行います 敵単体）

零閃編隊（零閃による連続切りを行います、数は2〜5連撃 敵単体／前列も可）

絶対領域（狭い室内で壁を背にした時、無類の強さを発揮します・

・でも基本的に使いません）

限定奥義・斬刀狩り（敵に攻撃を当てると発動します 攻撃を当てるたびに攻撃力が上がり、さらには零閃編隊の攻撃回数が最大10まで上がります）

技能レベル

剣戦闘LV1

居合切りLV2

異常です……字が違う？ワザとです

銀閣は攻撃力だけ以上に高いけど他は全然、ぶっちゃけ防御面は紙です（ちなみにこのレベル前後の前衛の防御力は平均的に40〜50はあります）

でもその変わり攻撃力は異常です、しかも通常攻撃が必殺技並みの威力のある零閃でタメなんていりません。

しかも攻撃すればするほど残党狩りで攻撃力が上がります、チートくさいですね

剣戦闘LVが1なのは居合切り特化で他の事が出来ないと言う作者の勝手なイメージのせいです。

その変わり居合切りLVと言う特殊な技能を2にしています・・・ほんとは3にしようか迷ったけどそうそうLV3（伝説レベル）は出来ないと思い断念・・・限りなくLV3に近いLV2って事で脳内完結

あと一応言っておきますが、このレベルだと他のメンバーの攻撃力はランスでも500は行きませんしかも才能限界はまだなんでこれから上がり続けます・・・ランス世界ではバランス何それ？な人（魔人）も多いけどそんな連中と正面切って戦えるように将来的になりそうですね・・・防御は紙だけどWW

ちなみに、斬刀・鈍はSランクの武器並みの性能があります。最初からSランク武器持ちってなんぞ？

そんなかわり防具は普通の服なんで防御力なんてありません。

壱拾八話語くどちかと言うと幕間に近いく（前書き）

前語り

何か日曜だからって頑張ったらストックが二話分出来てしまった…
今日は早く眠るつもりだったのに…
・・・俺って、本当に馬鹿……

壱拾八話語くどっちかと言うと幕間に近いく

——ある日の午後……右衛門左衛門は一人、ゼス王宮博物館へとやって来ていた

「（——どうやら、千鶴子殿の用意したこの服の効力は確かなようだな……）」

この博物館は魔法使いしか入る事が出来ない様になっているのだが、そのセンサーを誤魔化す特殊な服を着た右衛門左衛門は怪しまれる事も無く無事に潜入している。

「（——さて……探すか、私の杞憂であれば良いのだが）」

——そもそも右衛門左衛門がわざわざこの場所に来た理由は昨日へと遡る——

王者の塔の一室にて、定時報告と世間話を合わせた雑談会を千鶴子リヒト・クロム・ヘリムの部下一同としていた右衛門左衛門がとある話を聞いた事から始まる。

「そうそう、自分、ちょっと前に久しぶりに博物館に言ってみたんすけど」

「——なんか新しく展示されてた物があったんすけどかなり変な物だったんすよ」

ヘリムが会話の種として持ち出した博物館の新しい展示品の話しを始め、最初の方は皆、興味心から耳を傾けていたのだが

その展示品の詳細を聞いた際に、右衛門左衛門の表情が真剣な物になっていった。

「————ってのだったんすけど、何でゼスでそんなものが見つかったのが不思議ッスよねえ……」

「——————ヘリム殿……その話、詳しく聞かせて貰えるか？」

「へっ！？ いや、まあ、別に良いっすけど……」

何時になく真剣な声の右衛門左衛門に戸惑いながら、自身が見た物の大きさや形、それらの詳細を話すヘリムだったが、ある程度情報を聞き出した右衛門左衛門は突如部屋を飛び出し、千鶴子の部屋へと向かって行くのであった。

「——千鶴子殿！ 少し話し……が……」

全速力で物の数秒もしない内に千鶴子の部屋へと到着した右衛門左衛門はよほど火急の用事なのか、ノックもすることなく扉を勢いよく開け、部屋へと入ると……

———そこには千鶴子がいた……それだけなら極普通の事なのだが、今回右衛門左衛門は彼のキャラには珍しく、間が悪かった

結論から言ってしまうと、千鶴子は現在半裸だった……

辛うじて下着は着けているが、着替える服を両手で持ち、広げている所だったので服同様、少々悪趣味と言いか派手な真っ赤なブラとショーツをバッチリ見てしまったのである

「………すまない、不注意だった———しかし千鶴子殿、その下着は少々派手すぎると思うのだが」

元忍たるもの、色気に惑わされる様な事はないのか、特に動揺する事も無く、冷静に忠告をもこなす右衛門左衛門だが、それはこの場では悪手でしかなかった

「———ツツツ!!??」

一瞬思考がフリーズした千鶴子だが、理解が追いついた次の瞬間には顔を真っ赤にして無言で右衛門左衛門へと炎の矢を撃ち放った。

「———おっと……不感心^{かんしんできず}、千鶴子殿、如何にこの塔が頑丈とは言え突然魔法を放つのは感心出来ないな……それでは弟子であるアニス殿を叱れぬぞ？」

特に精密に狙われた訳では無い炎の矢を容易く避けて続け様にそう忠告する右衛門左衛門（本来精確に狙われた魔法は不可避である）

「————ッ!! いいから出ていきなさいッッッ!!!!」

何処までも冷静な右衛門左衛門へそう怒鳴りつける千鶴子・・・

四天王筆頭として腐敗長官の相手と四天王の仕事を日夜一人でこなす千鶴子とは言え、年齢は21の未だ恥じらいを忘れぬ娘であった。

——その後、不機嫌な千鶴子を宥めつつ、右衛門左衛門は気になる事があるので王宮博物館に自分が入れる方法は無いかと相談し、千鶴子は何故右衛門左衛門が博物館に入りたがるのかが当然気になり、理由を聞くとすぐに手を回し、例の偽装服を右衛門左衛門へと託したのだった。

「————さて、この部屋に例の展示品が飾られているのだったな……」

そう呟き、扉を開けた右衛門左衛門は中央に飾られた展示品を発見し、絶句した。

「————これは!?!?……やはりこれだったのか————」

——右衛門左衛門が何かを見つけている一方その頃アイスフレイム・グリーン隊は——

「これがマジノラインか……初めて見たぞ」

「ヒャー……凄いです！」

現在一同はゼスの西側すべてを覆う巨大な要塞である“マジノライン”へと訪れていた

——一同がこの場所にやって来た理由は、任務の最中に捕まってしまう、このマジノラインのふもとの簡易収容所へと捕えられたアベルト率いるブルー隊の救出のためであった

「随分と仰々しい場所だけど、一体何なんだいここは？」

この辺の事に詳しいであろうカオルへと問い掛ける銀閣にカオルも流れるように答える

「ここはゼス本国の西の端、魔物界と接して延々と続いている巨大要塞です：

中は人工的に手を入れられ、外部：特に魔物に対しての設備が強固に整えられています」

「そんな物が必要になるくらいこの辺は危険なのかい？」

地理も魔物界も分からない銀閣は自然に湧いた疑問をぶつけるとカオルは続けて答える

「はい、二年前も大掛かりな魔軍の侵攻がありました
これとガンジー王の活躍により食い止める事が出来たそうです」

「——ん？　　ってそれはつまりこの国は頭首自身が戦ったって言う事かい？」

「はい、ガンジー王はこの国でも有数の魔法使いでとてもお強い方ですので」

「……………このレジスタンスって言うのはその王さんに反攻してる組織じゃあなかったのかな？」

「正確にはこの国の魔法使いによる選抜意識を無くす事が一番の目的ですよ……ガンジー王自身は腐敗した各長官達とは違い、ゼスの未来をよりよくする為に動いていると言う噂を良く聞きます」

「——随分とその王さまを擁護するね」

その銀閣の眩きにハッと我に返ったカオルは咄嗟に誤魔化そうと口を開くが

「まあ、この組織も一枚岩って訳でも無ければ一人一人の考えも違う訳だしねえ……アンタ見たいに国の王さまを信じてる人間もいるわけか」

カオルが弁明する前に勝手に自己完結する銀閣を見て、ここは何も言わない方がいいと判断したカオルは特に答える事も無く、先に進んでいた一同へと追いつく為に歩く速度を上げたのだった。

「——まあ、間者の一人や二人くらい紛れてようが可笑しくも無いしねえ……」

カオルが進んだ後、誰にも聞こえない音量で銀閣はそう呟くのだった。

——それから少し時間が経って再び王者の塔

右衛門左衛門は王者の塔へと戻り、博物館への調査の結果を報告するために鶴子の部屋へと訪れていた————なお、今回は部屋の前から声を掛けてから入ったので先日のようなハプニングは起こらなかった。

「——それで、どうだったの？ 貴方の予想は？」

「不外……^{はずれず}予想道理の結果だった」

「——じゃあやっぱり……」

「ああ、あれは早急に此方に移した方がいいだろう……あの場所ですべて展示されているだけならば恐らく問題は無いだろうが、万が一と言う事があるのでな」

「————はあああ、分かりました、四天王の権限で何とかここに譲り渡すように交渉します」

——貴重なマジックアイテムと言う訳でもないし、ゼスの人間に

価値が分かるとも思えないから比較的簡単に交渉は成立するでしょうし」

「――では、よろしく頼む千鶴子殿」

「ええ――――ところで、貴方今日はアニスを見てない？ 朝から見当たらないのだけど」

「ム？ アニス殿ならば先ほど塔の周りをうろついていたが……杖を持ってはいなかったので気にはしなかったが……」

「……一応この辺りにもモンスターは出るんだけど……まあアニスなら大丈夫でしょうけど」

《千鶴子様――！！》

「あら？ 噂をすれば、本人が帰って来たみたいね」

「そのようだな」

二人の言葉通り、ドタドタと走る音と共に千鶴子の名前を叫ぶアニスの声が徐々に部屋へと近づいてくる。

――そして

「千鶴子様――！！ 森で変な物を見つけました！

――見てください！ 持っていると何だか心が洗われているような気分になる木の棒です――！！」

「……………」

そう言ってアニスが千鶴子へと見せた“木の棒”見た右衛門左衛門は、見覚えの有り過ぎるそれを珍しく啞然・呆然とした表情（仮面でほとんど見えない）で見つめた。

「アニス、アンタはまた変な物を拾って来て・・・ってどうしたの右衛門左衛門？」

マッハピヨが破壊光線を撃たれたような顔して？」

「どうしましたか右衛門左衛門殿？」

——ハッ！？　　もしかこの木の棒が欲しいのですか！？　　駄目ですよ、これは千鶴子様へのお土産なのですから！！」

「いや、別に私はそんなの要らないんだけど……」

そう言いながらアニスが千鶴子へと渡そうとし、千鶴子が渡されるのを拒否している木の棒・・・もとい木刀は右衛門左衛門が知る“王刀・鋸”と酷似していた—————と言うかそのまんまであった。

「……………千鶴子殿、報告も済んだので、私はもう休ませて貰います」

あまりの出来事に考える事を放棄した右衛門左衛門は千鶴子へとそう告げると、さっさと部屋を出ていくのであった。

壱拾八話語くどっちかと言うと幕間に近いく(後書き)

後語り

はい、と言うことで右衛門左衛門は王刀・鋸を入手しました…
でも使う機会はほとんどないのよ・・・鋸エ…

久々のQ&A

Q、アニスが王刀持つてるけど王刀楽土は発動してないの？

A、発動はしてるけど、LV3の魔抵力で効果が薄いつて事にして
くだしあ

Q、千鶴子さんの下着についてkws k

A、OK、命は捨てる覚悟はあるな？

Q、結局何を見つけたん？

A、まだ内緒、伏線は回収するまで内緒だから伏線と言うのだよ

壱拾九話語く無実の小説家を救出せよ!!く前編(前書き)

前語り

女の子刑務所編です。

長くなったんで今回は前後に割けました。

壱拾九話語く無実の小説家を救出せよ!!く前編

――――夜・女の子刑務所付近

「本当にこんなので空を飛べるのかい？」

銀閣はアイスフレームで用意された潜入用のハンググライダーを見ながら、珍しく不安げにそう呟く

「はい、銀閣さんはこう言った道具を見るのは初めてですか？」

珍しい銀閣の一面に微笑ましく思いながら答えるカオルだが、銀閣の表情は渋いままだ。

「――――まるで風揚げだな……まあ、ここでゴチャゴチャ言っても仕方ないんだけどな」

潔く覚悟を決めた銀閣はカオルから使用方法と注意事項等を聞き、一同と共に飛び立った。

――今回彼らグリーン隊がわざわざこの女の子刑務所にやって来た理由は、この刑務所に無実の罪で囚われている小説家・レッドアンを救出する任務を任されたためである。

「刑務所ってのは、要するに牢獄の事か……ん？」

無事に施設内部に潜入を果たした一同は、警備員に見つからぬ様に刑務所内部へと侵入する。

その際に刑務所の意味を聞いた銀閣は先の台詞を吐き興味深げに施設内部を見回している。

すると前方から黒っぽい制服を身に纏った不審な男が居る事に気付く銀閣に続いてその不審な男とグリーン隊の面々もお互いに気付いた。

「なんだ、お前は？」

「なんだと言うお前こそなんだ？」

ランスの問い掛けにオウム返しに質問を返す男

そのやり取りにお互いが何かを理解し合う

「どうやら」

「治安部隊の者ではないらしいな……
ゼスの未来の為」

ランスの言葉に続くように言った男は突然そう問いかけて来た

「——はあ？」

「多分、符号です……」

困惑するランスにカオルが説明をする。

「符号？」

と聞き返すリズナ

「仲間同士かどうかを確認する合い言葉のようです…」

その説明にランスは納得する。

「ああ、山と言えば川と言う奴だな

——川！！」

自信満々に言い切るランスだが、当然男がその様な答えを期待している訳は無く

男は武器を掲げて一同へと襲い掛かろうとする。

「同士では無い——チン——な？」

——ポトリ

しかし、唐突に男の首は肉体から離れ、地面へと落ちた。

「……お見事……」

そこで、セスナは何時の間にか前衛に立っていた銀閣へそう言った。

「ふああ————どうにも穏やかな空気じゃ無かったんで、切り捨て御免にさせてもらったぜ？ 隊長さん」

そう眠たげにランスへと問い掛ける銀閣に、ランスはフンと鼻を鳴らすと

「余計な事をしなくても、俺様がさっさと殺してやったものを……まあ良い、結局何なんだこいつは？ シイルさっさと調べろ！」

「えっ！？ 死体を…またですか？」

「当り前だろうが、俺様にこんな汚れ仕事をさせるつもりか！？」

「うう…わかりました……」

奴隷であるシイルがランスに逆らえる訳も無く、泣く泣く死体を調べたシイルは男が所持していたカードを発見する。

「ランスさま、こんなカードが出てきました」

「なにに…ペンタゴンカード？ 会員ナンバー2301？
なんだこりゃ？」

「やっぱり……」

ランスがカードの内容を読み上げると、カオルは今までになく険しい顔で、呟いた

「知ってんのかい？ 副隊長さん？」

「ゼス最大規模のレジスタンス組織——いえ、テロリスト組織です」

「テロリストお？」

銀閣の問い掛けに答えるカオルに、次はランスが問いかけた。

「魔法使いに対して怨根のみで動いているんです

・・・最終的な狙いは、魔法使い達に成り代わって、自分たちがこの国の政権を牛耳ろうとしている暴力組織です」

「まあ・・・アイスフレイムとはずいぶん違いますね・・・」

「活動も正反対です

破壊活動を主に行っており、それに巻き込まれ死傷する一般市民も多数出ています」

リズナの呟きにやり場のない怒りに眉根を歪めながら補足する。

「……………ふあああああ——話しはその位にして、目的に戻さないかい？

パツと見た感じ、結構ここは広い様だし、一度二手に分かれて例の小説家？　だっけかを捜さねえか？」

カオルの説明を聞き入っていた一同に水を差すように銀閣が言う一同は思考を切り替えて、銀閣の提案に少し考える。

「——確かに、闇雲に団体で動くよりは効率はいいますが……この刑務所内には治安部隊だけでなく、モンスターやペンタゴンの団員もいるようですし、戦力を分けるのは危険と思います」

暫く考えたカオルは、危険度の方が大きいと考え、否定したために、全員で動くことになった。

それから、暫く現れる治安部隊やモンスター、またはペンタゴンの団員を倒しつつ、刑務所の鍵を手に入れた一同は、奥へと進んで行く。と開けた部屋の二階に位置する窓で、先日の中央銀行襲撃の際に出会ったズルキ・クラウンと拘束された女性が居た。

ズルキは拘束された女性をランス達の仲間と思い、女性を人質にランス達に降伏を命ずるが、その女性はペンタゴンのメンバーであり、ランス達アイスフリームには何の関係もなかったのである。

「……おい、あれは仲間ではないのか？」

あまりにランス達と会話が噛み合わない為、人質にしている女性にそう尋ねるズルキ

「……っ……っ……あんな奴ら……知らない」

拷問を受けながらも女性は憎々しげにそう答える

「それでは人質として役立たんではないか……早く言いなさい」

そう言ってズルキは前触れも無く、女性へと無理やり埋め込んである装置のスイッチを入れる

「つく!? うあああ!!」

苦悶の声を上げる女性

「では、お前の仲間が来るまで楽しませて貰うか……観客がいないと、多少張り合いがないがな……」

そう言ってその窓から姿を消そうとするが、その窓にもう一人の人影が映った。

「ズルキさま！　ここの侵入者以外でもう直ぐそこまで来ている者がいます！！」

ここは危険です！　直ぐに移動しましょう」

その人影は治安部隊の制服を着た男であり、焦ったようにズルキへと言うが、ズルキは余裕を崩さず

「まあ、そう焦るな君・・・恐らくこの女の仲間はいつらだろうから、今度こそ人質にはなるだろう、観客がいなくて詰まらないと思った矢先にやって来るとは、魔法が使えない代わりに気は利くのだなお前の仲間は」

そう言って女性へと目を向けるズルキに女性は睨み返す

その態度を不快に感じたのか、再びスイッチを入れるズルキは悲鳴を上げる女性と共に窓から姿を消した。

「ランス様、さっきの女の子…拷問されていたみたいです…」

姿が見えなくなった窓を見つめながらシイルはランスへと話しかける

「うむ、そうだな

あんなおっさんに拷問させるのはもったいない、さっさと助けて、俺様のハイパー兵器をブチ込んで慰めてやろうフハハハハハ」

——果たしてそれは慰めになるのだろうか？　いや、ならない（

反語)

「おい——この娘の仲間は何処に居るんだ？

もう直ぐそこまで来ているのでは無かったのか？」

——その場所から移動したズルキは周囲を見渡しながら、前方にいる治安部隊の男へと不審げに尋ねる。

「・・・・・・・・・・・・・・・・（プルプル）」

しかし、問いかけられた男は何も喋らず、ただ前を向いて震えているだけだった。

その態度に何かあるのかと思い、男の後ろから前方を覗くが、何もありません。

「おい！ いい加減何か答えたらどうだ！？」

まさかお前は私の楽しみを奪うために来ただけなのか！？」

「————ック」

苛立ち気味にそう怒鳴るズルキに男は耐え切れない様に声を出す：
：その視線の先には捕まったペンタゴンの幹部・エリザベス・レイ
コックがあった

「————きゃは————きゃはきゃは！！ 駄目だもう我慢でき
ねえ！

何捕まっちゃってんだよお前、きゃはきゃは、いっつも偉そうに踏
ん返り返って命令している子猫ちゃんは何処に行ったんだ！？ き

「やはきやは」

ダムが崩壊するかのように治安部隊の格好をした男は笑い出した――
―それも、先程まで出していた声とは全く別の声で・・・

「なっ!?! き、貴様は何者だ!?!」

そこでもうやく目の前の男が治安部隊で無い事に気付いたズルキが謎の男へと問い掛ける。

「ん? ああ、そうでしたね、ズルキ様あ……先ほど言った通り、侵入者は直ぐそこに迫っていましたよ――正確にはアンタの目の前に居るんだけどな、きはきはは!?!」

喋りながら、目の前の男は不気味な音を鳴らせながら姿を変えている――
――体格、顔つき、髪の色や長さに至るまで先ほどの男とは別人になった男は啞然としているズルキの隙を突き、エリザベスを確保するのだった。

――一方その頃

ランス達は牢屋を一望出来る部屋で待ち構えていたサーベルナイトことハッサム・クラウンを撃退した所だった。

「ば、馬鹿な……貴様ら……貴様ら何かに……この私が負ける訳が……」
ハッサムはそう言いながら膝を地面につけ、再びよろよろと立ち上がった

「お前はもう負けたんだ」

負け犬は鬱陶しいからどっか行け」

もはやハッサムに興味を示さないランスはそう言うが
ハッサムはまだ諦めていないのか武器を構える

「まだ……まだ——グハッ!!?」

グシャリ……とランス達の目の前でハッサムは巨大な二つのブロック
に押し潰された

正確には押し潰されたのでは無く、ブロックについている太い針に
串刺しにされていた。

「うげっ」

「ヒッ」

「……なんだい？ アンタは」

突然の惨劇に気持ち悪げに声を出すランスと悲鳴を押し殺すシル
そして眉を顰めながら、目の前の惨劇の主へと問い掛ける銀閣
その相手は、鍛え上げられた巨大な筋肉で覆われた肉体を持つ金髪
の険しい顔をした男だった。

「……………」

しかし男は無言で自分の得物に引っ掛かっていたハッサムだった物
の亡骸を無造作に地面に落とす

「これでいいんですよね？」

そして男は部屋に入って来たもう一人の口髭を生やした男へと問い掛ける

「ああ、ご苦労、キングジョージ」

キングジョージと呼ばれた男は髭の男の労いの言葉に嬉しそうに返事をする

「ありがとうございます、提督様

——でも、俺：言われた通りにクズを掃除しただけなんでは、褒められる様な事、してないです、当然の事を、ただけです」

——人一人を殺した事が当然の事なのであろうか、しかし提督と呼ばれた男は特に表情を変える事も無く答える

「確かに：魔法使いなどのクズにすぎません——

ですが、クズ一つでも美観を損なう、ひとつひとつコツコツと片づけていく努力は大変、重要な事です

キングジョージ、君は本当にいい戦士ですね、そのまま、私の言葉を守ると良いですよ」

「はい、提督様：俺は提督様の言葉を守って頑張ります…」

そこで提督と呼ばれた男はキングジョージから意識をランス達へと移す。

「ウム・・・

それで、君達は？ 見たところ、この牢獄の職員ではないようだが？」

その疑問に答えるのはランス達ではなく、提督と共に部屋へと入って来た赤髪の女の子だった。

「ネルソン様、ネルソン様
この人たち、ひょっとしたらアイスフレームの人たちじゃないですか？」

「ほう…アイスフレーム…
…ウルザの手の者達か？」

「いかにも、俺様はウルザちゃんの愛の戦士だ」

そう答えるランスにネルソンはランス達を一瞥する。

それから暫く話を続けていたランスとネルソンだが、それを尻目に銀閣は、先程ネルソンへと話しかけていた女の子を見ていた

「———？ 私の顔に何かついてますかー？」

そう言って自分の顔を触る女の子に銀閣は尋ねる。

「———お嬢ちゃん…アンタを里で見かけた気がするんだが、俺の気のせいかい？」

「（ギクッ！！）———え、えー、知りませんよ？」

もしかして新手のナンパですか？

嫌ですねーポンパドールちゃんはアイスフレームの隠れ里何かに行ったこと無いですよー」

「…………俺は別にアイスフレームの隠れ里と言った覚えは無いんだが」

「（ギクギクウ！！）——あつ、ネルソン様、そう言えば蝙蝠さんからエリザベスさんを救出してズルキを捕えたって連絡があったんですから急ぎましょう！！」

「ん？ ああそうでしたね、では皆、行くでしょう」

ポンパドールは銀閣の指摘から逃げるようにネルソンへと言い、ネルソンがそう言うのと全員がそれに従い、部屋から出て行った。

「何なんだあの連中は…」

「あれがペンタゴンです」

「ヒイイイイイ」

そう答えるカオルの顔はロッキーが思わず悲鳴を上げるほど怖かったと言う。

壱拾九話語く無実の小説家を救出せよ!!く前編(後書き)

後語り

性的表現を和らげて書くのが一番面倒くさい(挨拶)

でもそうしないとノクターン行きになってしまう……

まあそんな事より、久しぶりに登場したやつがいますね……それからようやくペンタゴンが登場しました。

正直自分エリザベスはかなり好みだったんですが……扱いは原作とあんまり変わらないと思います——好きな子ほど地獄に落としたって言うし(ネタバレ&言いません)

どうでも良いけどエリザベスが若干かなめに似てる様な気がしてならないのは自分だけでしょうか……まあ違う所の方が多いけど(胸とか胸とか胸とか……あと身長とか胸とか)

後半に続く

式拾話語く謎の組織、ペンタゴンの実態とは？く後編（前書き）

前語り

え？ 前回とサブタイが違う？

れれれれ冷静になれ、これは公明党の罠だ！

なんて馬鹿言ってますが、もう20話目ですよ20、プロローグや幕間を入れれば24ですよ！

よくもまあ毎日続くものですね……この調子で夏休み中頑張りたいですが、そろそろ大学の勉強の予習復習しとかなないと後期の単位ががががが……まあ時間が無いわけでもないんで、ほどほどに勉強も頑張ります。

式拾話語く謎の組織、ペンタゴンの実態とは？く後編

——その後、牢屋の鍵と煉獄の鍵を入手した一同は先ほどまで通れなかった扉を通り、部屋へと入るとそこには先客がいた。

「政治を私物のように利用する
貴様のような者がいるからこの国は駄目なのだ」

「だ、黙れ！！ 魔法も使えぬ下衆が！！」

先程別れたネルソンらペンタゴンの団員たちが縛られ地面へと倒れているズルキに武器を突き付け、ネルソンはズルキへ、そして団員達へと語りかける

「魔法…ね

その様なものを使える者こそ、下衆の局地、
屑の中の屑、生きている価値——否、生きているものとして認める価値も無い屑である

体力も低く、前線に出る事も無く遠方から攻撃し、のうのうとして
いる戦場の卑怯者、それが魔法使い！！

己の弱さを特権を得る事で誤魔化し生きる史上最悪の卑怯者だ！！」

ネルソンの声は段々と大きくなる、それに陶醉するかのように部下
たちは静かに聞き入っているが、目だけは熱く、狂信者の目をして
いた。

ネルソンは声に抑揚を付け、聞く人々が目を離せないように計算しながら演説を続ける

それは、部屋へと入ってきたランス達へのアピールもあるのだろう・

「新しい世界秩序を造るためには、我らが動かねばならぬ！」

「な、何を言うかテロリスト共!？」

いずれ殲滅してやる! お前ら一人も残さず!

二級市民など一人残らず皆殺しにすべきなのだ!!」

ネルソンの演説を聞いたズルキはそう怒鳴り付ける——しかし、それはあまりにも愚かだった。

「——きやはきやは・・・おっさん、アンタ今の状況分かってんのかあ?」

「だ、黙れ奇妙な技を使う化け物め!! 貴様さえいなければこんなことには——」

「それが最後の言葉ですな?」

パチン：とネルソンが指を鳴らし合図を出すと、手に剣を携えた彼の部下たちがズルキへと迫って行く

「——ヒッ!？」

「先に地獄へお行きください、ズルキ元長官」

「ぎゃあああああああああああ」

ネルソンの部下が次々にズルキへと剣を突き刺し、ズルキの体は自身の血で真っ赤に染まって行く。

「そう思わないかね？ 諸君」

その惨状に顔色一つ変えず、ネルソンはランス達に背を向けたまま問いかける

「魔法使いは根絶やしにするべきだ、どんな手を使っても、さもなくばこの国に夜明けはこない」

問い掛けたにも関わらず、ネルソンは言葉を続ける

「私の考えに賛同するのであれば、いつでもアイスフレイムを抜けばペンタゴンにくると言い、私は歓迎する

ウルザは優秀な戦士であったが、今はただの腑抜けだ、あの様な小娘についていても、理想を貫く事は出来んぞ」

「はいはいはい、我がペンタゴンの機関誌『我が闘争』の最新号でーっす！！

どぞ、どぞどぞ、どーぞー！！」

容赦のない私刑^{リンチ}を背景に明るい顔と声でアイスフレイムメンバーに雑誌を配るポンパドール

ランスは直ぐにその雑誌を放り投げるが、ネルソンは気にせずに服を正したエリザベスの方へ向いた

「大丈夫か？ エリザベス」

「はい、提督…

申し訳ありません、私の様な者のためにわざわざ提督が……」

「お前は私の部下だ、部下を助けるのは当たり前のことだ、気に病むことは無い」

「提督……」

その言葉にエリザベスは感動したようにネルソンをみる……しかし、ある男がその視線を遮る

「おーっと、子猫ちゃん…まず最初にお礼を言うべきなのは俺に対してじゃないかなあ？ きやはきやはわざわざ変装までして変態オヤジから助けてやった俺に言うべきことではないのかなあ？ んん？」

「……………ッ……すまなかった」

神経を逆なでする様に問いかける男に怒りを抑えながらそう言うエリザベスだが、男はその位置から変わらず

「はあー？ すいませんでした、ありがとうございます……くらい言えないのかよ子猫ちゃん？ 俺が来るのがもうチョイ遅かったら今頃あの変態オヤジに何をされていたか……下手したら人質にされて提督さん達にも迷惑かけてたかもしれないねえよなあ？」

「……………ックウ……すいませんでした、ありがとうございます」

「ええー？ なんだって？ 声が小さくて全然聞こえねえな！？」

「……………すみませんでしたッ！！ありがとうございますッ！！」

「——んだよ…んなデカイ声出さなくても聞こえるっつーの」

「——————ッ!!」

「その辺にしておきたまえ蝙蝠君

一先ずエリザベスの無事を喜ぼうではないか」

声にならない怒りが限界に達しかけたエリザベスを抑えるように男へと話しかけるネルソン

「へいへい、提督さんが言うなら子猫ちゃんをからかうのはこんくらいにしとくよ」

「ウム、ここでの我々の目的は果たされた!!」

速やかに脱出する!!」

ネルソンの号令でペンタゴンは素早くその部屋から退出していった

その後、ランス達一同は牢屋の中を一つずつ調べ、途中牢屋の中に捕まった忍者と言う極めて珍しいモノであるリーザスの忍者・見当かなみを発見し、部下に（半強制的に）加えたランスは目的である小説家レッドアイを発見し、これで後は戻るだけと言った所で、まだ自分の目的——刑務所の所長であり、自身を奴隷観察所へと入れたラドンの娘であるエミを犯すことを終えていないと言い、再び施設内部を回る事になったのだが・・・それは間違いであった。

——その後エミ自らがランス達を倒すために部下である先日のムシ使いであるドルハンがランス達を襲うが、一同は辛うじてそれを撃退し、ランスが一人になったエミを拘束しドレスを剣で切り裂き今から事に及ぼうと完全に油断している時だった。

「がはははは！　いただきます——」

「エミ様から……離れろ」

「ん？」

倒された筈のドルハンがふらりと立ち上がったのだ

「なんだ、生きてたのか？」

「ムシ使いの自己再生能力を…馬鹿にせんで欲しいな…」

「ふーん、そう言う芸当もあるのか…で？　そのフラフラな体でどうするつもりだ？」

「……………」

感心したようなランスの問い掛けにドルハンは暫く黙った後、覚悟を決めたかのように

「エミ様…出来る限り、頭をお下げください」

「あっ…！」

エミは言われるままに、ランスに両手を縛められたまま頭を下げる

「っ!？」

それと同時に何かに気付いたカオルが地を蹴りランスに向かって走る

「ん?…なんだ？」

「――フッ!!」

ドルハンの短い呼気と共に、左肩から煌めく何かが飛び出した

「危ない!!」

その時、カオルがランスを突き飛ばすのと同時に、カオルの背中に何かが突き刺さった

「うっ・・・くうー!!」

「カオル!？」

カオルは苦悶の声を上げて地面へと倒れ込み、ランスはエミの拘束を離してカオルへと駆け寄った。

「くっ…警備隊! 警備隊はまだなの!？」

そして手を離されたエミはランスから逃げるようにドルハンの背へと隠れそう叫ぶと

「はい、お待たせしましたエミ様!! 第一陣!!」

入り口側からウォールガイを引き連れて現れたキューティー・ハ
ンドにランス達は焦る

「ッゲ！？　またあいつかよ…
カオル！？　おいカオル！？」

「駄目です、気絶なさってしまつて…」
必死にカオルの治療を施すシイルとプリマだが、カオルは一向に意
識を取り戻さない

「っ…逃げましょうランスさん」

「んだ！　その方がいいだ！」

「あの数は、さすがに全部切るのは手間だねえ…」

リズナ・ロッキー・銀閣から次々と声を掛けられるランスは悔しそ
うな顔をしながら

「くっそー！！
よし、逃げるぞー！！」

迷宮から脱出できるアイテムのお帰り盆栽を使用し、逃げるのであ
った。

その後、アイスフレイムへと帰還した一同だが、カオルの受けたム
シ使いの毒は深刻で、医者であるダニエルの病室で絶対安静を強い
られるのであった。

・・・・・・その頃、ペンタゴンでは

ペンタゴン司令部にネルソンを中心に騎士達が揃っていた

「しかし、君が無事で本当に良かった」

そう安堵の息を漏らす提督ネルソン・サーバー

「ありがとうございます、提督」

そう礼を言うペンタゴンNO2 エリザベス・レイコック

「提督：とても心配してた：」

そう補足するペンタゴン最強の騎士 キングジョージ・アバレー

「エリザベスは提督の一番弟子だからな」

眼帯にパイプを咥えた厳つい顔つきの大男、ペンタゴンNO3 フット・ロット

「どうした？ 羨ましいのか？」

そうキングジョージに問いかけるメガネを付けた紫髪の男、科学者

ロドネー・ロドネー

「・・・・・・」

以上の五人がペンタゴンの幹部であり、それに加えて外部協力と言う形で真庭蝙蝠が司令部にいた

「君がエリザベスと同じ状態になっても、私は君を助けに行くよ、キングジョージ」

「あ、ありがとう：提督：」

「―――ぶふッ！！」

そうネルソンがキングジョージへと言いキングジョージがそれに礼を言うとき突然真庭蝙蝠は噴出した

「急にどうしたんだ？　なんか可笑しな事があったか？」
そう問いかけるフットに蝙蝠は

「く——クク・・・いや、キングの奴が子猫ちゃんの様にあのオ
ッサンに同じことされてるのを想像しちまって…クククク・・・き
やはきやは」

そう言う蝙蝠にフットも想像してみるが、あまりのシュールさに笑
いよりも寒気を感じたのだった。

「……ゴホン、不覚にも私が捕縛されてしまっている間にペンタゴ
ン内部にも何かありましたか？」

話しを変えようとエリザベスが問いかけるとロドネーが答える

「例の毒ガスの大量生産に入っているよ」

「とうとう、調合に成功したのね」

「当たり前だ、僕を誰だと思ってるの？」

「可愛い顔した鼻っ柱の高い毒薬使いだよな、ロドネー」

「んー？　不健康な顔した引きこもり気味の陰気な坊ちゃん？」

「僕を子ども扱いするような事を言うなって、何度も言わせるなよ
フット…あと蝙蝠、お前は後で新薬の実験に付き合って貰うぞ」

「やーなこった」

「褒めてるんだぜ」

「そんな風に聞こえないよ、ちっとも…あと蝙蝠、今度から食事の時は気を付けることだね」

「では提督、さっそくこれを使い政府の犬共を粛清しましょう」

「ウム、そうだな」

「腐敗しきった魔法使い達を殺し、魔法使いでない者達の新しい世界…
はやくこの目で見たいものです」

「うむ」

「では提督、何処を狙いますか？ 水道局ですか？」

「うむ…」

「提督…？」

少し悩むように答えるネルソンにエリザベスは確認するように問いかける

「少し…違うな…」

「え…？」

「それは少し違う気がするのだよ…エリザベス」

「え……では……どうすればいいのですか？」

「……………」

問い掛けるエリザベスにネルソンは考え込み無言になる

「どうすれば……いいか……」

どうすれば……この国が変えられるのか……」

「提督、迷っているは何も出来ません
まずは、行動を……」

気弱な発言をするネルソンを励ますように語りかけるエリザベス

「そう、それは必要なことだ……
だが……もっと欲しい、決定的な何か……だ」

「何か？」

「そう、何かだ……もう少し……もう少しでその何かが掴めそうな気がするんだ……」

「……だが、それが何かが私にはまだ見えない……」

「……………んじゃあ、暫く活動は休むのかい？」
そう問いかける蝙蝠にネルソンは首を横に振る

「いや……それはない」

「……だが……決め手に欠けるのだ……」
何か……だが、私がしなくては誰がするというのだ……

私が動かなくては…私が…」

ネルソンはブツブツと口の中で呟きながらその場から姿を消した

「提督…」

「俺・・・ついていく」

心配そうにするエリザベスにキングジョージはそう言った

「お願いね、キングジョージ」

「だいぶ、お疲れのようだな、提督は」

「――ッ」

様子を見ていたロドネーそう呟くとエリザベスは体を震わせる
その様子をみたフットはエリザベスへと声を掛ける

「お前さんの救出のせいじゃない、気に病むな、お嬢ちゃん」

「私の名前はエリザベスだ」

蝙蝠の奴といい、何度も言わせるな」

「はは、悪い悪い…ってその蝙蝠の奴は何処に行った？」

「あれ？　そう言えないね…僕の新薬実験が怖くて逃げたのか
な？」

「かもしれねえな、ハハハ」

その時、件の蝙蝠はネルソンが出て行った扉を通り、廊下を歩いて

いた

「(――――ハァー、やっぱりあのオッサンは駄目だな……人を惹きつける才能があっても人を率いる才能がねえ……大体、何時も作戦ごとに自分の部屋で一人頭を抱えてるような奴が国を変えるなんて馬鹿馬鹿しいね、きやはきやは
まっ、俺は金さえ貰えればどうでもいいんだけどな……この組織もいい加減壊れそうだし、そろそろ何時裏切るかを決めて置いた方がいいかもな……きやはきやは)」

「あれー？ 蝙蝠さん、会議は良いんですか？」
廊下を歩く蝙蝠を見つけたポンパドールはそう問い掛けた

「ああん？ なんだお前か、元々俺はあんな会議なんかに出る義務はねえからな、サボって出てきただけだよ」

―――今はまだ、彼はペンタゴンの一員だが、何時でも裏切れる準備を着々と進めているのであった。

式拾話語く謎の組織、ペンタゴンの実態とは？く後編（後書き）

後語り

ネルソン先生のパーフェクト魔法使いジェノサイド教室

それとちよい出張ってきた久々の変態男（服装的な意味で）真庭蝙蝠がメインっぽくなってしまった気がしてならない……っーかペンタゴンメイン？

提督さんの演説は言ってる事は一理あるけどその本心は……ねえ？なんせ……への……のためにテロやってるって正直どうよ？（ネタバレのため伏せますが）

ちなみに作者は今回の蝙蝠がエリザベスをからかうシーンが個人的にお気に入りでした……やっぱり気に入ったキャラほど、思いっきり上げてから地獄の底に落としたいって言うしね……っえ？言わない？

あつ、カオルピンチです……終わり（え？）

式拾巻語く解毒薬を探せ！く（前書き）

前語り

今回ちよくちよく、場面変更（って言えるのかな？）的なものが入って読みづらいかもしれません……先にお詫びしておきます

文章力なくてスイマセン！！

あつ、それと今回から、一話内に出演するキャラを絞って行こうと思います……正直キャラが居すぎると書き分けやら、空気化させないようにやら考えると大変すぎるんで……それに全員を会話に絡ませようとしたら文章量がエライことになっちゃうんで、基本的に原作でダンジョン内の会話があるキャラ＋作者の独断と偏見と戦力的なバランスでキャラは決めていきます。

式拾壹語く解毒薬を探せ！く

——女の子刑務所でムシ使いの毒を受けたカオルはこのままでは衰弱死するしかないとダニエルに伝えられたランスは、一縷の望みを託し、ダニエルから聞いたムシ使いの村跡へとグリーン隊の部下を引き連れてやって来ていた・・・

村跡と言っても、そこは既に破壊しつくされた廃墟であり、建物は半壊しているか、荒されている物ばかりで、人の気配も皆無に等しかった……その代りに魔物の気配はあちらこちらから感じるが

「——はああ……こいつは酷いねえ」

「……………ボロボロ……」

村の惨状を見た銀閣とセスナはそう呟いた

「確か前国王が異文化撲滅政策って言うのを実施して、国によってムシ使い達は虐殺されてこんなことになってしまったらしいわよ……」

その呟きに新メンバーとなった忍者の見当かなみが答える。

尚、今回の任務にはグリーン隊全員では無く、何人かは里で待機していた……

理由としては、今回は正規の任務では無く、また間が悪くブルー隊とシルバー隊もそれぞれが別の任務で隠れ里を離れていたため、里

の安全を考え何人かは残る事になったのだ

そして、今この場にいるメンバーは

ランス・銀閣・ロッキー・シイル・リズナ・かなみ——それと何時の間にか銀閣に着いて来ていたセスナの合計7人であった

「…詳しいね…お嬢ちゃん」

「別に…ちょっと調べただけよ」

「………どうして」

「———どうして、こんなことをするんでしょう…」

「どうした？ リズナ？」

「ムシ使いが私たちの生活を脅かしたなどという話はまったくなかったのに…」

それなのに……」

元々、故郷がゼスだったリズナにとっては、この現状は受け入れがたいのであろう……

その瞳には涙をため、理不尽に平和に暮らしていた人々の事を思い悲しんでいた。

「………」

ランスは黙って、リズナを気遣うように頭を優しく叩く

「す、すいません」

リズナは目の端に溜まった涙を、袖で軽く拭った

——一方、そんなランス達を除く三つの人影に一同は気付いていなかった……

「——何者でしょうかね？　彼ら？」

「さあな……しかしここに人が来るなんて、さっきの二人組といい、今日は随分珍しいな」

「……何にせよ、奴らの目的がハッキリしない段階では、監視に努めるぞ……ただし、万が一、アイツに危害を加えるのならば、即座に始末するぞ」

「了解」

「わかりました」

ランス達はムシ使いの村跡を散策し、辛うじて形が残っている家を調べ、ムシ使いの毒の解毒薬を探していた。

その途中、謎の子供がランスを狙って襲い掛かってくるトラブルがあったが、ランスは軽くそれを撃退し、負けた子供は直ぐに逃げに行ったので正体は分からなかったがランス自身は特に気にせず、薬の探索を続けていた。

そして一同はとある家に入る。

「あら？」

すると、リズナが何かに気付いたように声をだす。

「どうしたんだ？」

「ここは比較的綺麗ですよ」

「そうか？」

そう言うリズナにランスは家の中を見回すと、確かに、他の廃墟と違って多少掃除されているような跡があり、空き缶やペットボトルを切って作った食器なども置かれていた。

「生活感があるから、誰かがここに住んでいる……もしくは住んでいたのは間違いないと思うは」

辺りを観察したかなみは皆に聞こえるように言った

「ふむ、誰かは知らんが帰って来るまで待たせて貰うか」

そう言ってランスが腰を降ろしたので、一同は家の外に何人かが見張りになり、一端休息を取るのだった。

—————そんなランス達を監視する三つの影

「おいおい、あいつらあの家に留まっちまってるぜ……」

「拙いすねえ……今あの子が帰って来そうなら止めた方がいいですよね？ やっぱり」

「フム…だが、奴らの会話を聞く限りではこの村へは解毒薬を探しに来ている様だ…
ならばアイツにそれを伝え、さっさと薬を渡して追い返せば良いだろう」

「—————って！ 言ってる間にカロリアの奴戻って来やがった！」

「———僕が連れて来ます！」

—————10分後

「飽きた」

「はあ？」

「早ッ!？」

あまりのランスの忍耐力の無さに呆れる銀閣とかなみだが、
結局ランスがさっさと飽きてしまったため、この家の住人を待つのは物の10分で終わってしまったのであった。

「…………グウ…………」

「——はあ、セスナの嬢ちゃん、隊長さんがもう行くとさ、早く起きな」

「……………ウイ…………」

——その後、探索を続ける一同は、村の中心付近にある、広い場所
所に二つの人影を見つけた。

「ランス様、あれ…」

「ん？」

その人影は、カオルの解毒薬を探しに来る原因となったエミとドル
ハンだった。

二人は此方に気付かず、ドルハンは祠のような物の前で両掌で何か
を持ったまま跪いていた。

すると、ドルハンが両掌に持っていたモノが光に包まれ、そこから
一匹のムシが現れた。

ドルハンはそれを確認すると、取り出したナイフで自身の掌を切り
裂いた。

「さあ、入るんだ…」
ドルハンはそう言うと、ナイフをムシへと持ち替え、ムシをその傷へと導いた

「…グッ…：うう…」
すると、ムシはその傷からドルハンの体内へと潜り込み、ドルハンはその苦痛から苦悶の声を上げながら耐えていた

それを後ろで見ていたエミは冷たい、侮蔑の視線で眺めていた…

「こんなおぞましい儀式だったなんて…
見たいと言わなければ良かった…やはりムシ使いは滅びてよかったのよ…」

そう呟くエミに近づいていた一同の中から銀閣は声を掛ける

「———そう言う割には、そのムシ使いをわざわざ部下にしてるお嬢ちゃんはどう言う考えなのかねえ…：ふああ」

「え!？」

「あんたら…」

突然かけられた声に振り向くエミと、苦痛から落ち着いてきたドルハンはランス達に気付いた。

「こんなところにいやがったのか」
そうランスが武器を構えながら言った。

「――ッ！ ドルハン！！」

「は…はい、エミ様…」

エミに名前を呼ばれたドルハンはその意に答える為にふらつきながらも立ち上がり、ランス達の前へと立った。

「今、新しいムシを入れた…わしはこの前より強くなっているぞ…」

「ふん、それがどうした、かかって来るなら相手になってやるぞ」

「わかった…行くぞ！！」

そうして、ドルハンとの三度目の戦いが始まった。

「おいおい、アイツら戦い始めたぜ！？」

「フム…状況を見る限り、後から来たあ奴らが解毒薬を探しに来た原因はあの男の毒のようだな…」

「――でも、あの男ってムシ使いですよ？ カロリアさん以外にまだ生き残っていたんですね…」

「……………」

「ん？ どうしたカロリア？」

「無理も無い、自分以外にいる筈も無いと思っていた同胞が殺し合
いをしているのだから……お前が望むのならば手助けもするが？」

「……………（ふるふる）」

「……………そうか……」

ランスやエミ達に見つからない様に隠れて戦いを見ている4人は干
渉することなく、その戦いを見守っていた。

「……………ハア！」

——気合一閃、か弱い見た目に不釣り合いな薙刀を操るリズナは
ドルハンへと武器を振るう

「……………ぬうん!!」

だが、その攻撃を硬質化した体で受け止めたドルハン、そこから体
制を整えリズナへと攻撃を加える

「きゃ!？」

「うおりゃあああ!! ランスアタターーーック!!」
間一髪でドルハンの拳を避けたリズナの隣から、ランスが自身の必
殺技をドルハンへと放つ。

「ぬう——ぐううう!!」

まともに受けてしまったドルハンは攻撃の勢いによって後ろに下が
りながら苦痛を耐えるが、それ程ダメージは通っていない様だった。

「クソ、前より強くなっているかとはともかく、タフさは上がって
やがるな……」

そう呟くランスは追撃を加える為に再びドルハンへと接近しようと
するが……

「——っふ!」

そうはさせないとばかりに、刑務所で見せた毒針をランスへと発射
する

「ぬおおおお!! あぶねえ!!?」

喰らえばどうなるかを知っているランスはそれを必死に躲すが、そ
れによって今度はドルハンが自身に接近している事に気付くのが遅
れてしまった。

「——喰らえい!!」

「ランス様!! 危ないだ!!」

気合の声と共にランスへと硬質化した拳を放つドルハンだが、それ
は間に入ったロッキーによって防がれてしまった

「つく……またお前か!」

かつて一同と戦ったイタリアでの焼き回しのようにランスをロッキ
ーが庇った事にそう悪態をつきながら一端距離を離すドルハンだが、

「隙あり！　とう！！」

必死に距離を取ろうとするドルハンに、かなみが手裏剣を投げつけた
それは一つ一つがドルハンへと向かう訳では無いが、それでも幾つ
かの手裏剣はドルハンの体へと吸い込まれるように向かって行く。

「その程度の攻撃で——嘗めるな！！」

しかし、強化されたドルハンの肉体にはその程度の道具では、硬質
化された肌に軽く傷を付ける程度の威力しか発揮しなかった。

「じゃあ、この程度ならどうだい？」

そう言ってかなみの影から、奇襲をかける様に鈍の柄を握りドルハ
ンへと走る銀閣だが

「させるか！！」

——ストトト、とドルハンは走り寄る銀閣の足元へと毒針を放つ

「うおっと！？」

咄嗟に後ろに飛び退く事でそれを躲した銀閣は再び接近しようとする
が、ドルハンはその間にさらに距離を離していた。

「あんたさんの剣がわしにとって一番危険だと今までの戦いでわか
つとるんでな……悪いが、あんたさんには一切近づかないし、近づ
けさせぬぞ！！」

——そう…ドルハンがこのメンバーと戦う上で最も警戒している

相手は、ランスでもなれば魔法使いのシイルでもない、今までの戦いで硬質化した自分に最も有効な攻撃を放つ銀閣だったのである。

故に、二度の戦いで銀閣の間合いを読み切ったドルハンは、三度目の今回は銀閣に対して決して近づかない戦い方を選んだのである

「……………参ったねえ……………」

そう呟く銀閣

——確かに、付かず離れずの距離を置いて遠距離から攻撃され続けられては、銀閣に手は無い、たとえ他の仲間が先行して動きを止めようとも、逃げに徹底されては結局距離を置かれてしまうだろう・
・・・・

ただし、ドルハンには一つの誤算があった・・・

——その手が有効だったのはつい最近までだったと言う事だ

「残念だけど…今ではそれも既に零閃の射程距離なのさ」

ドルハンへとそう告げた銀閣は、10メートルは離れている距離にも関わらず、居合の構えを取った——しかし、それは今までの自然体からの構えとは違う

体の半身を限界まで捻り、まるで収縮しきり、今にも飛び出しそう

なバネのようにギリギリと言う音が銀閣の体から響く

「———な、何を？」

その異様な雰囲気思わず敵である銀閣へと問い掛けたドルハン

「—————」

しかし、銀閣は何も答えず、ただ視線だけがドルハンを射抜く

———ゾクリ

「————ツ!??」

得も言えぬ悪寒を感じたドルハンは、すぐさま硬質化した体を丸め未知の攻撃へと備える

「零閃編隊・応用型—————神風!」

その瞬間、全身で溜めたバネを爆発させた銀閣は技の名の通り“神速”の速度にて鈍を振り抜いた—————そして、銀閣が刀身を鞘に納める事無く、振り抜いた体制で止まった時

———ヒュン

と、音がようやく、銀閣の居合の速度に追いついた後、銀閣はゆっくりと刀身を鞘へと納めた

———キン

「————っ！？　グアアアア！？？」

その瞬間、体を丸めて身を守っていたドルハンが絶叫を上げる。

その体には、横一直線に深い斬撃の傷が刻まれていたのである。

「————はあ…さすがに、最初っから一刀両断にはできねえか

まあ、零閃を“跳ばす”って思いつきは間違いじゃなかったって事だな」

何でも無いかの様に話す銀閣だが、ドルハンにとっては悪夢のような言葉だった。

堅いはずの自分の体をただの人間の体の様に切り裂く剣技を持つ男と知っていたが故に距離を離して戦うと決めた筈なのに、その男はその距離と言う弱点すら克服していたのだ。

「まあ、しかし、アンタらに会う前に魔物と戦って無かったら出来なかった芸当だったがな…今の所まだ、こいつは斬刀狩りが発動してねえと使えねえ技だったからな」

そうドルハンへと語る銀閣だが、当然ドルハンにはそんな事は理解できない————

だが、ドルハンはこの瞬間、銀閣以外の者への意識を完全に無くしてしまっていた。

「隙ありいいいい！！ 全力ランスアターーーック！！」

「――っ！？ しまっ――がああああああ！！？」

その隙を見逃すランスでは無く自身の全力の一撃をドルハンへと放ち、それをもろに喰らったドルハンは絶叫を上げて倒れ込んだ。

「あーあ、結局あのムシ使いのオッサンが負けちまったな」

「ちょ、そう言う言い方は拙いんじゃない？ ほらカロリアさんもいますし」

「……大丈夫」

「あまり、無理をする事は無いぞ……ム？ しかし何やら様子が可笑しいな……」

「ん？……うわッ！？ あのおッサン体中からムシが突き出てきやがった！？」

「暴走って奴ですか！？」

——あつ、一緒に居た女性を連れて逃げましたね……」

「冷静な判断だ、あれ以上の戦闘はあの男にとっても勝ち目など無かっただろう」

「……………」

「————えーと……結局、どうしますか？ 残った人達はどうもムシ使いの毒の解毒薬が欲しい見たいですけど……」

「……………後で……カロがこっそり私に行く……」

「大丈夫かよ？ なんだったら俺らが持って行ってやってもいいんだぜ？」

「……………いい……………ムシ使いの問題は……カロの問題……」

その言葉に、男三人は何とも言えない表情をするが、それ以上少女に対して何も言わなかった。

式拾遺語く解毒薬を探せ！く（後書き）

後語り

銀閣、新技を発表するの巻

要するによくある鎌鼬ですね、あまりの速度と鋭さによって発生した真空状態がうんぬんかんぬん・・・化学は苦手なんでまあアバン○トラッシュや神鳴○・斬空閃みたいな感じですよ

久しぶりな戦闘シーンな感じもしますが、戦闘場面のたびに自分の文章力の無さをヒシヒシと感じます・・・ちゃんと表現出来ているのか、読者がきちんと場面がイメージ出来るかように出来てるかとか考えると……

まあ、もともと小説の才能があるなんて自惚れていないんで、自分のベストを尽くしてこの程度だと納得してもらおうしかないんですがね

あとこれは裏話ですけど、ゲームのイベントちよい消化しようと思っ
って任務を受けてたらアバター様に一回全滅させられたのはここだけの秘密です……畳返しいい！！お前邪魔だあああああ！！！！

序盤で出てくる畳返しのウザさは異常でしたww

幕間（前書き）

前語り

ヤバイ、今日全然続き書いてないから書き溜めがなくなった・・・

一応明日は一日ゆっくりする予定なんで大丈夫だと思いますが、もしかしたら毎日更新止まる可能性が無きにしも非ずな感じです・・・

明日で二話分書ければ取り戻せるんですが・・・

幕間

——カオルの受けた毒もランス達が手に入れた解毒薬ですぐさま治り、グリーン隊一同は安堵の息を漏らし、新たな任務に励みつつ、日常を過ごしていた……

——新技開発

銀閣は基本的に任務の無い日は、部屋で寝ているか、散歩をしているか、森で剣を振っているかのどれかで一日を過ごしている。

「——零閃編隊・五機」

その瞬間、銀閣の周りにハラハラと落ちて来ていた木の葉が五つ同時に切り裂かれた。

——今日の銀閣は剣を振るう日の様だった……

「——精が出ますね、銀閣さん」

森の中で一人剣を構えている銀閣に話しかけるのは、先日体調を戻したカオルであった。

「——副隊長さんか…昨日の今日で、こんな所まで歩いて大丈夫

なのかい？」

「心配には及びません、ムシ使いの解毒薬はとても良く効きましたから、もう普段と全く変わらないくらい動けます」

そう言って控えめに拳を握る事で元気をアピールするカオル

「——それはそうと、皆さんから銀閣さんが新しい技を習得したと聞いたのですが……」

「……そんなもん見ても特にはならねえと思うけどな……」

「いえ、武芸者として、銀閣さんの剣技は一種の完成された芸術と言っても過言ではありません、ですから新たに技を会得したと聞いて居ても立ってもいられず見に来てしまったのです」

そう言って年甲斐も無く輝いた瞳で見つめるカオルに溜め息を一つ

「……ハア、まあ別に減るもんでもねえから構わねえ……と言いた
い所なんだがなあ……」

生憎、新技の神風はまだ斬刀狩りが発動してねえと使えないんだよ」

「残党狩り……以前から何度か御聞きしますが、それはどの様な技
なのでしょう？」

「どの様な技……と言われてもねえ……」

「——正確に言っちゃまうと、斬刀狩りって言うのは俺の技じゃ無く、
俺の持つこの“斬刀・鈍”の限定奥義なんだよ」

そう言って腰から鞘ごと刀を持ち上げてカオルへと見せる銀閣

「鈍」：ですか？ 随分と斬れ無さそうな名前ですね」

名前を聞いたカオルがそう答えると銀閣は同意するかのようにな少し笑った

「確かにそうだな：だが、それはこいつを創った刀鍛冶師の皮肉だろうな……この刀は切れ味を主観に作られていて、どんな物であろうが一刀両断してしまえる刀なんだよ……」

「——それは、少々恐ろしい物ですね……ですが納得が出来ました、その切れ味に銀閣さんの居合の技術が組み合わさってあれ程の攻撃力を生み出すんですね……」

それで、限定奥義とはなんでしょうか？」

「——まあ、今実際にやる訳にもいかねえから、口で説明させて貰うとするか……」

俺のご先祖様は昔、この刀を幕府——この国で言う長官か——に提出を命じられた事があった……だが、ご先祖様はそれを拒否した」

唐突に始まった銀閣の昔話したが、黙って聞き入るカオル

「そうしたら、幕府は力尽くでこいつを奪おうとして、一万の兵力を出してこいつの奪還にやって来たのさ」

「一万……」

「そして、俺のご先祖様はこんな刀一本のために、その一万の兵を

全部切っちゃったのさ」

「—————そんなっ!？」

その話を聞いたカオルは驚愕を表す…

たった一人の人間が一万にも人間の相手を勝つ事など普通では考えられない

「まあ、そう思うわな……しかし、その一万人数りの秘密が、“斬刀・鈍” 限定奥義・斬刀狩りだ

切った相手の血を鞘内に滴らせ、じつとりと湿らす事により、鞘との摩擦係数を限りなく減らす事で、居合抜きの速度を上げ、零閃は光速に達する……斬れば斬るほど早くなる

————それが斬刀狩りだ」

「……………」

その話を聞き終えたカオルは絶句していた。

その様な人間が居る事よりも、その様な武器が存在することに……

「————ふああ……この話はこのくらいにしとこうぜ……それはそうと副隊長さん

————今さっき、ちょいと思いついた技があるんで見てくれないかい?」

「え? ええ、私で良いのなら構いませんが……」

「ありがとよ—————フツ」

カオルへと礼を言った銀閣は近くに生えていた木を勢いよく蹴りつけ、揺さぶった。

当然、揺れる木から大量の木の葉が舞い散り、その木の葉は銀閣の周りを囲んだ

その中で銀閣は居合の構えを取り、静かに呟く

「零閃編隊・局地型——紫電」

「——なるほど……その発想は考え付きませんでした」

「いやいや、俺も少し前まではこんな技は考えもしなかったんだけどねえ…」

「ですが、この技と神風が備われれば、どのような相手であろうと銀閣さんに敵はいませんね」

「そいつはちよつと言い過ぎじゃないかい、副隊長さん」

その後、銀閣の新技について暫く語り続ける二人であった・・・

—————ヘルマン皇子？

ある日突然、ランスがヘルマン皇子であるパットン・ミスナルジをアイスフリームへと連れて来た（正確には任務でだが、その任務に関与していなかった銀閣はその事を知らない）

さらにはグリーン隊に所属することになり、幾人かわ寝耳に水の状

態で、ヘルマンの皇子はどのような人物か興味を持つが、実際は気さくな大男だったため、それ程時間を掛けずにアイスフリームに馴染んで行くのだった・・・

その日は、珍しく二日続けて特訓のために森へと訪れていた銀閣は、既に特訓を始めていた先客へと声を掛ける

「――よくやるねえ…この国の王さんといい、王族って言うのは自分からわざわざ戦いに行くもんなのかい？」

「――ん？ おお、確かアンタは奴隷観察所あそこに居た…アンタもここに來ていたのか！」

「まあ…ねえ――」

「何だよ、水臭えな…同じ釜の飯を食った仲何だからもっと早く声を掛けてくれれば良かったのによお」

「いやいや、別にアンタと一緒に飯を食った覚えは無いんだけどねえ…」

「――ん、そうだったか？ まあ細かい事は良いじゃねーか」

――そう言って笑うパットンだが
実際、奴隷観察所では部屋が離れていたため、銀閣とパットンが共に食事をするには無かったのだが…本人にとってはどちらでも良い事だったようだ。

「つーか、ここに來たって事はアンタも訓練かい？」

思い出したかのようにそう尋ねるパットンに銀閣は苦笑しつつ答える

「まあ、それほど大層なもんじゃねえが……邪魔になるようなら、俺はもう戻るが……」

「いやいや、そう言わずに折角だから手合せでもしようぜ……俺も偶には対人戦の特訓もしたかったしな！」

笑いながらそう言うパットンに銀閣はこう答える

「――別に俺はそれでも構わないが……ただし、そんな時には、アンタは真っ二つになってるだろうな」

――どこかで自身が言われた台詞をアレンジしてパットンに言い放つ銀閣の笑顔はとても寒気がする物だったと、後にパットンは語るのだった。

「ふああ――それにしても……国を追われて隠居生活ねえ……何処となく親近感を感じるかもしれないねえ」

「ん？　って事はアンタも祖国に追われてるのか？」

「――――昔の話しさ……ご先祖様がちよいと御上に逆らって一万ほど切っちまってねえ……それ以来、先祖代々、城の中でたまに来る国の人間を迎え撃つだけの隠居生活をしてただけだよ」

「そ……そうか……アンタも結構、大変だったんだな……」

「—————なあ、お兄ちゃん…アンタ、あんな所にわざわざ隠れてまで国から逃げ延びて、何がしたいんだい？」

「む……………」

唐突に掛けられた銀閣の質問に答えあぐねて無言になるパットンだが、パットンが答える前に銀閣が続ける。

「——まあ別に、アンタの事情はどうだって良いんだけどねえ…
…もう一つだけ、聞きたい事があるんだけど、いいかい？」

「内容にも寄るが、なるべく答えるぞ……」

「—————アンタ、守るものが有るかい？」
その言葉に少し考えるパットンだが、考えが纏まったのか銀閣の目を見て答える。

「国……だな……今は身を潜めてはいるが、何時かはヘルマンの政権を取り戻す事が今の目標でもある—————いや、そうになると今俺が一番守るべきなのは自分自身か」

最後の言葉は笑いながら言うパットンを銀閣は黙って見つめるだけであった……

———そう問い掛ける銀閣の内心を知るものは、誰もいなかった

幕間（後書き）

後語り

モチベーションが下がって来た感じがしますね……

ってかランス？はデータの引き継ぎとかボーナス要素とか無いから初めからすると本当に一からやり直さないといけないから面倒で仕方ない……正直、レベル上げに時間を取られて進まなくなると執筆に影響があって仕方がない……

まあ、今回書き溜め進まなかったのはずっとニコニコ見てたからなんで、実際は自業自得なんですが……頑張って次の話しは前後編にして明日纏めて書き終えられる様にするのが目標です。
そうすれば今日の分は取り戻せる！

そんな訳で気合いが入る様に感想お願い（ry

式拾式話語く占拠された治安本部を解放せよ!く前編(前書き)

前語り

今更気づいた

残党狩りⅡ×間違い

斬刀狩りⅡ○正解

……………う、うわあああああああああ!!

超恥ずかしかったです、指摘される前に修正しましたが、どっかに残ってるかも……

式拾式話語く占拠された治安本部を解放せよ！く前編

――――王者の塔

「――治安本部が占領されてる!？」

「やはり、伝わっていなかったか……」

自室で仕事を片付けていた千鶴子は定時報告に現れた右衛門左衛門の話しを聞き、声を張り上げた。

「やはり…と言うのはどういう事かしら？」

「占領しているテロリストは千鶴子殿を連れて来るように要求しているらしいのだが…各長官達は、テロリストには屈しないと言う建前で要求を拒否している

……さらに占領している者達は、要求が呑まなければならない時間に一人づつ、職員を見せしめに殺すと明言している

故に長官達は万が一千鶴子殿の耳に入れば体面を気にせず現場へと向かいかねないと考え、情報隠蔽をしていたようだ」

「あいづら……プライドばかり高くてやるべき事が全くわかって無いわね……私に事件を隠す前にするべき事があるでしょうが!」

「――――現段階で既にアレックス將軍を筆頭に光の魔法団が治安本部を包囲はしているが、事態の進展には至っていないようだ

……それと、先の要求が出されたのはちょうど一時間前になる」

「——待ちなさい!?　　と言う事は既に一人の職員が犠牲になつてゐることじゃない!?」

焦った様に問いただす千鶴子だが右衛門左衛門は極めて冷静に

「二人は愚か、制圧の際に何人も殺されているだろう」

「—————ッ」

そう答える右衛門左衛門に千鶴子は顔を顰め、冷静さを保つために天井を見上げる。

「(——落ち着きなさい……冷静になればそんな事直ぐに分かるじゃない)」

「——それで?　　そのテロリストはやっぱりペンタゴンかしら?」

「不違、ちがわずそもそもこの国でこれほど大掛かりに動く組織は其処ぐらいの物だ」

その答えを聞いた千鶴子は少しの間掌で目を覆う

——そして、ゆっくりと顔を右衛門左衛門へと向け命ずる

「任務よ……治安本部を制圧しているペンタゴンを速やかに無力化し、捕えられている職員を解放しなさい」

「—————方法と…犯人の処遇は?」

「全て任せるは……アレックス君と協力するなら、私が彼に一筆書きますが」

「了解した、直ぐに治安本部へと向かう——————それと、先日のあれを念の為に持って行くが構わないか？」

「構わないわ、その代わり、しっかりやってくださいね」

「言われずとも」

そう告げた右衛門左衛門はその場から消え去った。

その後、全速力で治安本部のあるオールドゼスへと向かう右衛門左衛門だが、如何せん距離が離れていたため、一時間を要してしまうが無事に到着した。

「失礼、アレックス・ヴァルス將軍で違いないか？」

右衛門左衛門は到着して直ぐに、この場での最高責任者である光の將軍・アレックスを見つけ話しかける

「ああ、その通りですが…貴方は？」

突然現れた仮面の男に動じることなく問いかけるアレックス

「失礼、紹介が遅れた

——私は山田千鶴子殿の部下である左右田 右衛門左衛門と申します

此度の事態の収拾を千鶴子殿より命じられた者です」

——これが証明です、と言いながら千鶴子に渡された手紙をアレックスへと手渡す

「なるほど、心強い助っ人です

——では、作戦を考えましょう、こうしている内にも犠牲者が増えるかも知れません」

「その件ですが…私が単身で内部に潜入するので、アレックス殿にはこのまま正面からの制圧をお願いしたい」

その作戦は右衛門左衛門が危険過ぎると反論しようとするアレックスだが

「それは————いえ、それほどまでに自身があると言う事です……わかりました、気をつけて下さい」

右衛門左衛門の纏う反論を許さぬ雰囲気と彼自身が肌で感じる右衛門左衛門の実力を察し、結局は特に反論する事なくその作戦に同意するのであった。

その後、アレックスに治安本部へと侵入するルートを聞いた右衛門左衛門はすぐさま侵入を果たし、身を隠しながらペンタゴンの幹部を搜索していた。

「（——相生拳法・背弄拳）」

「————ん？ ガッ！！？」

途途中で見張りのために廊下に立っているペンタゴン団員には背

弄拳で背後に回り首元に手刀を放ち意識を刈り取る事でやり過ぎしていた・・・

「（しかし、思ったより数が少ないな…否、この血の量からすると治安部隊との戦いで数を減らしているのか…ム？ 私の後に続いて何人か侵入しているのか？）」

廊下に飛び散る血液や倒れている死体の量から現状の把握を済ませる右衛門左衛門は自分の来た道から何人かの気配を感じ、身を潜めて観察するのであった。

「（……………あれは……）」

「何だ、こいつも気絶しているぞ」

そう言って倒れている先ほど右衛門左衛門に気絶させられたペンタゴン団員を剣先でつつくランス

「ランス様、折角気絶してるんですから、あまり刺激しない方が…」

不安げにランスに語るシイル

「それにしても、これで5人目よ？ やっぱり私たち以外に誰かが先に侵入してると考えて間違いないんじゃない？」

そう隣のカオルへと問い掛ける魔想志津香

「そうね——それに多分私と同じ忍者かもしれないわ……外傷も争った跡も無く一撃で意識を狩られているみたいだし」
気絶している男を観察しながら呟くかなみ

「何にしても、余計な体力を使わなくて楽だし良いんじゃないか――ふぁあ」

「…………同意…………グウ」

こんな場所でも何時もと変わらず無気力な銀閣とセスナ

「こら！ 寝るなセスナ！ 何時敵が出るか分からないんだから」

「プリマちゃん優しー☆ モロミちゃんにもその優しさを分けて欲しいなー☆」

「（――アレックス様が先ほど言っていた仮面の男…………やはり彼がここに居るのかしら…………）」

その他にもロッキー、バーナード、タマネギ、リズナ、マリア――
――ようするに、グリーン隊の全メンバーが揃っていた。

「（――宇練銀閣…………と言う事はあの一団はアイスフレームか…………何故ここにいる？」

――ペンタゴンとの協力？ だが奴らの会話から推測するとむしろその逆か…………どちらにせよ、もうしばらく様子を見るか…………）
そう判断した右衛門左衛門はランス一同に気配を消しながら追跡を始めるのだった。

馬鹿は高いところが好きと言うランスの意見でランス一同はひたすら上の階へと進み、最上階付近の部屋でネルソンらペンタゴン一団と遭遇し、今回の暴挙とも言える作戦の停止を説得するカオルだったが、ネルソンは聞く耳を持たず部屋の奥へと進んで行った。

「なんなんだ、あれ」

「説得できそうにないですね…」

「そうですね……」

ランスとシイルの呟きに答えるカオルだがその表情は優れない

「まあそれでも、ウルザちゃんの依頼があるからな
何とか出来る方法を考えよう」

そうして暫く他のペンタゴンメンバーと会話をし、その際にウルザがかつてペンタゴンの幹部であった事や、考えや思想が合わず、アイスフレームを創りだしたのだと知った一同だったが・・・

「提督、16時30分です」

ネルソンの部下が突然現時刻を伝えるとネルソンはその言葉に頷きながら

「ウム、時間になったか……」

そう言って顔色を変える事無く続ける

「しかたあるまいな……悪いのは決断出来ぬ政府の奴らだ」

「…時間？」

「気になるのだったら、一緒に来ると良い

我らの闘志がいか程のものか、彼奴に教えてやる時間が来たのだよ」

不審げに問いかけるカオルにそう答えるとネルソンは手近の扉へと姿を消した。

「なんなんだ？」

「何をするのかはわかりませんが…
様子を伺いに行った方が無難かと…」

「うむ、そうだな」

——ネルソンが移動した先は治安本部最上階の外が望めるバルコニーが設置されてある場所だった。

そこにはネルソンの部下達が二列に並び、さらには拘束された治安隊の人間が何人も居た。

ネルソンは手摺に向かい、そこに設置された拡声器を手にするとネルソンは治安本部を包囲している正規軍を見下ろしながら語り始める。

「聞こえているかね、愚かな政府の犬ども

私こそがペンタゴンのリーダー、ネルソン・サーバーである

我らの要求を出してから既に3時間が過ぎた、
だが、今だ回答は得られないようだな

我々の要求――四天王リーダー山田千鶴子がここに来ること……
ただ、それだけの事に、どうしてここまで時間が掛かるのかね？

我らの殲滅準備に忙しいのかね？

政府は、ここで人質になっている者達の命よりメンツが大事と言う
訳か？

ここにいる者達は、政府の為に働いているというのに……」

そこでネルソンは一端言葉を止め、階下の人間と拘束されている治安隊の人間に目をやり、続ける。

「そのような、政府に忠実で、今も救援が来ると信じている者達と……
また、外で蟻のように地面を這っている我らの殲滅を企んでいる者達に

我らの闘志がいかほどのものか確認して頂こう」

ネルソンは後ろを振り向くと後ろに居る部下に、目で合図を送った。

「先ほどまでは、1時間に1名、刑していたが、これからは5名にする」

ネルソンがそう言うのと後ろに控えていたペンタゴンの兵士が縄で縛られた治安隊員の一人を連れて来た。

「や、やめろ、やめてくれ！」

「可哀想だが、自分たちだけが可愛いと思っている政府の為に犠牲になって頂く」

必死で命乞いをする男にネルソンは視線を向けずに冷たい声で答える。

「う、うわああああああ!!」

その治安隊員は二人係でバルコニーから落とされた――――
だが、落下する男に高速で接近する影がその男を捕えた

「人間確保」

その影は機械的な声を出し、落とされた男を抱え、ゆっくりと降りて行く。

「なっ……何だあれは!?!」

突然の事に驚くエリザベスだが無理も無かった。

治安隊員を助けたのは奇妙な人形だった、普通の人型の人形とは違い腕と足が4本付いており、さらにはその4本の足を高速回転させ、まるで竹蜻蛉の様に空を飛んでいるのだ

「―――念の為に日和号を連れて来たのは正解だったな」

―――ドス

「ぎゃああああ!!?!」

その場にいる人間すべてが突如現れた謎の人形に意識を奪われた瞬間、他の治安隊員を見張っていたペンタゴンの兵士が背後から心臓を一突きされ、絶叫を上げた。

「――君は何者だ：」

何時の間にか自分たちの直ぐ傍まで接近していた仮面の男にネルソンが殺気を込めながら問う

「不答」
こたえず

「きつ――貴様あああああ！！」

パニックに陥りつつも、その男：右衛門左衛門に一斉に襲い掛かるペンタゴンの兵士達

しかし、そこでランスは捕えられている治安隊員の中にキューティーの姿がある事に気づき、近くに居たペンタゴンの兵士を蹴り落とした

「ランスキーック！！」

「ぎゃあああああああ！！」

悲鳴を上げながら落ちていくペンタゴン兵士だが、彼も空飛ぶ人形に捕まり命は取り留めた……最も、地面に降ろされた瞬間に正規軍に捕獲されてしまったが：

「なっ……貴様、何をする！？」

突然のランスの行動にペンタゴンの兵士の一人がランスへと怒鳴り付ける

「あほか、可愛い女の子が殺されかけたのに俺様が黙っている訳が

ないだろう？」

ランスはそう言いながらキューティーを抱え上げる

「女を殺す奴に正義を語る資格は無い！！」

「貴様——！！　あの仮面の男と同じく提督の作戦の邪魔を——！！」

ネルソン提督の思慮深い計画もわからぬ愚か者には死を——！！

「——かれ——！！」

怒りに震えるエリザベスは自分の近くにいる団員にそう指示をし、
右衛門左衛門に向かって、いる以外の団員はランス達へと襲い掛かった

式拾式話語く占拠された治安本部を解放せよ！く前編（後書き）

後語り

何とか今日は8000文字まで書けたんで昨日書き溜め出来なかった分の遅れは取り戻せました。

しかし、なんか出来が酷いことになってる気がががががががが
今回ランスたちがあんまり目立たないですね……次回もあんまり目立ちません

式拾参話語く占拠された治安本部を解放せよ!く後編

——右衛門左衛門とペンタゴンの兵士達の戦いは一方的なものだった……

「——ハッ」

短く息を吐くと同時に右衛門左衛門が放った無数の手裏剣は兵士達の急所を精確に打ち抜く

「——ガッ!?!?」

「い、いでええええええ!?!」

苦悶の声を上げる兵士達を右衛門左衛門は容赦なく階下へと蹴り落とす

「——人間認識・即刻救助」

そして、落とされた兵士達は右衛門左衛門が連れて来た四季崎記記の完成系変体刀が一本、“微刀・釵”こと日和号によって捕まり、正規軍に捕獲されていた。

——何故日和号がここに居るのか、それは先日右衛門左衛門が王宮博物館で見つけた物こそ、何を隠そう日和号だったのである。

本来、製作者である四季崎の命に従い人間を見つければ即殲滅する様にインプットされていた日和号だったが、右衛門左衛門が起動させた時、どう言う訳か、何の命令も受けていない状態だった為、今では右衛門左衛門の指示を聞く忠実な人形になっているのである。

そんな彼女が今回与えられた命令は、『落ちてくる人間を助け、地面に降ろせ』であった。

それ故に、右衛門左衛門は相手に止めを刺すことなく落とす事で、必要最低限の労力で敵を無力化して行くのである……だが

「――手裏剣砲!!」

相手側から無数の手裏剣が放たれ、右衛門左衛門は即座にそれを回避する。

「ほう：久しいな、真庭蝙蝠」

「きゃはきゃは：俺は手前のそのふざけた仮面なんか二度と拝みたくは無かったんだがな…」

そう答える真庭蝙蝠はすぐさま口に手を突っ込み、絶刀・鉋を取り出す。

「ちょ!？　どんな体してるのよアイツ!？」

その様子を偶然見ていたかなみがそう言うのも無理はないだろう・
・何せ身長の3分の2程の丈の武器を口から取り出す等、どう考えても非常識だからだ。

「きやはきやは、言つとくが、俺は前回の俺とは違うぜえ…あれからも俺は毎日この組織の筋肉馬鹿共と訓練してレベルを大分上げてやったからなあ———報復絶刀!!」

そう言って切り掛かる蝙蝠の攻撃を両腰に差した剣を交差させて防ぐ右衛門左衛門だが———

———ピシリ

「———なに!？」

「きやはきやは!! もう一発! 報復絶刀———!!」

一撃で輝が入った剣は再び攻撃を与えられた瞬間にガギャンと鈍い音を立てて砕け散った。

さらに右衛門左衛門へと切り掛かろうとする蝙蝠だが、そこで右衛門左衛門が距離を置く為に後ろへと大きく跳躍した為に攻撃は空振ってしまう。

「———不禁得……驚きを禁じ得ないな……お前の様な者が力任せでそれ程の攻撃を出せるとは……」

そう言って痺れが残る両手を眺めながら素直に蝙蝠を賞賛する右衛門左衛門に気分を良くしたのか、満足げに蝙蝠は語り始める

「きやはきやは、言っただろうが、筋肉馬鹿共と毎日訓練したってなあ……つっても俺自身が体を鍛えたんじゃないくて、あいつ等の肉体を写し取って使ってるんだがなあ———きやはきやは」

真庭蝙蝠の言葉で、右衛門左衛門は蝙蝠の異常なまでの怪力の正体を見抜いた

「——————なるほど：お前は元々、他人に変身すること
で、その肉体を写し取る事が出来るのだったな……そして、今はそ
れだけでなく、理想的な肉体に体を操り、変化させる事でその怪力
を手に入れたと言う事か」

「そう言う事よ！！ 言っちゃえば色んな奴の良い所だけを取り揃
えてるのさ！ 俺の忍法・骨肉細工にはそう言う使い方もあったっ
つー訳よ！！」

「そして、その怪力に耐え切れる絶刀・鉋があるからこそその戦法か」

「きやはきやは、絶刀・鉋、限定奥義・超絶刀人とも名付けよう
か？」

「不知、名付けたければそうすれば良い……だが、侮るなよ真庭蝙
蝠、強くなっているのはお前だけではないぞ」

そう言って右衛門左衛門は苦無を取り出し両手に構え、真庭蝙蝠へ
と向かって行く

「きやはきやは、ごちゃごちゃうるせーよ！」

そう言いながら蝙蝠は右手に鉋を、左手に手裏剣を構え迎え撃つ。

そこから一進一退の攻防が続くが、レベルは今でも右衛門左衛門の

方が僅かに上回るが、やはり武器の差が大きいのか、勝負を決めきれないでいた・・・

「なるほど、やはり四季崎の刀に対抗するにはこの様な武器では心もと無いか…」

このままでは千日手になると感じた右衛門左衛門はそう呟きながら何かを決心したように苦無を捨て、懷に両手を入れ何かを取り出そうとしたその時

「蝙蝠様！ そろそろ最終作戦が始まります！ 急いで下さい！！」

ペンタゴンの団員の一人が蝙蝠へとそう声を掛けた。

その言葉に周りを見渡した蝙蝠は、この場には既に自分と右衛門左衛門しか居らず、さらに耳を澄ませば突入して来たのであろう正規軍が近づく音が聞こえてきた。

「ツチ……もうそこまで時間が経ってやがったか…仮面野郎、今回はこの辺にしといてやるよ」

「不逃、にがさず前回の様に私がお前を逃がすと思うか？」

「きやはきやは、確かにそうだな……だが、ここに向かって来る人間はどうかな？」

そう言って蝙蝠は鉋を持っていない方の手を口の中に突っ込み、毒々しい色の液体が入った瓶を取り出す。

「こいつはなあ、割れれば即座に空気中に溶け込んで辺り一帯の人

間を即死させる超強力な毒だぜえ……もし俺がこの場でこれを割っちまえば俺も死ぬがここに向かってくる正規軍の奴らも何人死ぬかな？ きやはきやは」

そう言っつて瓶を揺らす蝙蝠の目には恐怖や脅しの色は一切見えない……つまり、右衛門左衛門がここで戦いを続けようとすれば、自身が死ぬことになるうとも何の躊躇いも無くその毒をばら撒く意思がある事を表していた

「——————次に会う時は、必ず決着をつけるぞ」
そう言っつて右衛門左衛門は懐に入れていた手を降ろした

「きやはきやは、交渉成立ってか？ んじゃあな悪趣味仮面野郎」
そう言っつて蝙蝠は伝令を伝えに来た兵士を抱え階下へと飛び降りた。

それから右衛門左衛門はそのバルコニーで日和号を呼び出し、正規軍が到着するのを待っていた。

すると、暫くして正規軍より先にランス一同がその場へと姿を現した

「ん？」
今だペンタゴンがここに留まっていると予想していたランスは疑問の声を上げる

「あの仮面の人と変わった人形さん以外誰もいませんね……」
見たままの情報を出すリズナ

「逃げたのかしら？」

状況から考えてそう眩くかなみ

すると、その一同の後ろから光の將軍・アレックス率いる正規軍がやって来た。

「こんなところまで上がってこられたのですか…

民間人は危険だから避難する様に言ったのに」

そう言うアレックスの声は責める様子は無く、少し楽しそうな響きが混じっていた。

「————民間人？」

そのアレックスの言葉に今まで黙っていた右衛門左衛門が声を出す

「ええ、ここで働いているお友達と待ち合わせをしていたら、こんな事に巻き込まれてしまつて……」

咄嗟にカオルがアレックスに言った事と同様に誤魔化すように右衛門左衛門へと話しかける

「(————なるほど、そう言う事にしろと言う訳か)」

ガンジー王の征伐のミトの件何度か付き合っている右衛門左衛門は当然カオルの顔を知っており、意味有り気にウインクをしたカオルに事情を察した右衛門左衛門はそれ以上何も言う事は無かった。

「————あ、右衛門左衛門さん…でしたよね？」

此処を制圧していた方々は何処に？」

右衛門左衛門の姿を見つけたアレックスは問い掛ける

「^{わからず}不解：幹部の一人と戦っている内に他の兵士は逃げていた……その幹部も最終作戦が始まると部下に言われると直ぐに逃げに行った」

「そうですか……」

そこで右衛門左衛門はアレックスから視線を外し、ランス達へと近づいて行く

「ム？　なんだお前は」

そう不機嫌そうに問い掛けるランスに見向きもせず、右衛門左衛門は銀閣へと視線を向ける

「宇練銀閣……随分と此処に馴染んで来ている様だな」

「ふああ——生憎と、此処では色々と忙しくてねえ……」

「——以前の様に城の中で引き籠る訳にも行かないからか？」

「そう言う事だねえ」

「——城？」

右衛門左衛門の言葉にグリーン隊の何人かは疑問符を浮かべるがどちらとも何も答える事なく話を続ける。

「——今回は、私の任務に協力する形になったようだが……以前にもいったが、我が主に仇名す事があれば、その拾った命は無い物と思え」

「ふああ——————そこまで言うんなら、今ここで戦るかい？」

——チャキ、と腰を軽く落とす銀閣に右衛門左衛門は両手に苦無を構える

それに合わせ、グリーン隊のメンバーも正規軍に気付かれない程度に武器に手を掛けるが——

「——たたかわず不戦……そもそも、お前たちは今民間人と言う事になって
いるのだろう？」

この場で戦うのはお互いに得策ではない————アレックス殿」

「————はい？　なんですか？」

苦無を仕舞い一同にそう言った右衛門左衛門は少し離れていた場所で部下と話していたアレックスを呼んだ

「私が主から受けた命のペンタゴンの無力化と職員の救出は終わったので、戻ろうと思うのだが」

「ああ、そうですか、今回は助かりました、千鶴子様にもそう伝えて下さい」

「了解した————日和号、戻るぞ」

「了解」

アレックスへと短く返答を終えた右衛門左衛門は日和号へ指示するとその場から立ち去って行った。

「——ムッカー——！！　何なんだあの変態仮面野郎は！？　俺

様を最後まで無視していきやがった!」

そのあと、そんな声が上がったとか上がって無かったとか……

「(――――あの身のこなし……やっぱりあの男も忍者よね? それも悔しいけど私よりずっと技能の高い……ゼスにあんな忍者がいるなんて、これからの調査はもう少し慎重にやるべきかな……)」

そして一人思い悩む忍者がいたりいなかったり……まあいたんだけど。

式拾参話語く占拠された治安本部を解放せよ！く後編（後書き）

後語り

日和号登場

真庭蝙蝠パワーアップ

右衛門左衛門と銀閣牽制し合う。

注目するところはこんなもんですかね……

色々悩みはしたけど結局日和号こと微刀・釵は右衛門左衛門が所持することになりました……一応刀語知らない人のために微刀・釵の説明をします。

日和号

四季崎記紀が生前もっとも愛した女性を模したからくり人形であり、微刀「釵」そのもの、四本の腕と四本の脚を持ち、首が百八十度回転し、口にあたる部位からは槍を突き出す。動力源は太陽光。

限定奥義は逆立ちの状態になって4本の足を高速回転させ、手のばねで一気に飛び上がり、そのまま落下して敵を切り刻む“微風刀風”

ステータスとかはまだ考えてないんでまた今度って事で……一応言っと思いますが、これでもれっきとした日本刀です（汗）

原作の登場人物曰く、日本一の刀鍛冶師が作ったのだから刀に決まっている、だそうです、

そして日本の刀なら日本刀だろうと……正直無理があるけど突っ込んじゃダメだぞ！

超個人的だけど、日和号は可愛いと思います、アニメで正直萌え
ました。そして戦闘シーンは燃えました……あっどうでもいい？す
いません

式拾四話語（前書き）

前語り

基本的にサブタイや前書きに何も無い時は何も思いつかなかったか、考えるのがめんどかったかの二択です

あ、どうでも良いですね、本文どうぞー

式拾四話語

——その日以来、ペンタゴンの活動は急激に激しさを増していた……

ある時は街の広域に毒ガスを散布し、ある時は病院を爆破しその後に暴動を起こす破壊活動をし、またある時は、とある街の情報局を占拠したりと、連日活動が続けているが、その度に街の一級市民である魔法使いや軍隊、あるいはアイスフレームのメンバーが鎮圧しペンタゴンの作戦は今一つの結果ばかりだった……

——ペンタゴン基地

現在この場にいるペンタゴンの一同は重い空気を漂わせていた……

「あーあ、筋肉馬鹿の1号の野郎…逝っちまったなあ——
馬鹿だ馬鹿だと思ってはいたけど、引き際もわかんねえ程の馬鹿だったとわな」

何時もと変わらぬ声色で話す蝙蝠に周囲のメンバーは非難の視線を向ける

「蝙蝠よ……キングジョージは作戦の為に命を落としたのだ

そのキングジョージを侮辱する発言は頂けないぞ」

「へいへい……わかりましたよ提督殿

——しかしよお、「祖国の解放」？　だっけか？

何時になったらその作戦は進むんだよ」

そう問い掛ける蝙蝠にネルソンは黙り込んだ

——祖国の解放

それこそが、現在ペンタゴンが実行している作戦名であり、その内容は、この国の何処かに隠されている筈の“マナバッテリー”と呼ばれる魔物界から魔物が潜入するのを防いでいる施設である“マジノライン”のエネルギー元を破壊することで魔物をゼスに侵入させ、その混乱に乗じてクーデターを起こし、一気にゼス上層部全体を掌握してしまう——と言ったものである。

しかし、その作戦の要となるマナバッテリーが何処にあるのかが、依然として掴めておらず、最近の活動はマナバッテリーの在処を調べる為の陽動でもあったのだが、結果的には成果はゼロであり、貴重な戦力であったキングジョージを始め、多くの兵力が犠牲になってしまっているのが現状であった。

「むう……エリザベスとフットが情報局で調べても何も出なかったと言う事はやはり……」

「やっぱ、お偉いさん方の頭の中にしか入っていないって事かね」

ネルソンの言葉に合わせるようにフットはそう発言する

「蝙蝠、お前も提督に意見する前に調べる事は調べたのか？」

ネルソンを庇うように蝙蝠へと問い掛けるエリザベスだが、蝙蝠は薄ら笑いを浮かべたまま答える。

「そりゃあな、俺もそれなり地位の高い奴を拉致って尋問してみたり、貴族に変身して侵入して調べたりもしてみただよ……どいつもこいつもマナバッテリーなんざ知りもしねえよ

——こりゃあ本格的に相当な機密か、そもそも存在してねえかな」

「そ、そんなこと無いですよ！

絶対何処かにありますって（ってゆーか無かったら私がやばいんだけど）」

蝙蝠の言葉に必死に反論するこの作戦の立案者であるポンパドールだが、ネルソンはその言葉を聞かずに一人語る

「どちらにせよ、これほどの犠牲を払ってしまったのだ、もはや後には引けぬ

——皆は引き続き、作戦の実行に移ってくれ」

そう言って退室するネルソンを心配そうに見送るメンバーの中、真庭蝙蝠は他のメンバーに気付かれない程度に冷やかな目で見ていた

「（んでまた、一人部屋に戻って悩むんだらうな……

ホント、いい加減別の依頼人でも探した方がいいかもな——まあその前に、最高のタイミングで裏切ってどんな顔をするのか見てからだけだな、きやはきやは）」

———その頃、ランスは

「（ぐ……クソ、体が動かん……）」

ムシ使いの村跡の小屋の中で死にかけていた———

———事の起こりは、アイスフレームの隠れ里の孤児院にランスがやって来た事から始まった……

ランスが孤児院にやって来た時、孤児院の経営をしているキムチは朝から見当たらない年長者であるカーマを探していたのだが、そんな時、ランスの元に一通の手紙が届く。

その内容は

テロリストに所属するランスへ

一人でムシ使いの村に来るように

さもないとカーマとか言う娘の命はありません。

エミ・アルフィーヌ

との事だった。

この事態に、キムチは必死に懇願し、ランスはその頼みを受け（また自身の欲望を満たすため）単身、ムシ使いの村へと向かうのだった。

しかし、その結果、今まさに命の危機に陥っていた……

ランスは村に到着した後、奥に合った小屋の中で縛られて意識が無い状態のカーマを見つけ、その後、待ち伏せていたエミがけしかけて来たドルハンを撃退したまでは良かった。

しかし、その後エミを犯そうと油断していた際、倒れていたドルハンがその隙を突き毒針をランスに打ち込んだのである。

その結果、瞬く間にランスの体を蝕むムシ使いの毒は、徐々にだが確実にランスを死へと近づけていた――――

「（いかん、どんどん駄目になっていくぞ……無理やり動いたのがやばかったのか？

――馬鹿な……まだあの子ともあの子ともあの子ともセックスしたらんぞ……こんな所で俺が――――シル）」

ランスの意思とは関係なく、瞼が落ちる

そこで意識が遠のいて行くランスだが、ふと、自身の唇に冷たい物があてがわれている感触に気付く……

「……ッ……」

力を振り絞り、何とか目を開けたランスの目の前には、瓶をランスの口に押し当てている少女の姿があった。

「お……まえ……？」

「……飲んで……」

必死に瓶の中身をランスに飲ませようとする少女だが、ランスの唇は痙攣が始まっており、飲まずのが困難となっていた。

「あう……みんな、今日は食べ物取りに行っていていないし……どうしよう……」

ん———しょうがないよね、かる、初めてだけどうしょうがないよね……」

少女はそう言うのと瓶を自分の口に当て、中身を口に含みランスの顔を両手で固定し唇を重ねた。

その後、毒の苦しみが急激に去って行ったランスに安心した様に少女は笑い、ランスに早く此処を離れた方がいいと告げ、その場から姿を消し、ランスは動くようになった体で一先ずカーマを孤児院へと連れて帰る事にしたのだった。

——しかし、その後少女はランスの死体を確認しに来たエミとドルハンに無警戒に接触してしまい、新たな危機に陥ってしまうのであった。

「――人質の心配も無くなったランスは、部下の一部を連れて再びムシ使いの村へと訪れていた。」

「で……ここに女の子が一人いるのね？　でもなんでわざわざそんな事のために来るのよ？」

そうランスに問い掛けるメンバーの一人であるかなみ

「あの調子だと、エミの野郎はドルハンって奴の強化を狙ってまだここに居そうだからな

俺様をこんな目に合わせたからにはキッチリお仕置きしてやらんとならん！」

かなみに答えるランスは、エミが設置したであろう、一人で来るようにと書かれた看板を蹴り倒した。

「でも、何時までもこんなところにいるでしょうか？」

「知らんともかく探すぞ」

「はい、ランス様」

不安気に問い掛けるリズナにバツサリと返したランスの言葉に従い、一同は進み出した。

暫く進むとランス達は、前回の祠の前で立っているエミを発見した

「ここにいたのかエミちゃん」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

そう話しかけるランスにエミは答えない

「俺様は怒っているのだ、ランス様の顔も三度までだ

———さあ、覚悟は出来てるんだろうな？」

そう語るランスにようやく気付いた様にエミは振り向いた

「あら：下衆が下衆の交尾の匂いをかぎつけてここまで来たの？」

「なんだと？」

突然要領を得ない皮肉を話すエミにランスは問い掛ける

するとエミは扉が閉ざされている祠を見つめ、語る

「ふふ：今、家畜を増やしているところなの、ここはムシ使いにとって聖なる場所なんですって

今、その中で、ドルハンと別のムシ使いをまぐわしているの」

「えっ……」

「別の：ムシ使い？」

エミの言葉にシイルとカオルは思わず声を上げる

「俺やカオルを助けてくれたあの子の事か？」

「ええ、そうよ」

その言葉を聞いたランスは怒りを表しながら怒鳴る

「お前、あの女の子は俺様のものだったんだぞ！ それをあんなおっさんなんかには…」

——きい、とランスの言葉を遮るように祠の扉が開いた。

「あら、早かったのね、もう終わったの？」

楽しそうに問い掛けるエミだが、出てきたドルハンの表情は重い

「……出来ませなんだ…」

「ドルハン？」

「わしには…無理です…あんな子を…手込めにしてしまうなど…」

そう言うドルハンはエミに土下座をする

「お許しを…どうかお許し下さい…！」

「何を言っているの、家畜の感情なんてどうでもいいのよ
いいからさっさとやって来なさい…！」

そう言ってエミは地面に伏せているドルハンの頭をハイヒールで蹴りつけた

「こういう事は…好きあってるモンでやることです…わしには…だめです…お許しを」

「うるさいわね！ 口答えをしている間にさっさとやりなさい！！」

ランス達の見ている前でエミはドルハンを蹴り続けながら命令するが、ドルハンの意思が固い物と分かると次第に表情を消していった。

「ああ、そう、わかったわ」

「おお……」

ようやく理解してもらえたかと思ったドルハンは顔を上げるが、エミの表情が冷たい物だった

「だったら、邪魔なだけだわ、ランスを殺すと言う私の楽しみを奪った子だし」

「エミ様……？」

不安気にエミの顔を伺いながら問うドルハンにエミは冷たく言い放つ

「殺してしまうわ」

その言葉に、ドルハンだけでなくランス達も驚愕の表情を浮かべるが、

「……………っ！？ エミ様！！」

「……………え？ きゃあ！！？」

……………その刹那、何処からともなく漏れ出た殺気に気付いたドルハンは咄嗟にエミを付き飛ばした

すると、寸前までエミがいた場所を小さいナニかが通り抜け、勢いをそのままに近くの壁へとぶつかった。

「ああー、すいません蝶々さん外してしまいました…」

すると、そこにいる全員に若い男の声が聞こえ、そちらの方へと振り向くと、そこには長身の蜂のような被り物と羽を付けた男と昆虫の複眼の様な目と蝶の様な羽を付けた小柄な男が立っていた。

「馬鹿野郎、忍者が冷静さを無くしてどうする…」

——まあでも、確かに今のは聞き捨てならねえ言葉だったがな…
…おい、嬢ちゃん」

突然の乱入者に硬直している一同…では無く、今だドルハンに突き飛ばされ地面に座り込んでいるままのエミに向かって小柄な男が話しかける。

「俺達“虫組”の仲間を殺すってのは、どう言う意味だ!？」

隠す気のない怒気を放ったままエミへと問う男にドルハンは咄嗟にエミを庇うように間に立つ。

「な…：…なんなのあなた達は！ まさかまだムシ使いの生き残りが居たのかしら！」

「否——我らはムシ使いでは無い」

混乱気味に男達へと問い掛けるエミの背後の祠から、もう一人、蟬螂を扮した服装の男が現れ、背中に例の少女を背負いながら答える。

「……………何時の間に…」

先程まで自分が入っていた祠から突如現れた男に驚くドルハンだが、男は続ける

「……………だが、この少女は我々にとって大切な仲間だ…手を出すよ
うなら…容赦はしない！」

「……………んう……………かま…きり？」

そこで目を覚ました少女は自分を背負う男に気づき、男の名を呟く

「……………っ！！ ドルハン！！ もういいわ、ランス達共々、この
妙な格好の男共を殺してしまいなさい！！」

「……………了解……………しました」

式拾四話語（後書き）

後語り

とうとう登場、真庭忍軍十二頭領、蟪蛄・蝶々・蜜蜂の虫組三人衆です。

この三人仲良くて大好きなんですよ……。原作では不遇な事になっちゃったけど、あれは相手が悪すぎたよね☆

ところで、一応聞いときたいんですが……。出てきた刀語キャラのランス世界用のステータスはやっぱり欲しいですか？

今回三人も同時に出たんで、何だったら出てきた人たちが纏めてステータスだけ個別に投稿しようかと考えているんですが……。その編は意見を聞いてからにしようと思っています。

ここまで読んでくれてありがとうございます。

次回に続きますノシ

式拾五話語くムシ使い最後の同胞く（前書き）

前語り

書き溜めまたなくなた。。。。

次回に持ち直せるか不安だ・・・

式拾五話語くムシ使い最後の同胞く

——一時的に共闘する形になったランスと虫を模した格好をした男達だったが、前回よりもさらにムシを体内に取り込んだドルハンは、既に異形とも言える姿になっておりながらも健闘していた。

「——ヌウ!!」

気合の声と共に硬質化した拳で蝶々と呼ばれた小柄な男へと殴り掛かるドルハン

「うおっと!?!」

その攻撃をもろに受けた男は勢いよく後方へと飛ばされる……ように見えたが、実際にはすぐさま空中で態勢を立て直し、何事も無いかの様に着地した。

「吃驚するじゃねーか……前に戦ってるのも見てたが、ムシ使いってのは無理をし過ぎるとそんな体になっちゃうのかよ」

そう呟く蝶々はドルハンの体を眺めた

——ドルハンの体からは今、無数のムシが突き出ており、それが武器の様に模られ、もはや人間とはかけ離れている姿だった。

「ッハ!」

「ウオラァ!」

カオルとパットンがそれぞれ自身の体術でドルハンへと攻撃する

「ムン！」

「つく…」

「堅いな…」

しかし、拳だけで無く、全身を硬質化したドルハンには二人の攻撃は何のダメージも与えられていなかった

「——やはり、銀閣さんにも来てもらうべきでした…」

痛めた手を庇いながらカオルはそう呟く。

——カオルの言う通り、銀閣は今回は着いて来ていないのである…しかし、その理由はやむ終えないもので、先日ペンタゴンの毒ガステロを止める任務があったのだが、その際に毒を受けた銀閣は、元々毒に対する耐性が少なかった為か、解毒に時間が掛かってしまい、さらにようやく終わったと思えば、毒で抵抗力が弱まってしまった為か、高熱を出してしまったのである。

とまあ、そんな不運な出来事が重なり、今この場にはドルハンに対して決定的なダメージを与えられる人間は限られていた。

「——火爆破！」

——そう志津香が唱えるとドルハンの周囲一帯に爆発が発生し、ドルハンの動きを止める

「――えい、氷の矢」

そこにすかさずシイルが氷の矢を放ち、ドルハンへと直撃させた。

「――グウ……」

しかし、硬質化されたドルハンの体は、並みの魔法すら通さない鎧と化していた。

だが多少なりとも効果があったのか、一時的に纏わりつく氷がドルハンの動きを制限する

――そこで、今まで後方で待機していた長身の蜂の男が動いた。

「――忍法…巻菱指弾!!」

そう叫んだ男は蜂の針を模った様な巻菱まきびしをドルハンへと向けて飛ばし、それは見事にドルハンの右目へと命中した。

「――っがあああああ!!?」

如何に硬質化しようとも眼球までは不可能なのか、ドルハンは絶叫を上げて右目を抑えた

「やったか？」

そう問い掛ける蝶々に蜂男こと真庭蜜蜂は答える。

「片目は今ので潰せた筈です…あの巻菱はなかなか外れないので、無理に外したとしても、あそこまで深くめり込んでいるなら問題ありません」

「つぐううう・・・ハアアアアア!」

するとドルハンは苦痛にもがく様に、一同へ向けてやたらめったらに毒針を放って来た。

「うわっと!？」

「あぶね!？」

咄嗟に躲す忍者二人だが、ランス達一同はそうはいかなかった。

「ランス様! 危ないだ——ぎゃあ」

「嬢ちゃん、下がってろ——っくう」

カオルやかなみは咄嗟に反応し、その場を飛び退く事で事なきを得たが、後方で援護をしていたマリアや志津香やシルの魔法使い組と前線のランスはそうはいかず、ロッキーはランスを、パットンは後方の三人を庇い、毒針を食らってしまった。

「ぬ……こい……つわ……」

「し…痺れるだす……」

幸いにも今回の毒は麻痺系のものだったのか、二人はそう言いながら膝を着くが今すぐに命の危機と言う訳でもなさそうだった。

「――ぐ・・・グウウウウウ」

しかし、我武者羅に攻撃を続けるドルハンの様子は徐々に可笑しくなっていた。

その様子を見たムシ使いの少女・カロリアは立ち上がり必死に声を上げた。

「駄目っ・・・駄目だよおじちゃん・・・そのままじゃ・・・おじちゃんが壊れちゃうよ！」

そういいながらドルハンに近づこうとするが、そのカロリアを真庭蟪蛄が止める。

「はなしてかまきり・・・このままじゃ・・・本当におじちゃんは・・・」

「カロリアよ・・・ムシ使いに詳しい訳では無い私にはあの男がこのままはどうなるかわ分からぬ・・・しかし、お前がそこまで必死になるのだとすれば、恐らくあの男には碌な結果は残っていないのだろう」

「そうだよ・・・だから早く止めないと」

そう懇願するカロリアだが、蟪蛄は静かに首を振る

「だが、もはやあの男は止まらない、否――元々止められる戦いでは無いのであろう・・・あの男の主人であるあの娘が止めぬ限りは」

「そんな………」

「どりゃあー！ー！！　ランスアタック！！」

ひたすら毒針を撃ち続けるドルハンだが、ランスは潰れた右目の死角に入り、渾身のランスアタックをドルハンへと当てた。

するとドルハンは、今までにない苦しみ方を始める

「う……うあああああああ　あああ　あああ　あああ　あああ

———グウ、ムシが！　ムシがああ　がgg　ががつ　ががつ　ががつ　ががああ！！！」

———ドロリ———とドルハンの体は溶ける様に崩れ、無数のムシが体から這い出てくる

「ああ……遅かった……」

その状態のドルハンを見たカロリアは悲しげに呟いた……

「うわあ……ど、どうなってるんですか！？」

ムシが体から這い出すと言うグロテスクな光景に腰を引かしながら、蜜蜂はカロリアに尋ねた。

「おじちゃんは……ムシを入れ過ぎちゃったの……」
カロリアは泣き出しそうな顔を歪めながら語り始める。

「おじちゃんは……壊れちゃったの……ムシをいっぱいつけすぎて……ムシに心を壊されちゃったの……」

「なんだって？」

「あ、あの……助ける事は出来ますか？」

そうシイルが問い掛けるが、カロリアは静かに、そしてつらそうに首を振る

「もう……だめ……助ける事は……解放してあげる事が出来るのは……殺しちゃう……事……」

「……………」

大粒の涙をこぼすカロリアに、ランスは無言で剣を構えた。

「わかった……殺してやるよ」

ランスがそう言うのと、カロリアは涙を拭いながら言う

「額……額を貫いてあげて……ムシにやられちゃった人は……そうしないとすぐに死ねないの……ずっと……苦しむことになっちゃう……」

「……………」ああ」

そう短く答えたランスはドルハンの前へと立った。

「ガアアア・・・」

ランスは苦しみもがきながら、辛うじて人の姿を保っているドルハ
ンへと切っ先を向ける。

「――あばよ」

――ドス

あっけないほどにランスの剣はドルハンの額を貫いた

――瞬間、一瞬の痙攣の後、ドルハンの表情が安らぎ……地に落
ちた。

「ばいばい…最後の仲間のおじちゃん…」

そう言うとかロリアは、緊張の糸が切れたのか、再び意識を失った。

「あっ…」

「危ない…」

咄嗟にシイルとマリアがカロリアの体を支えようとするが、二人よ
り先に、虫組の三人がカロリアに近寄り、蠅螂が抱き上げた。

「――あー…どうすんだ？　蟪蛄さん」

「…………仕方あるまい…悪いが、この子の意識が戻るまで、安全な場所が欲しいのだが…」

蟪蛄はそうランスへと問い掛けた

「……ああ、別に構わん、勝手に着いて来い…帰るぞ」

そう言ってランスは部下を連れ、アイスフレームへの帰路につく――前に――

「――――つとその前にお仕置きタイムだエミちゃん!!」

「っへ？　い、いやああああああああ」

今まで空気になっていたエミだが、ランスはしっかりと覚えていたのか、一同を先に帰らせ、自身はエミとジッポリやり込むのだった――――余談だが、その際のエミは何故か幸せそうだったとか何とか……

それにしてもこの男、台無しである。

式拾五話語くムシ使い最後の同胞く（後書き）

後語り

蝶々「やったか？」↑やってないフラグいただきました。

段々キツクくなってくるくどこからともなくなってくるく
次回もく続くかく連続く更新く♪

ほんとにバイトもあっていっぱいいっぱいになって来た・・・でも
負けない！

現段階での刀語キャラのステータス情報 (ネタバレ注意) (前書き)

前語り

ちよつと展開に行き詰って来たんでその間の繋ぎ変わりに出します。

一応これも投稿に入るし毎日投稿にはなってるからイケルイケル

現段階での刀語キャラのステータス情報 (ネタバレ注意)

左右田 右衛門左衛門

LV40

HP2200

攻撃力1900

魔法力0

防御力87

魔抵力60

回避力98

弱点属性・雷

SKILL

攻撃 (手持ちの武器で攻撃します。 敵単体)

手裏剣 (手裏剣を投げます。 敵単体／遠距離)

手裏剣乱れ打ち (大量の手裏剣を投げます。 敵全体)

相生拳法背弄拳 (敵の背後に回りこみ攻撃する。 敵単体／一定確

立で即死させる)

不忍法不生不殺 (右衛門左衛門の必殺技、大きなダメージを与える。

敵単体)

技能LV

剣戦闘LV1

格闘LV2

忍者LV2

射撃LV2

近遠距離・全体攻撃・必殺攻撃何でもござれな全体的に突き抜けているオールラウンダーって感じですね・・・ぶっちゃけやり過ぎた感が隠しきれてない(汗)

でもこれからしばらくはレベルに伸び悩みそう何で後続の人たちも徐々に追い付いて来るかも……

宇練銀閣

LV27

HP300

攻撃力・989

魔法力・0

防御力・35

魔抵力・20

回避力・30

弱点属性・炎

SKILL

零閃(斬刀・鈍による高速の居合切りを行います 敵単体)

零閃編隊(零閃による連続切りを行います、数は2〜5連撃 敵単体／前列も可)

絶対領域(狭い室内で壁を背にした時、無類の強さを発揮します・・・でも基本的に使いません)

限定奥義・斬刀狩り(敵に攻撃を当てると発動します 攻撃を当て

るだびに攻撃力が上がり、さらには零閃編隊の攻撃回数が最大10まで上がります)

NEW零銭編隊・応用型 神風(神速の居合抜きによって鎌鼬で敵を攻撃します 敵単体/遠距離)

零閃編隊・局地型 紫電(????)

技能レベル

剣戦闘LV1

居合切りLV2

完全攻撃特化の一発やですね……防御面がクソ過ぎるから、本当に大変ですね

そして現段階で二人のレベル差と性能差が酷い……ってかこれだけステータスに差があって右衛門左衛門の回避力だと零閃も当たらないね……頑張れ銀閣!

続いては、まにわに四人のステータス

真庭蝙蝠

LV32

HP1400

攻撃力・1200

魔法力・0

防御力・60

魔抵力・40
回避力・80
弱点属性・光

SKILL

攻撃（手持ちの武器で攻撃します 敵単体）

報復絶刀（絶刀・鉋で攻撃します 敵単体）

手裏剣（手裏剣を投げ、敵を攻撃します 敵単体／遠距離）

手裏剣砲（口から大量の手裏剣を発射します 敵全体）

骨肉細工（自在に体を操りステータスを変更させる忍法です、また人間相手なら魔法力・魔抵力を除きステータスを写し取る事が出来ます）

技能レベル

忍者LV2

変装LV2

真庭螳螂

LV25

HP318

攻撃力・430

魔法力・0

防御力・50

魔抵力・40

回避力・72
弱点属性・炎

S K I L L

攻撃（手持ちの武器、もしくは素手で攻撃します 敵単体）
爪合わせ（爪を鋭く伸ばし攻撃する忍法です 敵単体／回数制限あり）

手裏剣（手裏剣を投げて敵を攻撃します 敵単体／遠距離）

技能レベル

忍者LV2

指揮LV1

真庭蝶々

LV23

HP279

攻撃力・370

魔法力・0

防御力・46

魔抵力・32

回避力・70

弱点属性・炎

S K I L L

攻撃（手持ちの武器、もしくは素手で攻撃します 敵単体）

真庭拳法（真庭忍軍独自の拳法で攻撃します 敵単体）

忍法足軽（自分と背負ったものの重さを消し、物理攻撃によるダメージを受けなくなります）

技能レベル

体術LV1

忍者LV2

フラグLV3

真庭蜜蜂

LV23

HP300

攻撃力・330

魔法力・0

防御力・50

魔抵力・38

回避力・58

弱点属性・炎

SKILL

攻撃（手持ちの武器で攻撃します 敵単体）

巻菱指弾（40m以内なら確実に命中する毒を塗り込んだ巻菱を发射します 敵単体／遠距離 痺れ効果・大）

技能レベル

忍者LV2

精密射撃LV2

以上真庭忍軍十二頭領の内の四人の初公開ステータスでしたー
ー
ワーパチパチ

結構ってかなり妄想入ってますが、これが自分のイメージです
これでも噛ませ犬の印象が強いまにわにを強くしようとした結果で
すよ……

共通点としては全員が忍者LV2を持ってる所ですかね、やっぱり
腐っても忍軍の頭領ですし、あと虫組全員が炎が弱点属性なのは虫
組だからと言うイメージからです。

因みに、刀語キャラは全員魔法力は持ってません、そんな物無い世
界から来ましたから。

因みに今回は日和号のステータスはまだ定まって無いのでありませ
ん……あしからず。

現段階での刀語キャラのステータス情報 (ネタバレ注意) (後書き)

後語り

イベントより何よりも珠集めに時間が掛かるのが行き詰る原因の一つとはとても言えない・・・

原作との同時進行ゆえの苦しみが、今ここに・・・

8月もうオワリダナー

幕間（まにわにメイン）（前書き）

お知らせ

八月も終わり、バイトが少々忙しさが増してきました・・・
そしていい加減大学の秋季のために自主勉強もしないといけなくな
って来たので、誠に遺憾ながら八月初めから続けて来た毎日更新は
ここでストップとさせて頂きます。

やっぱあくまで小説は趣味なので、仕事や勉学に影響あったら駄目
なんだと思います・・・・でも最低でも週間投稿は心がけ、一
話一話の文章量も増やしていこうと思っているのでどうかご勘弁を・
・

幕間（まにわにメイン）

——カロリアが意識を取り戻し、ランスの説得やアイスフレーム内でのムシ使いの差別意識の低さなどでなんやかんやあったが、カロリアは結局ランスのグリーン隊に所属することになったのだが・・・ランスはそのおまけ（虫組）については興味が無かったため、仕方なしと言うか、適材適所と言う事で、工作部隊であるアベルトのブルー隊に所属する事になったのであった。

————虫組の愚痴

「——納得いかねー！」

割り当てられた部屋で蝶々は部屋にいる蜜蜂に聞こえる様に声を上げる

「・・・・・・・・えっと、何がですか？」

「何がだあ？ 決まってるだろ！ 何で俺達までこの組織に所属しなきゃなんねーんだよ！？」

「そ、それは…この頭と螭螂さんが話し合って決めた事だから…ですけど…」

不機嫌そうな蝶々に恐る恐る答える蜜蜂だが、蝶々の機嫌は納まらない

「そこだよ、そこ！ 螞螂さんは俺達に何の相談も無く決定しちゃったからこんな事になったんじゃないか！

しかも理由がカロリアが入隊するからって——最近薄々と感じてけど、あの人絶対子供が出来たら親馬鹿になるぜ：100両賭けても良いぜ」

「あの：もう少し声を抑えた方が：」

「何びびってんだよ！ 螞螂さんは今、俺たちの隊長だとか言うアベルトって奴の所に任務を受けに行ってたんだから大丈夫だよ」

「そ、そうですかねえ……？」

「そうなんだよ！ だからお前も思っていることがあるなら今の内に言っとけ」

そう言われて蜜蜂は苦笑を浮かべながら語り始める

「まあ、確かに僕らがここに来てから色々あってカロリアさんに気を掛けてはいましたけど：螞螂さんはその中でも一番でしたね
事あるごとに世話を焼いたり遊んだり：正直あそこまで子煩悩とは考えたことも無かったですよ」

「いーや、案外あの人はそっちの気があったんじゃないのか？
子供にしか欲情出来ない性癖の奴とかもいるじゃないか」

「うわー！ それはちょっとあの人に人格を疑ってしまいますねえ……でも、この前あの二人に捕まった時も真っ先に自分が救助に向かうって聞かなかったですし……もしかしたら本当に？」

「ぎやははは、お前それ本人に聞かれたらぜってゝ殺されるぞ」

「いやいや、蝶々さんが言い出したんじゃないですか」

「そうだったな、じゃあこの話は俺達二人だけの秘密だぜ！」

「そうですね！」

「はははははははははは」

「ほう、ではその二人だけの秘密とやらを私にも教えてくれないか？」

「えっ？」

ギギギギと首を入り口に向けた二人の目に、扉を背に仁王立ちをしている蠅螂の姿が映った

顔を伏せていたため、二人には螭螂がどんな表情をしているか分からないが、身に纏う雰囲気全てを語っていた。

「えつと……何時から？」

一縷の望みを賭けて蝶々は問い掛けた。

「……お前が納得いかないと騒ぎ出した頃からだ……不満があるのなら、それを聞いて改善してやろうと思い、盗み聞いていたのだが……」

「は……ははは、い、いやだなあ蠋螂さんは……盗み聞きなんて趣味が悪いですよ……」

そう冗談交じりに話す蜜蜂だが、その顔は冷や汗で溢れていた

「そうだな……仲間に対して盗み聞きなど趣味が悪かったな……だが、そのおかげでお前たちの秘密とやらも聞けたのだがな」

「か、蠋螂さん？ 分かってると思うけど、さっきまでの話しは冗談……」

「そ、そうそう、あくまで冗談で世間話の一端で……」

「——————忍法……爪合わせ!!」

二人の言い訳を聞き終わる前に、瞳に怒りを宿した蠋螂が忍法を發動した

「「ぎゃああああああああああああああああ」」

その日、虫組の二人は（シイルが必死にヒーリングをかけ）全治数日の怪我を負ったとか負っていないとか……

———リーザスの忍者

「はあー、この前は酷い目にあっただぜ……」

蟪蛄につけられた傷が（自業自得）完治した真庭蝶々は、リハビリを兼ねて周囲の森の木々を飛び回っていた

「ん？ あれは……」

すると蝶々、自分以外の人影を見つけ、何か思いついたように笑みを浮かべ気配を消した

「———うん、特に異常はないわね……」

リーザスのヘッポコ忍者（命名・ランス）こと見当かなみは、周囲の偵察を自主的に行っていた……しかし、その背後の気配に気付けないでいた。

「さーてと……もうこの辺りの偵察も終わったし、一端戻ろうかな……それにしても、頭に何か違和感があるわね……何だろう？」

そう呟きながら、頭上を見上げたかなみの目にあるモノが映った

「———よう、やっと気付いたのか？」

それは自分の頭の上に器用に立っている蝶を模した格好をした小柄な男だった

「……………っ!?!?!?!?」

思いもよらなかった光景にパニックになる忍者（笑）

「やっぱり気配を完全に消せばバレナイもんだよなあ？ あの女はやっぱり異常だって事だな……やべえ、嫌なこと思い出しちゃった」

「……………い・い・か・ら・私の頭から降りろー!」

かなみの叫び声で、周囲に居た鳥たちが驚いて飛び去ったのだった・

「いやー悪かったな、何か一生懸命この辺を偵察してるアンタを見てついからかいたくなっちゃった……いきなりこんな組織に入られてちよっと、ムシヤクシヤしてたんだよ
反省も後悔もしてないが許してくれ」

「まあ…そう言う事なら…って違う！ 反省も後悔もしてないなら許すわけ無いじゃない!!」

悪かったと言いながらちっとも悪びれた態度をしない蝶々にななみがつっ込みを入れた。

「でもまあ、アンタが気付けばこんな悪戯も成立しなかったんだか

ら、アンタにも落ち度はあるだろ？」

「何だよ！？　そもそも気配も重さも感じなかったのにどうやって気付いて・・・言う・・・そう言えば、何で重さを全然感じなかったの？」

蝶々の言葉に言い返す際に、疑問を抱いたかなみは怒りを忘れて尋ねた。

「ん？　ああ、自分と自分が持つてる物の重さを消すのが俺の忍法だからな」

「何よそれ……」

何でも無いかの様に話す蝶々になみは呆然とする

「忍法足軽って言ってな、言っとくが俺も生まれてから相当努力して会得した忍術だぜ」

「忍術って・・・やっぱりアンタたち忍者だったのね！？　何処の忍者よ！？」

警戒しながらそう問いただすかなみに、蝶々は少々困った顔をしつつ答える

「何処のって言うてもなあ……俺達は真庭の里の真庭忍軍だって言っても分かりはしないだろ？」

「————はにわの里のはにわ忍軍？」

「真庭だ！！」

かなみの聞き間違いに力強く訂正する蝶々だが、聞いた事も無い里の名前にかなみは暫く考え込む：

「（知らない里の名前ね……もしかして最近できた新しい里なのか……でもそれなら抜け忍扱いの私を狙ってる訳でも無さそうだし……そこまで深く考えなくてもいいのかな？）」

考え込むかなみを眺めていた蝶々だが、日の高さを見て、そろそろ戻る頃合いと感じたのか、かなみに踵を返しながら言った

「んじゃあ、俺はそろそろ行くけど……アンタも忍者なら、もうちょい周りの気配に気を使うんだな——じゃあな！」

そう言い残した蝶々（忍者LV2）は木々を飛び跳ねながら戻って行った。

「——何かむかつく」

捨て台詞にイラつきながらも、言い返せない自分を情けなく思うかなみ（忍者LV1）であった。

——その頃、蝙蝠は

「はぁ、やってらんねえなホントによう」

今日も今日とて、ペンタゴンの任務と言う名の陽動作戦でとある武器庫の占領の責任者として指揮をしていた蝙蝠だったが、順調に制圧を完了し、一息ついていた時にやって来た
氷の將軍ウスピラ・真冬が率いる氷の魔法団の正規軍によって包囲されてしまい絶体絶命の危機に陥っていた

最も、実際危機に陥っていたのはペンタゴンの兵士や途中で拾った二級市民の臨時兵士だけで、蝙蝠自身は一般人に変装して、さっさと退避していたのだが……その方法が正規軍に保護して貰うと言う何とも舐め切った方法なのだが、一級市民の貴族の女性の服を奪い、姿すら奪って完全にその女性そのものになった蝙蝠を不審に思う者は誰一人としていなかった。

そして現在蝙蝠は、殲滅されているであろう仲間の状況を気にする事も無く、フラフラと元の姿で別の街の二級市民街を歩いていた。

——尚、余談であるが、現在の蝙蝠の実力であれば、將軍であるウスピラを打破する事も不可能では無かったのだが……そこまでしてペンタゴンに尽くす気のない蝙蝠にとっては、それ以外の正規軍も相手にする事が面倒過ぎてさっさと逃げて来たのだった。

——しかし、この場所がかつての仲間と出会うとは予想だにしていなかっただろう……

「!前おのこそ、いお」

「—————あん？」

突然、背後から話しかけられた蝙蝠は振り返った。

「!いおなだりぶし久、ろだ蝙蝠前お、りばっや

？か獄地か国天はここてしかしも、しるいに所えねんかわ訳なんこ
らため覚が目てっなく無が識意てれら斬に奴の閣銀は俺？だんるて
っなうどもで——

は俺ぜだんたてっ思々常てっなうろだるち墮に獄地対絶は前おくか
もとは俺、か獄地りばっやは事てっるいが前おもで」

「……………」

振り返った蝙蝠の顔を見て饒舌に語り出す男に蝙蝠は黙って聞いて
居た

「……がだんるじ感にうよるてっなく強くなとなりよ時たっ会に
前か何…かえねてっわ変気囲雰前おか何もで？れあ……よかえねや
じうまちっなくし寂やじんなんそにてっだ開再の々久、よだんる
てっ黙何、いおいお

？かす出い思ばれやてせ見に々久を“し探鱗逆・法忍”の鷺白庭真
のこ、らたっだ…よかのんてつまちれ忘事の俺てしかしも、よだん
でん込め決りまんだでま時何かてっ——」

「だー！！　うるせえー！！！！」

猛烈な勢いで話し続けるかつての世界での仲間、真庭忍軍十二頭領が一人、通称逆さ喋りの白鷺こと、真庭白鷺に蝙蝠が切れた。

「?!　だんるてっ怒りなきい何、よだ何」

「テメエの逆さ喋りにだよ！

久々に聞くと解説し辛らいわ、聞き取り難いわで面倒なんだよ！！」

「…がだんいな来出は事るめ止からるてし係関に接密に方り喋のこは法忍の俺、もてっ言事なん」

「んな逆さ喋りに密接に係する忍法なんぞ原作者もこの作者も思いついてねえんだよ！！」

大体、ここまでのお前の台詞で相当制作時間使われてんだよ！　そりゃ原作者も面倒になってさっさと死なすに決まってるわな！！」

「?!　ぞいならか分然全かのるてっ言を何が前おはに俺、蝙蝠け着ち落、お」

「だからもう喋んじゃねえー！！！！」

この後、なんやかんやあって、真庭白鷺はペンタゴンに所属するこ
とになったのである。

幕間（まにわにメイン）（後書き）

後語り

真庭白鷺まじメンドイ……

ブツチャケこの面倒さから書いてる間も出すか出さないかギリギリ
まで悩んだのは秘密です…

忍法逆鱗探し……どんな技にすれば逆さ喋りと密接に関係
するのか……考えますが、良いアイディアがあったら是非
とも教えて下さい！お願いします！

あと蝙蝠メタ発言自重w

尚、蟪蛄はロリコンじゃないです、ちょっとお父さん属性が強いだ
けですw

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4323v/>

ランス?の世界に刀語のキャラを突っ込んでみた

2011年9月27日19時04分発行